瑞穂・原ノ畑遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第 57 集 —

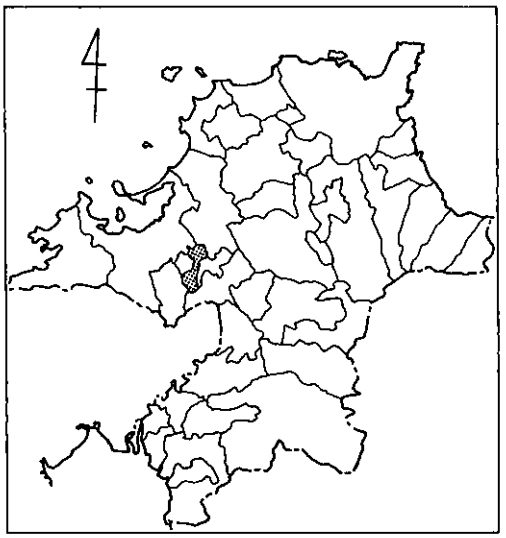
2001

大 野 城 市 教 育 委 員 会

瑞穂（みずほ）・原ノ畑（はらのはた）遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第 57 集 —



2001

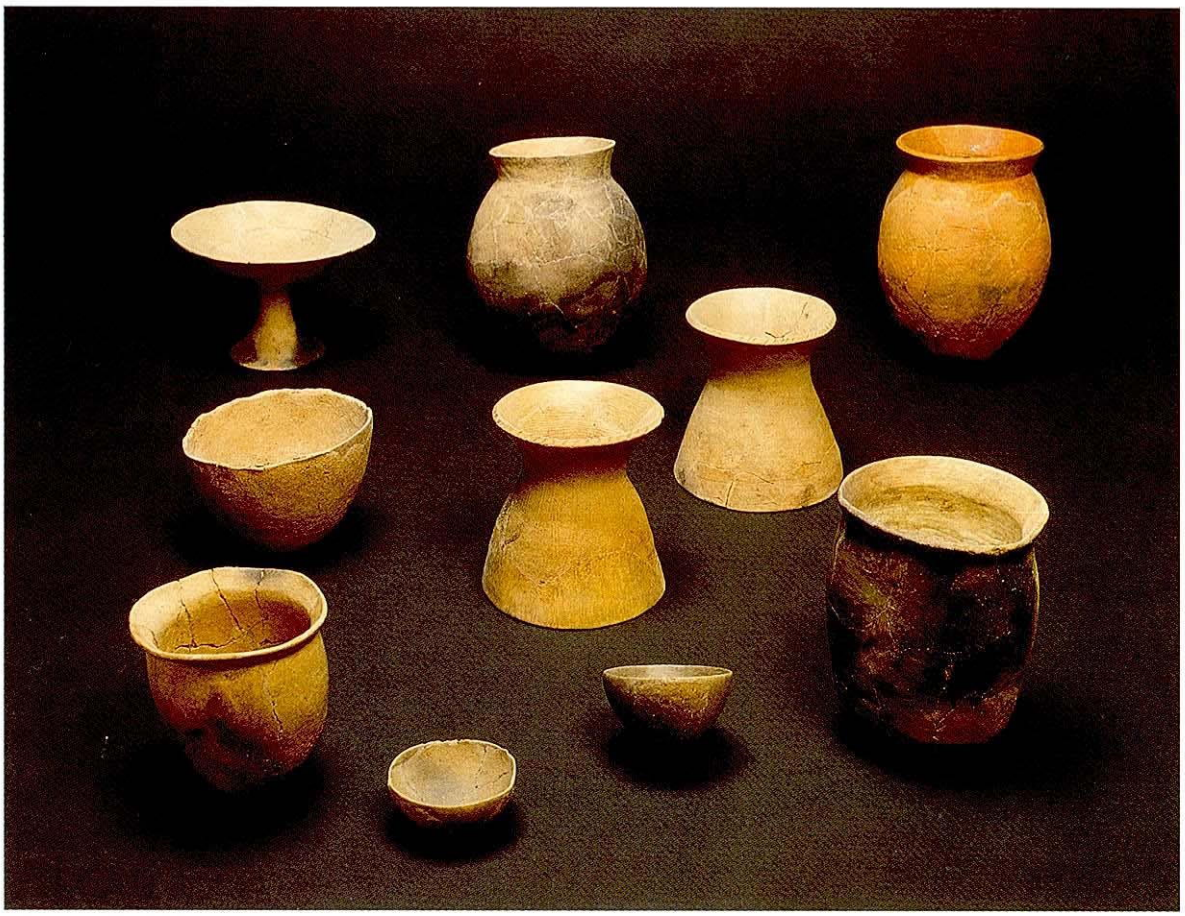
大 野 城 市 教 育 委 員 会

(1)　瑞穂遺跡第２次調査地全景

(2)　瑞穂遺跡第２次調査　ＳＥ01出土土器

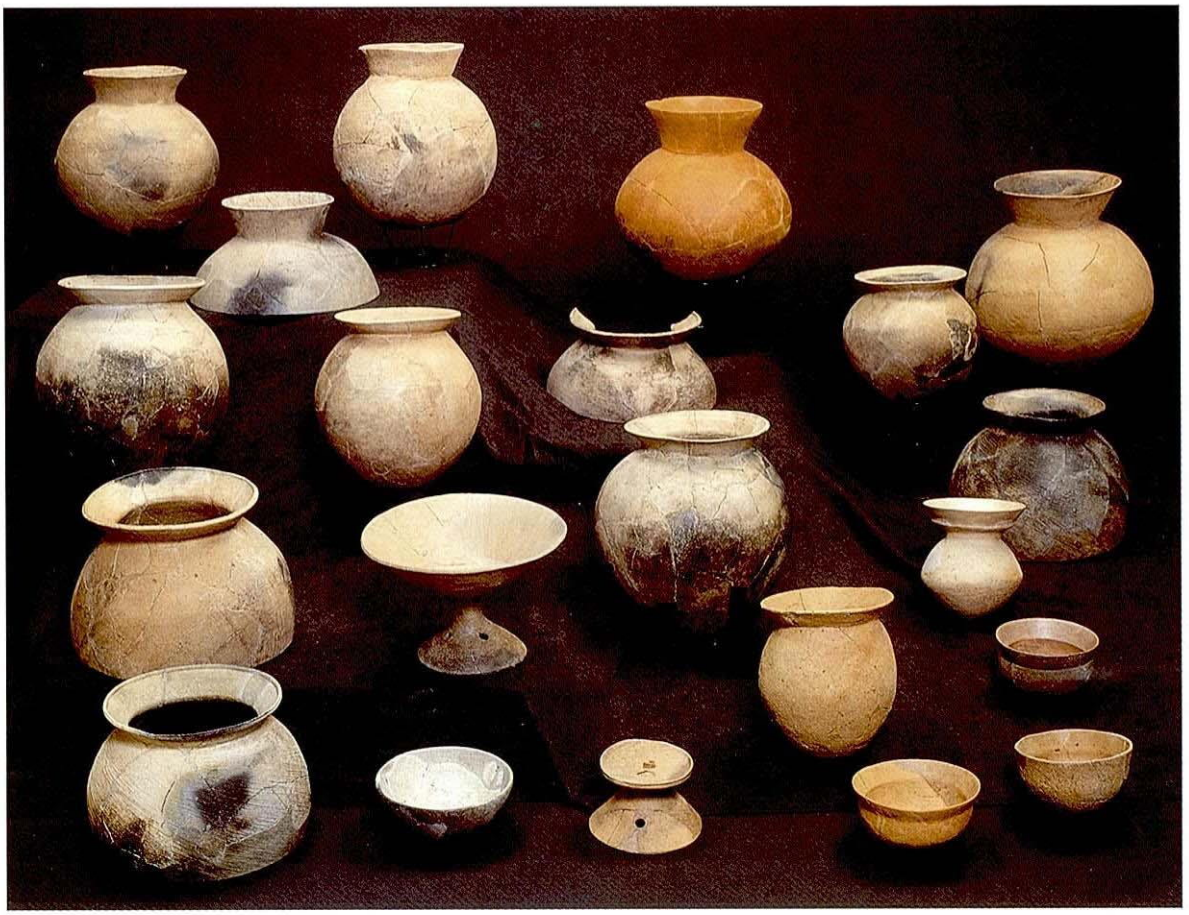
巻頭図版２

(1)　原ノ畑遺跡第２次調査　１号竪穴住居跡出土土器



(2)　原ノ畑遺跡第２次調査　ＳＫ02出土土器

(1)　原ノ畑遺跡第２次調査　ＳＫ05出土土器



(2)　原ノ畑遺跡第２次調査　ＳＫ06出土土器

瑞穂遺跡

序

大野城市は福岡平野の一角にあり、各種の埋蔵文化財に恵まれた街です。今回ご報告する瑞穂遺跡と原ノ畑遺跡は、どちらも市の中心部の住宅が密集した地域にある遺跡です。市街化が進んだ地域での発掘調査は面積で規制を受けることが多く、小面積の調査を重ねることが多くなっています。このような場合は調査地点間の関係がなかなかわかりにくいことが多くなってしまいます。そのような制約はあっても、瑞穂遺跡は古墳時代中期、原ノ畑遺跡は古墳時代前期の良好な集落遺跡であることがわかりました。調査は遺跡全体から見れば、まだまだ小面積にとどまっていますので、遺跡の規模等も判明しておりませんが、今までの発掘調査の整理作業が終了しましたので、この度一冊にまとめて報告するしだいです。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、当地域の古代史の一端が明らかになることを願っております。

最後に、発掘調査費負担のご協力をいただきました土地所有者や、調査に対して各種のご協力をいただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成13年3月31日

大野城市教育委員会

教育長　堀　内　貞　夫

例　　言

1．本書は、大野城市教育委員会が実施した瑞穂遺跡・原ノ畑遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は民間の共同住宅や店舗の建設に伴って実施したものである。

3．遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。

4．遺物実測は元吉知子が主となり、丸尾博恵・林　潤也・江上正高・坂元雄紀・木室友希が、製図は有田朱美が担当した。

5．本書中で出土遺物量をビニール袋何袋と表現する時の袋の大きさは縦38cm、横26cmである。また、整理箱何箱と表現する時の箱の大きさは内法で40×61cm、深さ15cmである。

6．本書の執筆・編集は舟山良一が担当した。

7．本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の１地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。

瑞穂遺跡本文目次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．位置と環境……3
Ⅲ．調査の結果……5
　１．調査概要……5
　２．遺構と遺物……5
　　(1). 第１次調査……5
　　(2). 第２次調査……6
Ⅳ．まとめ……13

瑞穂遺跡巻頭カラー図版

図版１　(1). 瑞穂遺跡第２次調査地全景
　　(2). 瑞穂遺跡第２次調査　ＳＥ01出土土器

瑞穂遺跡表目次

１．瑞穂遺跡出土土器法量表……12

瑞穂遺跡図版目次

図版１　(1)瑞穂遺跡第１次調査地北半（南から）　(2)瑞穂遺跡第１次調査地北半（西から）
図版２　(1)瑞穂遺跡第１次調査地南半（北から）　(2)瑞穂遺跡第１次調査地南半（西から）
図版３　(1)瑞穂遺跡第２次調査地全景（北から）　(2)瑞穂遺跡第２次調査ＳＢ01ピット
図版４　(1)瑞穂遺跡第２次調査ＳＫ01　(2)瑞穂遺跡第２次調査風倒木痕
図版５　(1)瑞穂遺跡第２次調査ＳＥ01　(2)瑞穂遺跡第２次調査ＳＥ01遺物出土状態
図版６　瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）
図版７　瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）
図版８　瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）
図版９　瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）(石鏃・ピット23)

瑞 穂 遺 跡 挿 図 目 次

第１図．周辺遺跡分布図（１／25,000）……2
第２図．瑞穂遺跡位置図（１／5,000）……4
第３図．第１次調査遺構配置図（１／200）……5
第４図．第２次調査遺構配置図（１／200）……6
第５図．ＳＢ01実測図（１／40）……7
第６図．ＳＥ01実測図（１／40）……8
第７図．ＳＥ01出土土器実測図①（１／３）……9
第８図．ＳＥ01出土土器実測図②（１／３）……10
第９図．ＳＥ01出土土器実測図③（１／３）……10
第10図．ピット出土遺物実測図（２／３）……10

Ⅰ．はじめに

瑞穂遺跡は1980年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』に190127番として登録されている遺跡で、微高地上に立地し縄文～古墳時代の遺跡とされている。遺跡推定範囲内からは、かつては甕棺も出土したと伝えられているが、正式の発掘調査がなされたことはなく、実態は不明であった。想定される遺跡の範囲内のほぼ中央部が最も高く、現在公園となっているが、その周囲の試掘調査では表土を剥ぎ始めるとすぐ地山となり、遺跡は既に削平されたものかと推定していた。しかし、やや北に離れた平坦地で試掘調査を行ったところ、溝状の遺構が確認され、本調査を実施することになった（第１次調査)。調査を行うことになった契機は建設会社の寮の建て替えであったが、既設の寮の基礎が既に遺跡をだいぶ壊している状況で、調査する範囲は200㎡という限られた面積であった。調査は1991年（平成３年）９月20日～10月10日まで行った。

第２次調査は1998年（平成10年）４月21日～５月28日まで実施したが、共同住宅の建設に伴うもので、これも調査面積は約200㎡ほどであった。当地は前述の分布地図に記された瑞穂遺跡の範囲からは外れるが、比較的接近していることもあって当遺跡の範囲に含めた。しかし、東側には既に報告している石勺遺跡があって、今後周辺の調査によっては遺跡の範囲や名称を変更する必要があるかもしれない。

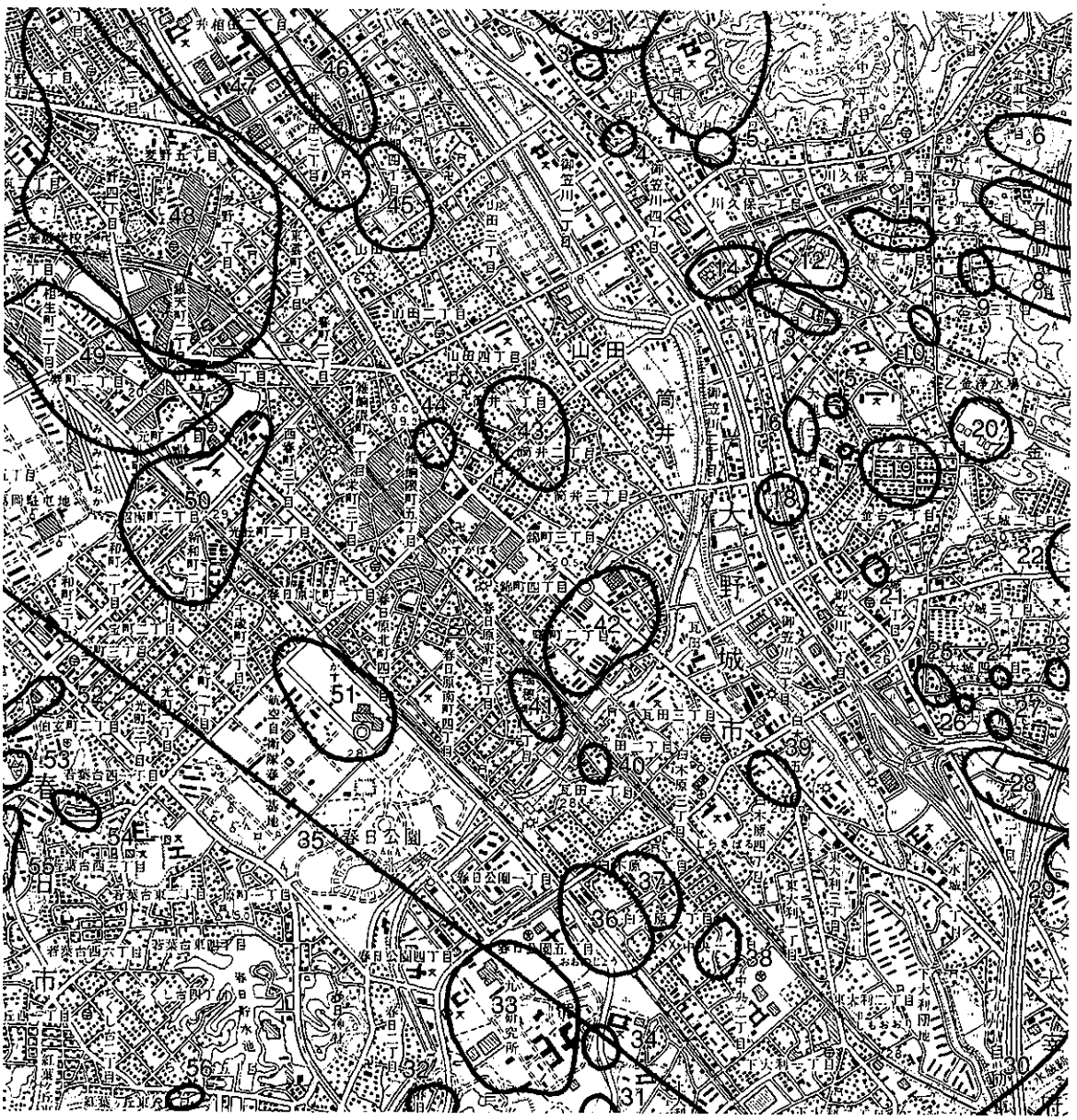
前述のように２次にわたって発掘調査を実施したが、整理作業は2000年（平成12年）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	堀内　貞夫
	教育部長	青木　克正
	社会教育課長	片岡　　猛
	文化財担当係長	舟山　良一
	主査	徳本　洋一
	主任技師	石木　秀啓
	〃	丸尾　博恵
	技師	林　　潤也
	主事	大道　和貴
	嘱託	元吉　知子

整理作業員

有田　朱美、鬼塚　穂子、白井　典子、松岡　信子、町井　裕子、村山　律子、渡辺　直美

発掘調査に際しては、調査費の負担のご協力を得た地権者の西松建設、藤井　良信氏に厚く感謝の意を表します。



第１図　周辺遺跡分布図(1/25,000)

1．持田ヶ浦古墳群	2．御陵古墳群	3．今里不動古墳	4．塚口遺跡
5．御陵前ノ椽遺跡	6．喜一田古墳群	7．王城山古墳群	8．古野古墳群
9．花園遺跡	10．薬師ノ森遺跡	11．松葉園遺跡	12．森園遺跡
13．中・寺尾遺跡	14．ヒケシマ遺跡	15．平隈遺跡	16．ウド遺跡
17．ウド古墳	18．榎町遺跡	19．銀山遺跡	20．原口古墳群
21．原門遺跡	22．雉子ヶ尾遺跡群	23．曲目遺跡	24．深町古墳
25．金山遺跡	26．金山古墳	27．笹原古墳	28．成屋形遺跡
29．裏ノ田遺跡	30．水城跡	31．池ノ上遺跡	32．向谷北遺跡
33．九州大学構内遺跡	34．池田遺跡	35．官道推定ライン	36．御供田遺跡
37．後原遺跡	38．ハザコ遺跡	39．原ノ畑遺跡	40．国分田遺跡
41．瑞穂遺跡	42．石勺遺跡	43．村下遺跡	44．雑餉隈遺跡
45．川原遺跡	46．仲島遺跡	47．井相田遺跡群	48．麦野遺跡群
49．南八幡遺跡群	50．雑餉隈遺跡群	51．駿河遺跡	52．伯玄社遺跡
53．ナライ遺跡	54．西平塚遺跡	55．高辻遺跡	56．惣利窯跡群

Ⅱ．位置と環境

瑞穂遺跡は大野城市瑞穂町２丁目を中心とする範囲が想定されていたが、今回報告する第１次調査地は瑞穂町１丁目に、また、第２次調査地は曙町１丁目に所在する。遺跡の中心とされる瑞穂町２丁目付近は第Ⅰ章で記述したとおり、削平を受けて遺構が消滅している場所が多いのではないかと推定される。当遺跡は大野城市役所に近く、市街化が進んでおり、旧地形を想定しにくい地域になっている。しかし、遺跡の東南側は一段低くなって水田となり、その先には牛頸川が流れている。遺跡は舌状に伸びた微高地状の台地に立地している。

瑞穂遺跡は過去２回の発掘調査が行われ、遺構として古墳時代前期～中期の井戸などが検出され、遺物としては弥生土器や土師器などが出土している。県の遺跡地図や口伝では甕棺や弥生土器の出土も伝えられているが、甕棺については現在確認はできていない。

また、原ノ畑遺跡も市街地の中にある遺跡で、本来の地形を復元することが難しい。しかし、調査地の東側を通る県道112号線から東は試掘調査の結果からほとんど荒い砂層であることが判明しており、御笠川左の段丘上に立地する遺跡と推定している。

本市に限らず、隣接する福岡市、春日市、太宰府市などには埋蔵文化財が数多く存在している。周辺の遺跡の分布状況を略述するが、瑞穂遺跡・原ノ畑遺跡で確認されているのは主として古墳時代（前期～中期）と奈良時代の遺構であることから、当該時期の遺跡を中心に述べたい。

まず、古墳は東側の四王寺山や乙金山の麓、その北西に延びる金隈丘陵沿いに数多く発見されている。北から持田ヶ浦古墳群〈註１〉、御陵古墳群〈註２〉、乙金古墳群〈註３〉（喜一田古墳群、王城山古墳群、古野古墳群）などである。この内、前期の古墳が確認されているのは持田ヶ浦古墳群、御陵古墳群である。その他は後期の群集墳である。また、前期～中期にかけての古墳である春日市の向谷１号墳〈註４〉は瑞穂遺跡の南西1.5kmにある。さらに、掲載した地図には入らないが、前期古墳として著名な那珂八幡古墳は瑞穂遺跡の北西約5.5kmにある。

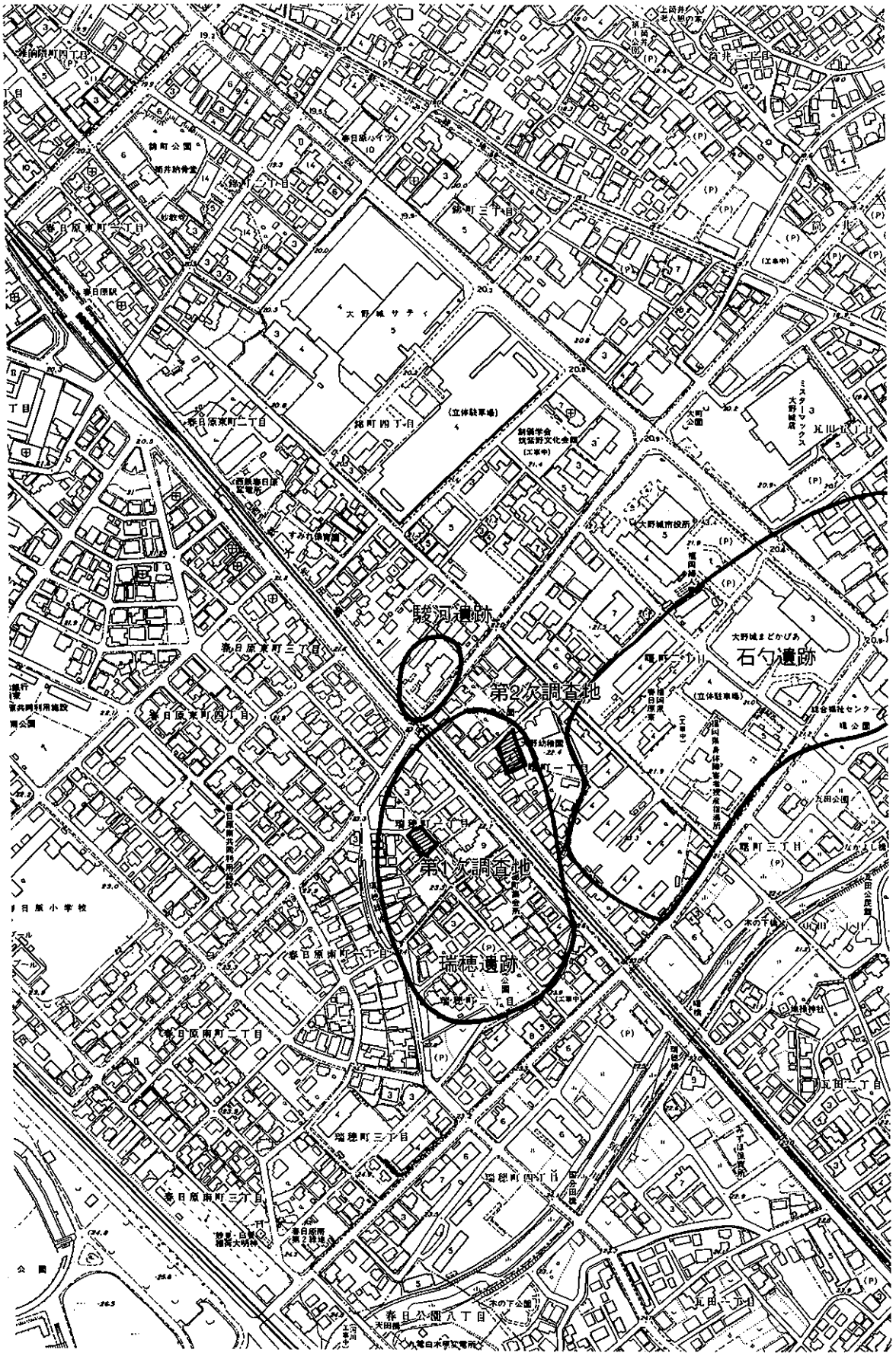
集落遺跡としては瑞穂遺跡の北西２kmの仲島遺跡〈註５〉、同遺跡のすぐ東側にある石勺遺跡〈註６〉で古墳時代前期～中期の遺構や遺物が出土している。〈註７〉

奈良時代の遺跡は周辺にはそれほど多くはないが、原ノ畑遺跡の1.5km南東には有名な水城跡があり、西門から鴻臚館まで直線的に延びると推定されている官道跡が当遺跡の西１km付近を通る。官道跡が推定されている遺跡は原ノ畑遺跡周辺では谷川遺跡〈註８〉、池田遺跡、九州大学構内遺跡等である。また、本市の市名の由来ともなっている大野城跡は東側３km程の位置にある。集落遺跡としては仲島遺跡、井相田遺跡〈註９〉、石勺遺跡、須恵器窯跡で有名な牛頸窯跡群内の塚原遺跡〈註10〉や日ノ浦遺跡等〈註11〉がある。

〈註１〉　『持田ヶ浦古墳群』大野城市教育委員会　1987他

〈註２〉　『御陵古墳群』大野城市教育委員会　1984

〈註３〉　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ』福岡県教育委員会　1977



第２図　瑞穂遺跡位置図(1/5,000)

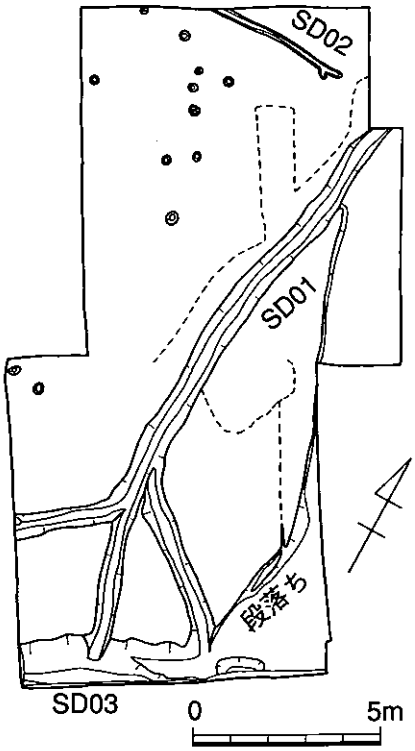
『乙金古墳群―北支群―』大野城市教育委員会　1984他
〈註４〉　『春日地区遺跡群Ⅴ』春日市教育委員会　1987
〈註５〉　『那珂八幡古墳』福岡市教育委員会　1986
〈註６〉　『仲島遺跡Ⅳ』大野城市教育委員会　1985
〈註７〉　『石勺遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会　1996他
〈註８〉　『谷川・池田・池ノ上遺跡』大野城市教育委員会　1998
〈註９〉　『井相田Ｃ遺跡』福岡市教育委員会　1987
『井相田Ｃ遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会　1987
『井相田Ｃ遺跡第５次、高畑遺跡第14次』福岡市教育委員会　1996
『井相田Ｃ遺跡第６次』福岡市教育委員会　1997
〈註10〉　『牛頸塚原遺跡』大野城市教育委員会　1995
〈註11〉　『牛頸日ノ浦遺跡』大野城市教育委員会　1994

Ⅲ．調査の結果

１．調査概要

（第１次調査）

200㎡という限られた面積であった。検出されたのは溝と形状不明の落ち込み、そして小ピットである。溝は途中で３条に分かれるもの１条と、途中で途切れる小溝１条、発掘区南端を東西に延びる溝１条である。また、遺物は発掘区南端の溝から弥生土器が、東側の段状の落ち込みから土師器片・陶器片などがごく少量出土している。



第３図　第１次調査遺構配置図(1/200)

（第２次調査）

小面積ながら、掘立柱建物１、井戸１、土坑３、溝１条が検出された。発掘区中央部の大きな落ち込みは風倒木痕と思われる。掘立柱建物は柱穴の並び方がややいびつになり、建物として良いか疑問もある。井戸は素掘りで井戸側等は見つかっていない。遺物は井戸から小型丸底壺を中心にまとまって土師器が出土している。古墳時代前期～中期に属するものである。

２．遺構と遺物

（１）第１次調査（第３図、図版１・２）

ｉ．溝

ＳＤ01

やや出入りはあるが、おおむね長方形の調査区を対角

線状に走る溝である。向きはおおよそ南北方向で、検出された長さは約16mである。南側で３条に分かれるが、最も東側の溝はやや浅くなっている。埋土からは同時に存在していたか、先後関係があるかは確認できなかった。幅約50～80cm、深さは約50cmであるが、３条に分かれた最も東側の溝は約35cmであった。また、底部のレベルは北側に行くほど下がることから、水が流れていたとすれば南から北へということになる。

遺物は出土していない。

ＳＤ02

発掘区北端部分で検出されたもので、おおむね東西方向に走る溝である。上端幅約20cm、深さは13～15cmと浅い。

遺物は出土していない。

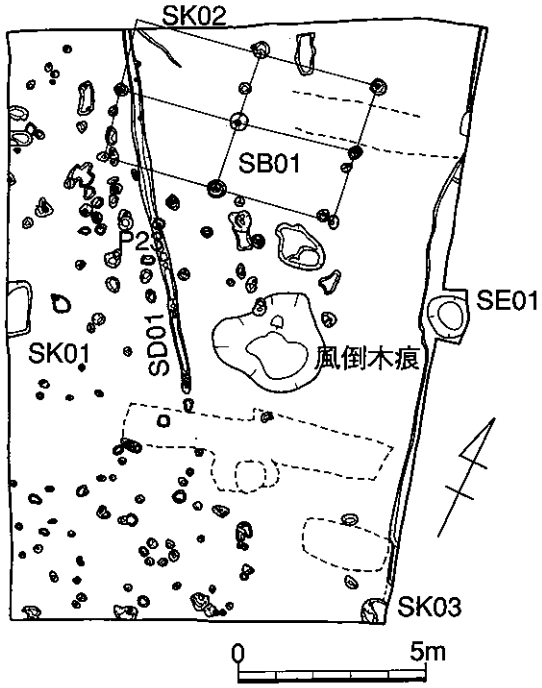
ＳＤ03

発掘区南端で検出されたものである。全体が確認されていないが、細長い遺構となる可能性が高く、また底面からの立ち上がりがわずかながら検出されたことから、溝と考えたものである。従って、上端幅は不明であるが、下端幅が30cm以上、深さは60～65cmである。

埋土から弥生土器が１片出土した。小破片であるが、胴部と頸部の境に突帯を持つ中型の壺の破片で中期に属するものと思われる。しかし、いわゆる城ノ越式ではなく若干後出するものである。

ii．段落ち

東側が一段下がっている。段差は12～30cmであるが、さらにその床面は北から南に緩く傾斜している。発掘区境界付近に楕円形状の土坑がある。長径約1.5m、深さ約20～30cmである。この段落ちが遺構なのかは不明である。



第４図　第２次調査遺構配置図(1/200)

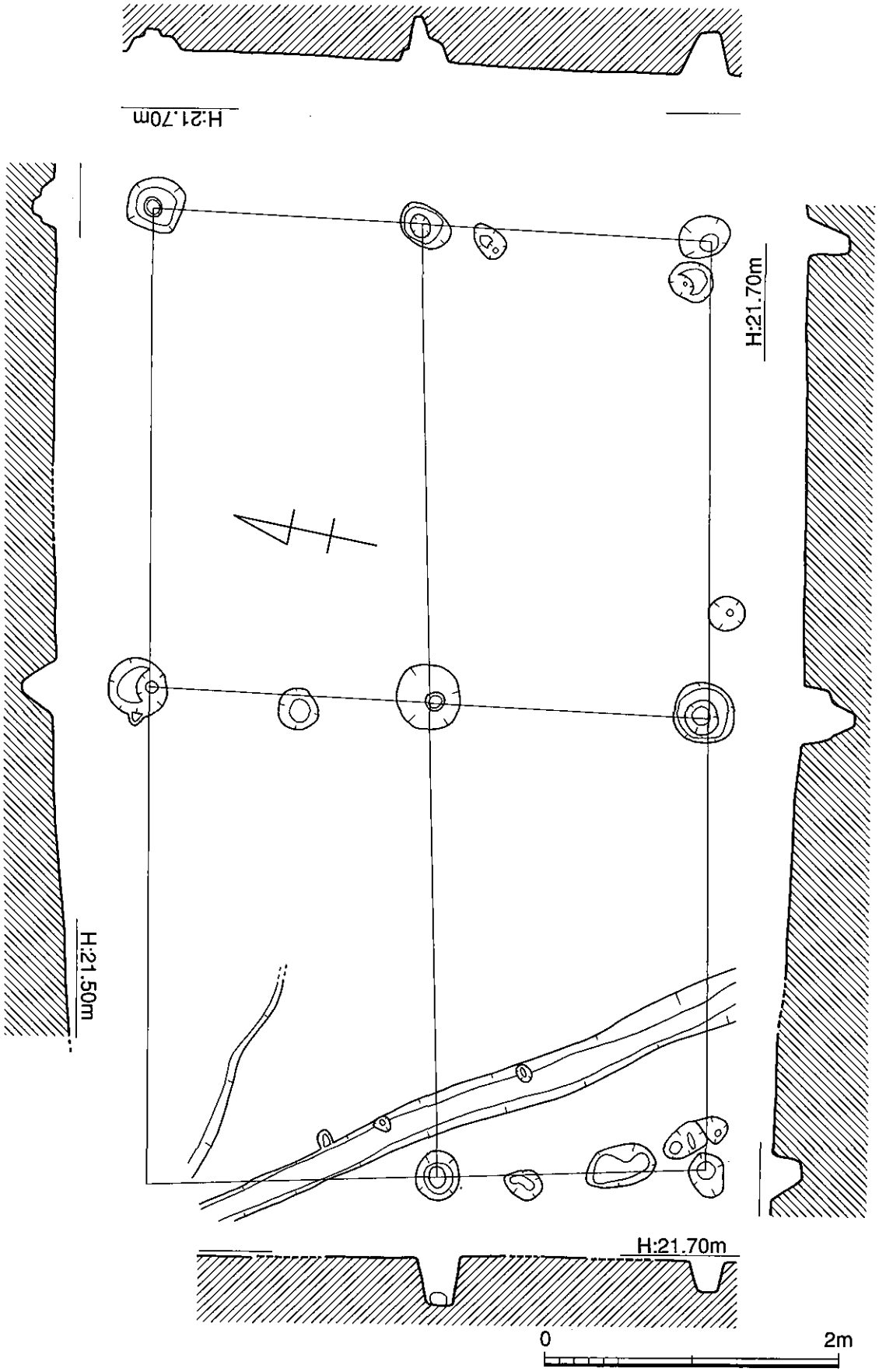
ここからは土師器片、陶器片、瓦片などが出土しているがいずれも小片で図示できない。土師器の中には長さ約５cm、径1.5cmほどの棒状のものが含まれる。足か把手になると思われる。陶器片は近世のものである。

（２）第２次調査（第４図、図版３(1)）

ｉ．掘立柱建物

ＳＢ01（第５図、図版３(2)）

ほぼ東西に長い建物で、主軸はＮ－79°－Ｅ、長辺約6.4m、短辺約3.8mの２間×２間の総柱建物である。桁行と梁行が直角にならないのがやや疑問である。柱穴は直径約30～40cm、深さ約20～30cmである。西側の棟持柱の位置になる柱穴の底部には粘土塊があった。



第５図　ＳＢ01実測図(1/40)

柱穴と判断したピットからの出土遺物はなく、時期の決定が困難である。

ii．土坑

ＳＫ01（第４図、図版４(1)）

発掘区西端で検出されたものである。おおむね長方形を呈し、主軸長約1.4m、短軸長約0.6m以上の大きさである。床面は中央が窪んでおり、最も深い所で約40cmである。

遺物は24×35cmほどの大きさのビニール袋半分ぐらいの量が出土している。しかし、いずれも小破片で図示できない。ほとんどが土師器で、内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整を施すものである。後述するＳＥ01出土土師器と似ており、古墳時代前期～中期に属するものと思われる。他に底面糸切りをした土師器皿と思われるものや瓦質の大型の土器や磁器の小破片が出土している。時期については「Ⅳ．まとめ」で記すが、遺構としては中世に属するものと考える。

ＳＫ02（第４図）

発掘区北端でその一部が検出されたもので、おそらく長方形状を呈し、主軸長1.5m以上、短軸長1.2mほどの大きさで、深さは15cmほどと思われる。

遺物は大型の陶器片が２点、土師器５片、磁器１点が出土している。図示できるものではない。

ＳＫ03（第４図）

発掘区東南隅でその一部が検出されたもので、円形状を呈し、径0.6m以上の大きさで、最深部で19cmを測る。床は段状をなし、土坑と呼ぶよりは大きめのピットとすべきかもしれない。

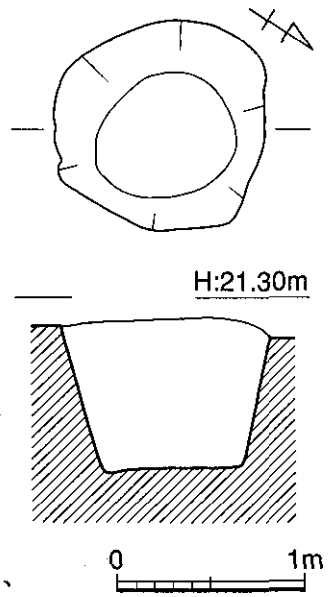
遺物は土師器の小破片１片である。時期を決定するには無理がある。

iii．井戸

ＳＥ01（第６図、図版５）

発掘区東端で土坑状の落ち込みの一部が検出されたため、発掘区を拡張したところ確認された遺構である。隣接地との境界付近のため、全容は確認できなかったが、おおよそ不整円形を呈している。径約1.1m、深さ約0.8mの大きさである。

出土遺物としては埋土中から土師器が数多く見つかった。涌水が激しく、出土状態を図示することはできなかったが、埋土中位から下層にかけて出土した。

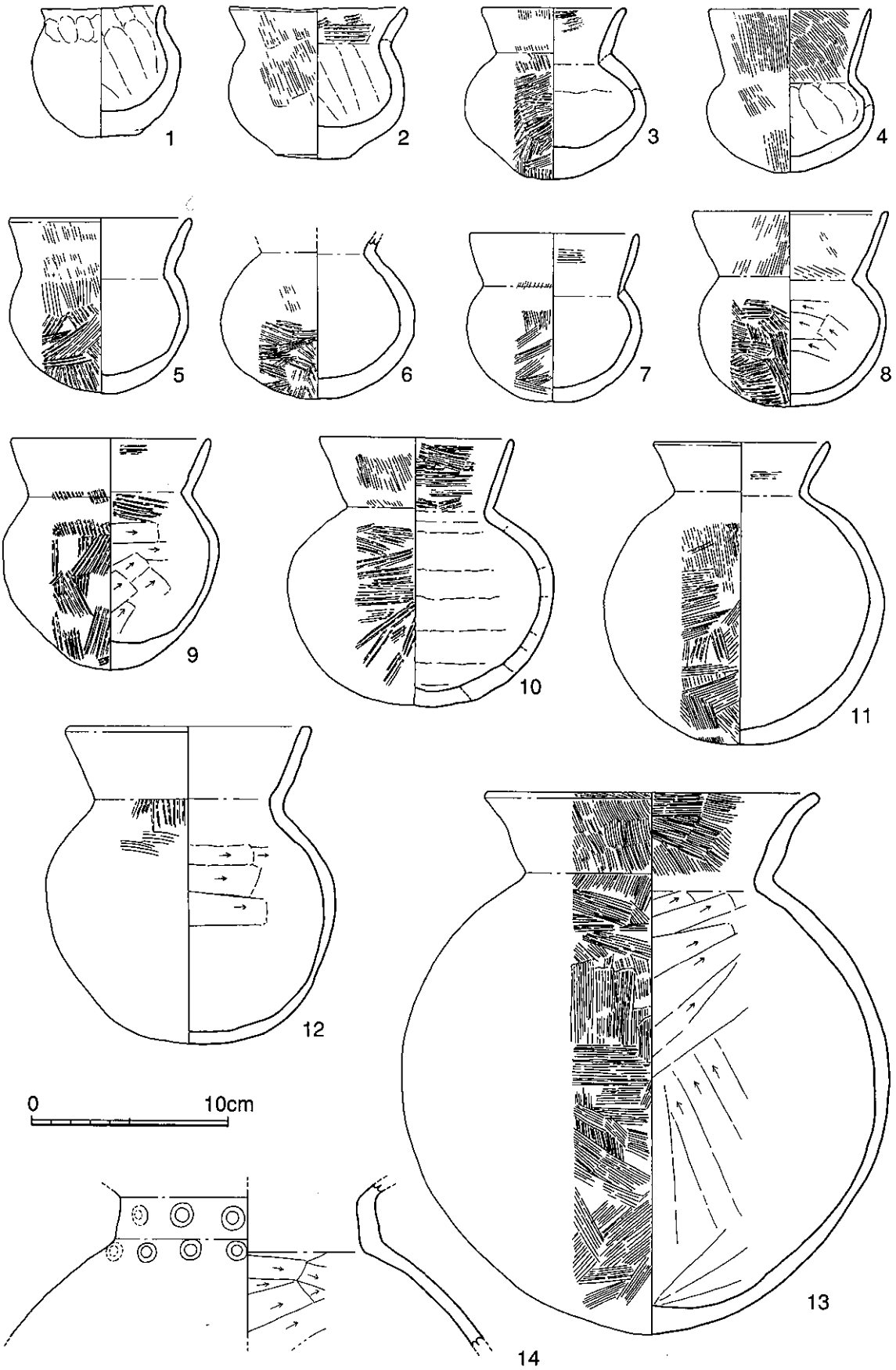


第６図　ＳＥ01実測図(1/40)

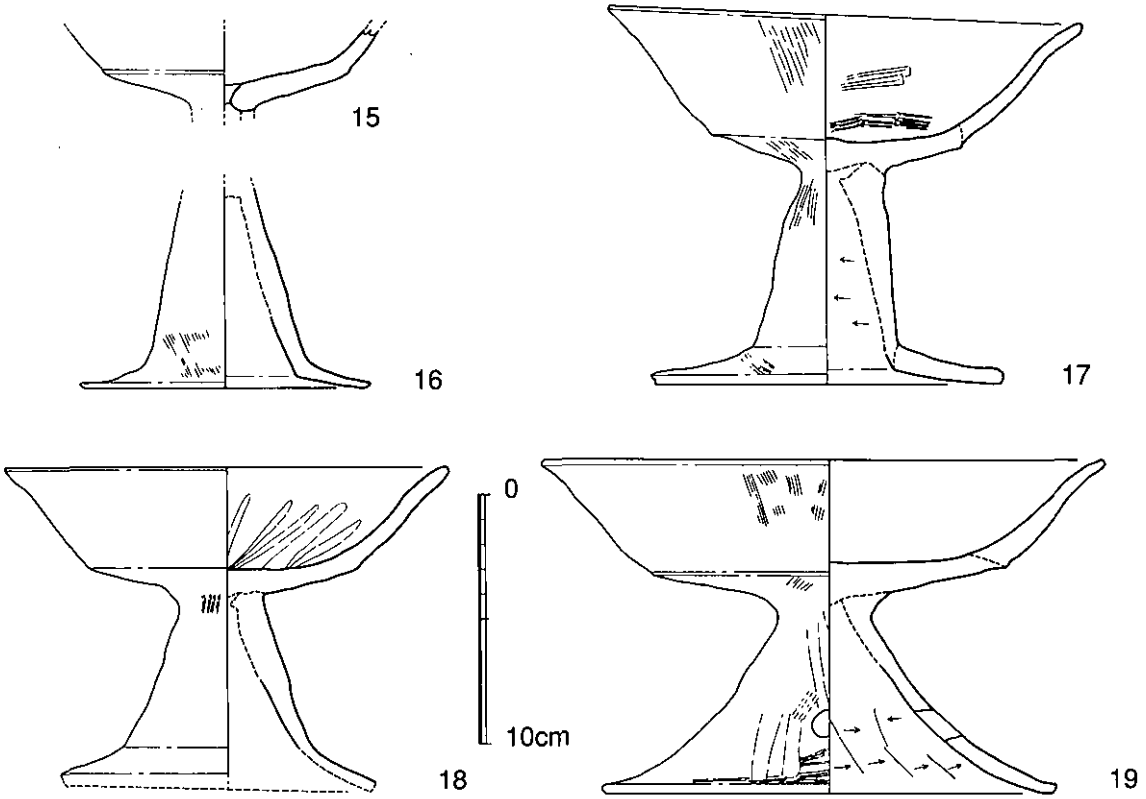
出土遺物（第７～９図、図版６～９）

土師器

小型壺形土器（１～２）　１は短頸壺形の土器で口径6.2cm、器高6.7cmの大きさで、底部は平底である。外面はナデで調整しているが、触れてみると指押さえを行ったことが良くわかる。また、内面はおそらく指でなで上げたと思われる痕跡が明瞭である。２も平底の小型壺で、外面はハケメ内面はナデである。器壁は厚い。



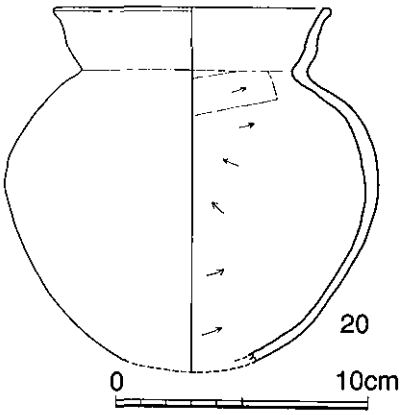
第７図　ＳＥ01出土土器実測図①(1/3)



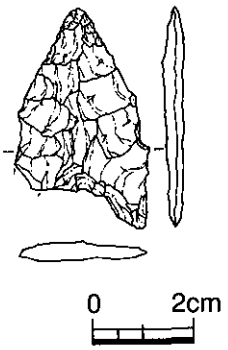
第８図　ＳＥ01出土土器実測図②(1/3)

小型丸底壺（３～８）　口頸部の形態に違いがあるが、すべて外面と口縁部内面がハケメ、胴部内面は２～７がナデ、８がケズリを行っている。口頸部は３～５が直行し、７・８はやや内湾気味である。また４はやや長い。器壁は厚く、それほどていねいな作りではない。

丸底壺（９～10）　３～８に比べてやや大きなものである。９は底部がやや平坦面を持つもので、口縁部は内外面ともナデで仕上げ、胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整を行う。



第９図　ＳＥ01出土土器実測図③(1/3)



第10図　ピット出土遺物実測図(2/3)

器壁は分厚い。10は上記の土器のどれよりもていねいな仕上げである。胴部外面、口縁部内外面はハケメ調整の後ナデを行う。胴部内面は粗いナデを行うが、粘土紐の巻き上げ痕が明瞭である。

甕（11～13・20）　11・12は実測図では前記の壺と似た形態を示す部分もあるが、胴部外面に煤らしいものの付着が見られ、壺とは違った使用方法が考えられることや、13の甕の形態から考えて甕としたものである。11・12とも口縁部内外面ともナデで仕上げ、胴部外面はハケメ、内面は11が粗いナデ、12は下半部がナデ、上半部がヘラケズリを行っている。分厚い作りである。13は通常の大きさの甕で口縁部内外面がハケメ、胴部内面をヘラケズリするものである。外面のハケメは比較的

丁寧だが、内面のケズリは大変粗く、器壁は分厚い。20は最上層出土土器である。口縁部はやや内湾し、端部はわずかに外側に肥厚させる。口縁部内外面ナデ、胴部外面ハケの後ナデ、内面はヘラケズリを行う。重さも軽く、本遺跡出土の土師器の中では比較的ていねいな作りである。

壺（14）　小破片である。外面をナデ、内面は頸部がナデ、胴部がヘラケズリを行う。頸部と胴部上位に竹管文状のスタンプ文が付けられる。

高杯（15～19）　15は杯部の破片であるが、底部中央部に穿孔がある。後述する17の高杯に見られるような円盤充填をしなかったような穴である。従って本来の使用方法と違う利用を考慮しなければならないかもしれない。内外面ともナデを行っている。16は脚部であるが、端部は外方へ稜を作って折れ曲がる。脚部内面はヘラケズリ、その他はナデを行う。17は比較的残りの良い高杯であるが、杯部と脚部の接合部のバランスがあまり良くない。杯部と脚部がはずれているが、杯部の外面中央部には内側から押し込まれた粘土塊が見えるので、中央部に穴のあいた杯部と脚部を接合した後に穴を粘土で充填したものと考えられる。いわゆる円盤充填法が取られたものであろう。杯部内面はハケの後ナデを行っているが、それほどていねいなものではない。脚部は折れ曲がるが筒状部内面はヘラケズリ、裾部内面はハケの後粗いナデを行う。18も杯部と脚部がはずれているが、脚部上端部に上から押しつけたと思われる痕跡が明瞭で、やはり接合時に杯部に穴があいていて、そこから押しつけたことを推測させる。調整は17と同様であるが、18は脚部の折れ方がそれほど極端ではない。19は前記のものより大きく、脚部の折れ曲がりがないことや脚部に２ヶ所の円形の穿孔があることなどの違いがある。また、基本的に調整は他の高杯と同様であるが、他と比較してていねいである。

iv．溝

ＳＤ01（第４図）

調査区の中央からやや西寄りの部分で、北西～南東方向に直線的に延びるものである。検出された長さは約9.8mを測り、上端幅約20cm、深さは10～17cmほどの小溝である。底面のレベルは南側が低くなっており、水が流れたとすれば北から南ということになるが、突然終わっている。掘立柱建物とは切り合うが、検出状態から先後関係を判断することはできなかった。

遺物は土師器が少量出土している。小破片であるがほとんどがＳＥ01出土土師器と同様古墳時代前期～中期に属する土師器と思われる。

ｖ．その他の遺構と遺物

ピット出土遺物（第10図、図版９）

石器

石鏃　ピット23出土石鏃である。長さ4.4cm、基部の幅は片方が破損しているため不明であるが、推定で約2.8cmほど、厚さ2.5mm、重さ3.7ｇを計る。安山岩製である。

表１　瑞穂遺跡出土土器法量表

No.	遺構	種類	器種	法量(cm)①口径②器高③底径④高台径⑤胴部最大径
1	ＳＥ01	土師器	小型壺形土器	①6.2　②6.7　⑤7.5
2		〃	〃	①9.0　②7.7　③3.9　⑤8.9
3		〃	小型丸底壺	①7.4　②8.7　⑤9.2
4		〃	〃	①(8.2)　②8.3　⑤8.5
5		〃	〃	①9.2　②8.9　⑤9.0
6		〃	〃	⑤9.8
7		〃	〃	①8.5　②8.5　⑤8.9
8		〃	〃	①9.9　②9.9　⑤9.5
9		〃	丸底壺	①10.0　②11.8　⑤10.9
10		〃	〃	①9.7　②13.6　⑤13.5
11		〃	甕	①8.9　②15.3　⑤14.2
12		〃	〃	①12.2　②16.1
13		〃	〃	①16.9　②27.5　⑤24.7
14		〃	壺	
15		〃	高杯	
16		〃	〃	③11.6
17		〃	〃	①18.8　②15.1　③13.8
18		〃	〃	①9.7　②12.4
19		〃	〃	①22.3　②13.3　③17.8
20		〃	甕	①10.9　⑤14.8

（　　）内の数値は復元値を表す。

Ⅳ．まとめ

瑞穂遺跡については、遺跡の一部を発掘調査したのみでまだまだ不明な点が多いが、市街化の進んだ地域の遺跡であるため、今後もどの程度調査が行えるか見通しはたたない。しかし、今後の調査のためにも、今までの発掘調査成果について簡単にまとめてみたい。

１．遺構の時期

第１次調査

第１次調査ではほとんど遺物の出土がなく、検出された遺構の明確な時期を決定するには資料不足である。ＳＤ03から弥生時代中期前半の土器片が出ているが、１片だけの出土であり、その時期の可能性に留めておきたい。また、段落ちとした部分からは近世と思われる陶器片が出土しているが、これもその可能性に留めておきたい。

第２次調査

第２次調査では柱筋に疑問があるが、掘立柱建物（ＳＢ01）が検出された。しかし、その柱穴から遺物の出土はなく、時期は決定できない。井戸（ＳＥ01）の発見は予想外であった。それほど大きな井戸ではなかったが、かなり多量の土師器が出土した。器種としては小型丸底壺、平底の小型壺、壺、甕、高杯である。小型丸底壺は口径が胴部径とほぼ同じか小さいものである。さらに口頸部の高さと胴部の高さを比較した場合胴部高の方が大きい。甕は第７図13のように胴部が丸いものである。口唇部は特に摘み上げたりせずそのまま終わっている。しかし、胴部の器壁はヘラケズリが充分ではなく分厚い。高杯は杯底部と体部の境に稜を持つもので、体部は直線的に広がって口縁部がやや外反するタイプのものである。脚部はゆるやかに端部までひろがって円孔を穿くもの（第７図19）と、筒状に伸び途中で折れて端部に至り穿孔しないもの（同16～18）の２タイプがある。杯部と脚部の接合部分は脚部側から押した痕跡は見られず、杯部側から押圧している（図版８・９）。土器全体を見た場合、高杯は比較的ていねいに作っているが、その他の土器は形態的には畿内的な土器を模倣しようとしているが、ヘラケズリなどの技法が充分消化されておらず、器壁を薄くすることができないことなどから在地の土器と考えられる。これらの時期的な位置付けについては、おおむね畿内の布留式土器の範疇に入ると思われるが、その後半期であり、５世紀前半頃の年代が考えられると思う。

しかし、北部九州地域の土師器について総括的にまとめている柳田康雄氏の編年に従えば、Ⅱｃ式～Ⅲａ式に入る土器群かと思われるが、柳田氏はこの時期を４世紀中頃から後半の時期に当てている。〈註１〉

実年代については、古墳時代の開始を西暦300年前後とする見方から３世紀中頃とする見方が多くなってきている状況があり、須恵器の生産開始の年代とともに検討が続けられなければならないと思われる。

2．瑞穂遺跡の今後の課題

瑞穂遺跡は第Ⅰ章で述べたとおり、福岡県教育委員会作成の分布地図には縄文～古墳時代の遺跡として登録されている。また、かつては甕棺が出土したという言い伝えもある。2回の調査でようやくその一端が見えてきたばかりで、遺跡全体の様相が判明するのは長時間を要すると考えられるが、第2次調査で古墳時代前半の井戸が検出されたことから、今後当然住居跡も見つかるものと思われる。また、同じく第2次調査でピットから縄文時代のものと思われる石鏃が出土した。これから同時代の他の遺構も見つかることが期待される。分布地図の記述どおり複数の時代にまたがる複合遺跡の可能性が強まった。周辺でのさらなる発見が期待される。〈註2〉

ただ、遺跡範囲内と想定できる地域での建物建て替えなどに伴って試掘調査を重ねているが、既に遺跡が削平されたと考えられる状況が多々見られ、遺跡の残存状態については危惧される。

＜註1＞　柳田康雄「2　土師器の編年　九州」　『古墳時代の研究　6土師器と須恵器』1991

＜註2＞　『福岡県遺跡等分布地図』福岡県教育委員会 1980

原ノ畑遺跡

原ノ畑遺跡本文目次

Ⅰ．はじめに……15
Ⅱ．調査の結果……17
　1．調査概要……17
　2．遺構と遺物……17
　　(1). 第1次調査……17
　　(2). 第2次調査……23
　　(3). 第3次調査……40
　　(4). 第4次調査……40
Ⅲ．まとめ……45

原ノ畑遺跡巻頭カラー図版

図版2　(1). 原ノ畑遺跡第2次調査1号竪穴住居跡出土土器　図版3　(1). 原ノ畑遺跡第2次調査SK05出土土器
　　(2). 原ノ畑遺跡第2次調査SK02出土土器　　(2). 原ノ畑遺跡第2次調査SK06出土土器

原ノ畑遺跡表目次

2．原ノ畑遺跡出土土器法量表……43

原ノ畑遺跡図版目次

図版11　(1)　原ノ畑遺跡第1次調査地全景（北から）(2)　原ノ畑遺跡第1次調査地全景（西から）
図版12　(1)　原ノ畑遺跡第2次調査地東半（西から）(2)　原ノ畑遺跡第2次調査地東半（東から）
図版13　(1)　原ノ畑遺跡第2次調査1号竪穴住居跡（西から）(2)　原ノ畑遺跡第2次調査SK02（東から）
図版14　(1)　原ノ畑遺跡第2次調査SK05・SK06　(2)　原ノ畑遺跡第2次調査SK05遺物出土状態
図版15　(1)　原ノ畑遺跡第2次調査SK06　(2)　原ノ畑遺跡第2次調査SK06遺物出土状態
　　(3)　原ノ畑遺跡第2次調査SK06遺物出土状態
図版16　(1)　原ノ畑遺跡第3次調査地全景（西から）(2)　原ノ畑遺跡第3次調査地全景（南から）
図版17　(1)　原ノ畑遺跡第4次調査地全景(気球写真)　(2)　原ノ畑遺跡第4次調査地全景(気球写真)
図版18　(1)　原ノ畑遺跡第4次調査SK09　(2)　原ノ畑遺跡第4次調査SK10
　　(3)　原ノ畑遺跡第4次調査SE01
図版19　原ノ畑遺跡出土遺物　図版21　原ノ畑遺跡出土遺物
図版20　原ノ畑遺跡出土遺物　図版22　原ノ畑遺跡出土遺物

図版23　原ノ畑遺跡出土遺物
図版24　原ノ畑遺跡出土遺物
図版25　原ノ畑遺跡出土遺物
図版26　原ノ畑遺跡出土遺物

原ノ畑遺跡挿図目次

第11図．原ノ畑遺跡位置図（1／5,000）……16
第12図．第1次調査遺構配置図（1／200）……17
第13図．ＳＢ01実測図（1／40）……18
第14図．ＳＢ02実測図（1／40）……19
第15図．ＳＤ01遺物出土状態実測図①（1／20）……20
第16図．ＳＤ01遺物出土状態実測図②（1／20）……20
第17図．ＳＤ01・ＳＤ09(4)出土土器実測図（1／4）……20
第18図．ＳＤ01出土遺物実測図（1／1）……21
第19図．ＳＸ02・ピット出土土器実測図（1／3）……21
第20図．ピット出土瓦実測図（1／4）……21
第21図．第2次調査遺構配置図（1／200）……23
第22図．ＳＢ01実測図（1／40）……24
第23図．1号竪穴住居跡実測図（1／40）……25
第24図．1号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……26
第25図．ＳＫ02実測図（1／20）……27
第26図．ＳＫ02出土土器実測図①（1／4）……28
第27図．ＳＫ02出土土器実測図②（1／4）……29
第28図．ＳＫ05出土土器実測図（1／4・1／8）……31
第29図．ＳＫ06実測図（1／20）……33
第30図．ＳＫ06出土土器実測図①（1／4）……34
第31図．ＳＫ06出土土器実測図②（1／4）……35
第32図．ＳＫ06出土土器実測図③（1／4）……37
第33図．ＳＫ06出土土器実測図④（1／4）……38
第34図．ピット出土土器実測図（1／4）……39
第35図．第3次調査遺構配置図（1／200）……40
第36図．ＳＫ09・ＳＸ03出土土器実測図（1／4）……40
第37図．ＳＫ09実測図（1／20）……40
第38図．第4次調査遺構配置図（1／200）……41
第39図．ＳＫ10実測図（1／20）……42
第40図．ＳＥ01実測図（1／20）……42
第41図．ピット出土遺物実測図（1／1）……43

Ⅰ．はじめに

原ノ畑遺跡は大野城市白木原５丁目に所在し、1980年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』に190126番として登録されている遺跡である。微高地上に立地した奈良時代の遺跡で、土師器・須恵器の散布が見られると記されている。しかし、1988年（昭和63年）の第１次調査まで正式の発掘調査がなされたことはなく、実態は不明であった。

1988年（昭和63年）、店舗新築に先立って試掘調査を実施したところ、溝等の遺構が検出された。このため地権者と協議を行い、店舗の建設位置を遺構の少ない部分にずらしてもらうことになったが、遺構が破壊されることになる部分については発掘調査を実施することになった（第１次調査）。この結果、古墳時代前期と奈良時代の集落が検出されて、遺跡の性格の一端が判明した。その後、1990年（平成２年）５月30日～６月26日まで第１次調査地から南東へ約150m離れた地点で共同住宅建設に伴う発掘調査を実施した（第２次調査）。300㎡ほどの限られた面積であったが、古墳時代前期の竪穴住居跡と土坑が検出され、その広がり等から当遺跡が古墳時代前期の集落として重要な遺跡であることが判明した。さらに1993年（平成５年）２月24日～３月１日まで第１次調査後に建てられた店舗の改築に伴って第３次調査を実施したが、これは調査面積が約100㎡ほどであった。また、1996年（平成８年）１月16日～２月27日まで第１次・第３次調査地の西側で店舗建築に伴って第４次調査を実施した。調査面積は1,000㎡で古墳時代前期の土坑と井戸と思われる土坑とピットが検出された。

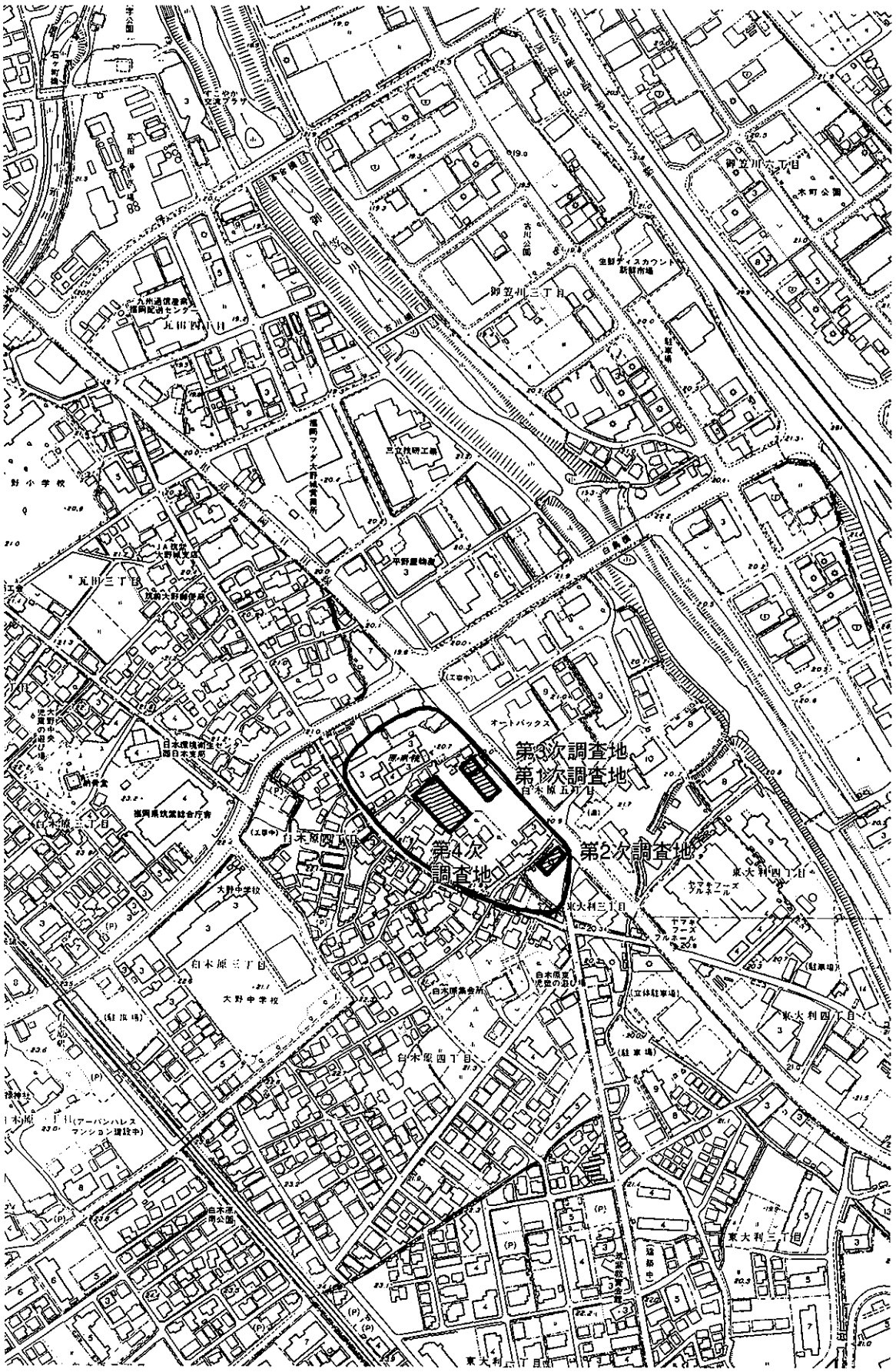
前述のように４次にわたって発掘調査を実施したが整理作業は2000年（平成12年）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	堀内　貞夫
	教育部長	青木　克正
	社会教育課長	片岡　　猛
	文化財担当係長	舟山　良一
	主査	徳本　洋一
	主任技師	石木　秀啓
	〃	丸尾　博恵
	技師	林　　潤也
	主事	大道　和貴
	嘱託	元吉　知子

整理作業員

有田　朱美、鬼塚　穂子、白井　典子、松岡　信子、町井　裕子、村山　律子、渡辺　直美

発掘調査に際しては、調査費の負担のご協力を得た地権者の森山興産、森山ヒサ子氏、前崎　弘氏に厚く感謝の意を表します。



第11図　原ノ畑遺跡位置図(1/5,000)

Ⅱ．調査の結果

1．調査概要

（第１次調査）　1988年５月９日～５月19日（昭和63年度）

180㎡ほどの調査面積であったが、検出されたのは掘立柱建物２棟、落ち込み２、溝が大小９条そして小ピットである。溝はきちんと溝状を呈するものとそうでないものがある。出土遺物は古墳時代前期に属するものと奈良時代のものがある。

（第２次調査）　1990年５月30日～６月26日（平成２年度）

317㎡という小面積ながら、竪穴住居１、土坑３、掘立柱建物１、ピット多数が検出された。竪穴住居跡と土坑は古墳時代前期に属するものと考えられる。特に土坑からは当該期の土師器がまとまって出土している。

（第３次調査）　1993年２月24日～３月１日（平成４年度）

第１次調査地の北側に隣接する場所で100㎡ほどの調査面積であった。ピットとやや大きめの落ち込みが検出された。出土遺物は土師器が少量で、時期を決定するには至らなかった。

（第４次調査）　1996年１月16日～２月27日（平成７年度）

第１次・第３次調査地の西側に当たる部分で、調査面積は約1,000㎡であった。検出された遺構は土坑10基、井戸１、多数のピットである。遺物は整理箱２箱分の土師器が出土している。破片が多いが、時期の判明するものは古墳時代前期に属するものと考えられる。

2．遺構と遺物

(1)　第１次調査（第12図、図版11）

ｉ．掘立柱建物（第13・14図、図版11）

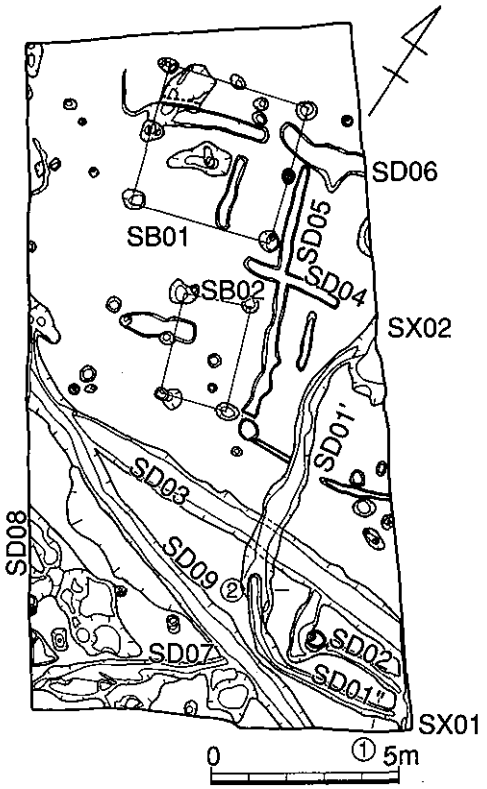
ＳＢ01（第13図、図版11）

調査区の北側で検出されたもので、柱穴が１基足りないが、２間×２間の側柱建物と考えられる。ほぼ方形に近いが、東西が約3.8m、南北が3.7mとやや東西に長い。南側の中央部のピットが未検出である。柱穴は径が50～60cm、深さ30～65cmである。四隅の柱穴に比べ中央部の柱穴が小さくて浅い傾向が窺われる。

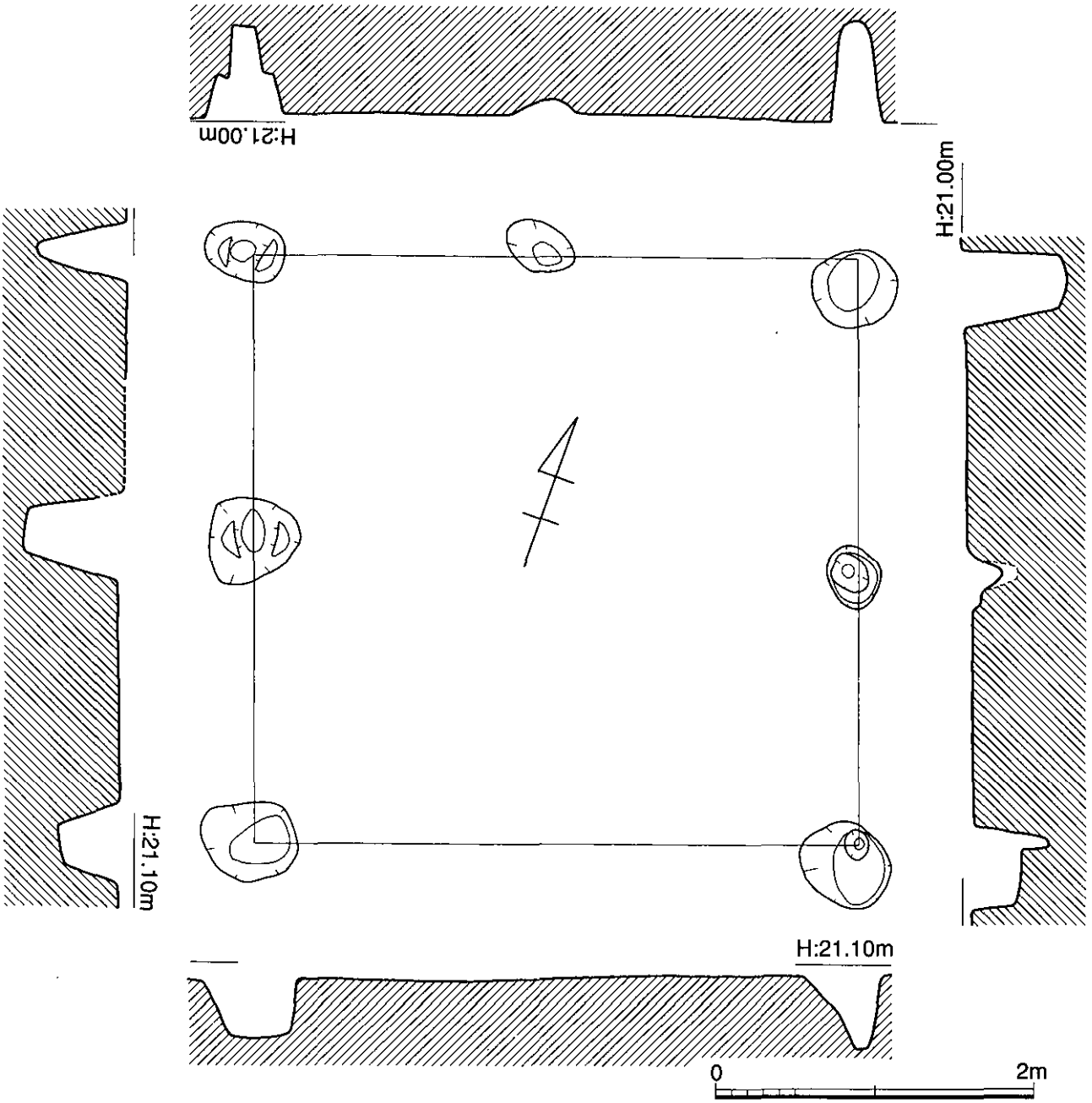
遺物としては柱穴５基から土器が出土している。いずれも小破片で図示できないが、土師器と須恵器である。

ＳＢ02（第14図、図版11）

ＳＢ01の南側で検出されたもので、ＳＢ01とほぼ東側の



第12図　第１次調査遺構配置図(1/200)



第13図　ＳＢ01実測図(1/40)

柱筋を揃えた１間×１間の掘立柱建物と考えられるものである。東西が1.8m、南北が2.8mと南北方向に長い。柱穴は径35～70cmと定まらない。深さは30～40cmほどである。

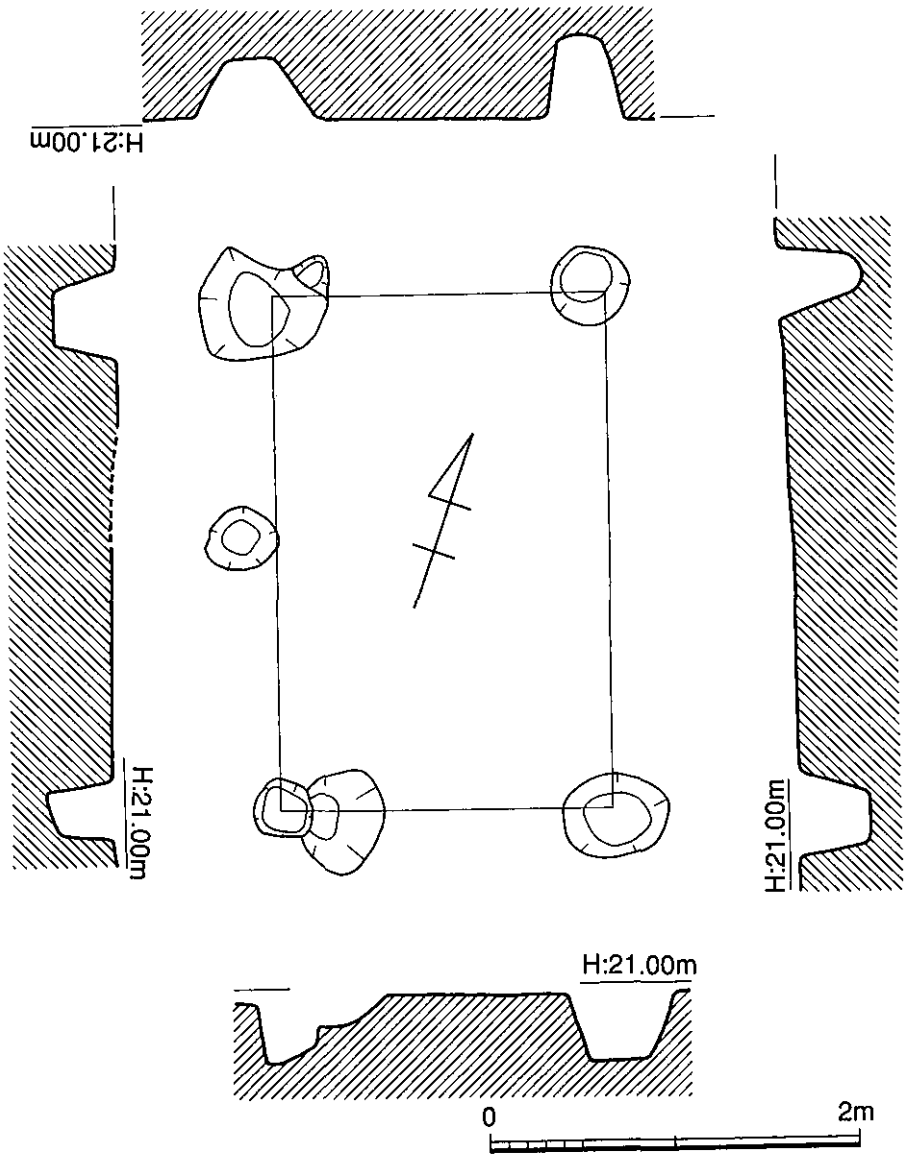
遺物としては柱穴２基から土師器・須恵器・砥石が出土しているが、土器片はどれも小破片である。

iii．溝

ＳＤ01（第12・15・16図）

発掘区の東南部で約13m検出されたもので、弧状に伸び、ＳＤ03に切られる。しかし、途中で幅・深さともに変わるため、正確には２条の溝とした方が良いかもしれない。北側の幅の広い溝をＳ

D01′とすると幅は狭い所で0.5m、広い所で約1m、深さは北側で約13cm、南側で約24cmである。また、幅の狭い方をSD01″とすると、幅約35cm、深さは20cm前後である。ただし遺構面がSD01″周辺はSD01′周辺より下がるために前記のような深さになるのであって、底面のレベルを比較するとSD01″の方が一段低い。SD01″の底面は北側が最も低く、南側で一旦やや上がって再び下がる。しかし、水が流れたとすれば、SD01′からSD01″に、即ち北から南に流れるに支障はない。



第14図　SB02実測図(1/40)

遺物は整理箱1箱ほどの量が出土しているが、特にSD01″から古式土師器が出土している（第17図)。底面からは若干浮いている。

出土遺物（第17図、図版19)

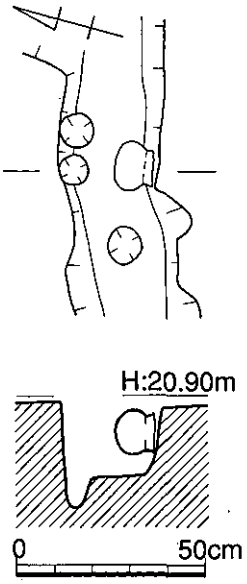
土師器

小型丸底壺（1～2）　1はほぼ完形の壺である。胴部外面下半はヘラケズリの後ナデ、胴部上半と口縁部内外面はナデ、胴部内面上半部もナデ、内面下半はヘラケズリの後ナデを行っている。比較的作りの良い土器である。2は3分の1ほどの破片である。やや残りが悪く調整がわかりにくい点があるが、基本的に1と同様のようである。器壁は1よりも薄い。

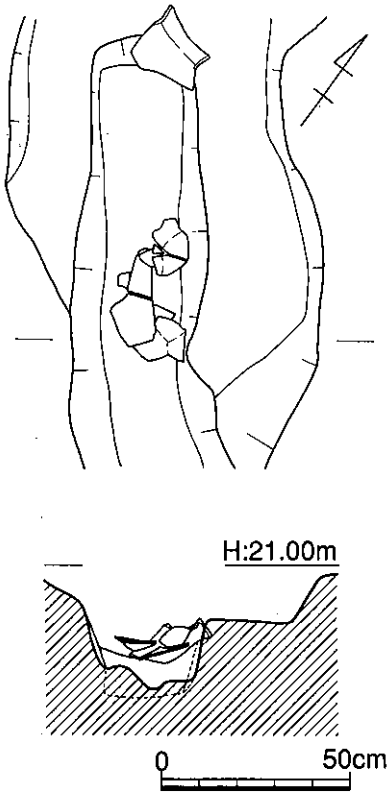
鉢（3）　これも3分の1ほどの破片である。短い口頸部が外反し、その境目は沈線状を呈する。器壁が荒れていて調整がわかりにくいが、外面は下半部がヘラケズリ、上半部はハケメの痕跡がある。その他はナデである。白橙色を呈す。

高杯（5）　脚部のみの破片である。4孔開けていたらしいが、破片のため確認できるのは3孔である。そのうち1孔が貫通しているが2孔は貫通していない。上端部は杯部の底部がそのまま残っている。

壺（6～7）　6は口縁部の破片である。内外面をナデ、残存している胴部は内面をハケ調整をおこなっている。胴部外面の口縁部との境に刻み目文を施す。7は大型の壺で外面は胴部・口縁部ともにハケ調整を行い、内面は両者ともナデを行っている。また、胴部内面には粘土紐の痕跡が観察できる。



第15図　ＳＤ01遺物出土状態実測図①(1/20)

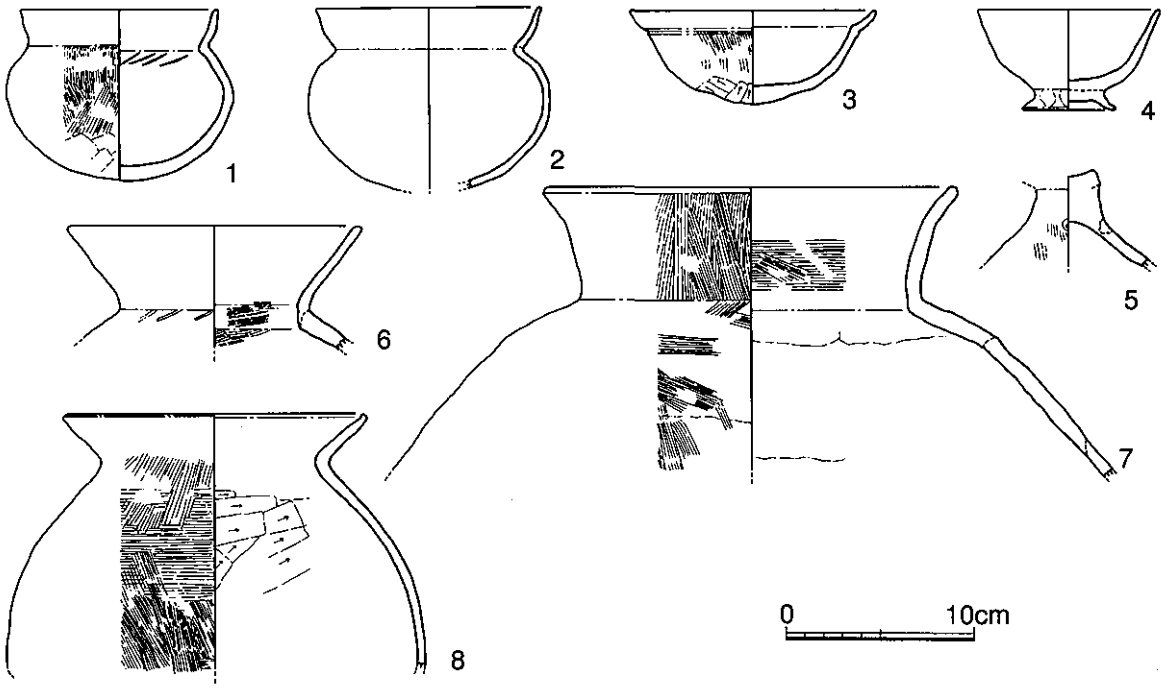


第16図　ＳＤ01遺物出土状態実測図②(1/20)

甕（8）　口縁端部の摘まみ上げがあまり顕著ではないものである。口縁部内外面はナデ、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリしている。器壁は3㎜ほどで薄くはない。外面に所々クレーター状にはじいた跡がある。

土製品（第18図、図版26）

土玉　一部を欠くがほぼ完全な形に近い。直径が1.7～1.9㎝、孔径が2㎜程の大きさである。かな



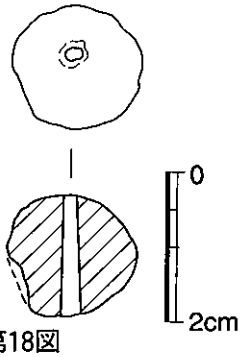
第17図　ＳＤ01・ＳＤ09(4)出土土器実測図(1/4)

り平滑にされている。

ＳＤ02

調査区の南東隅の部分で検出された。ＳＤ01と一部切り合うがＳＤ02が古い。ＳＤ07とつながるのかもしれないが、はっきりしない。幅は30～60cm、深さ15～25cmほどである。

遺物としては古式土師器片が少量出土しているが、図示できない。

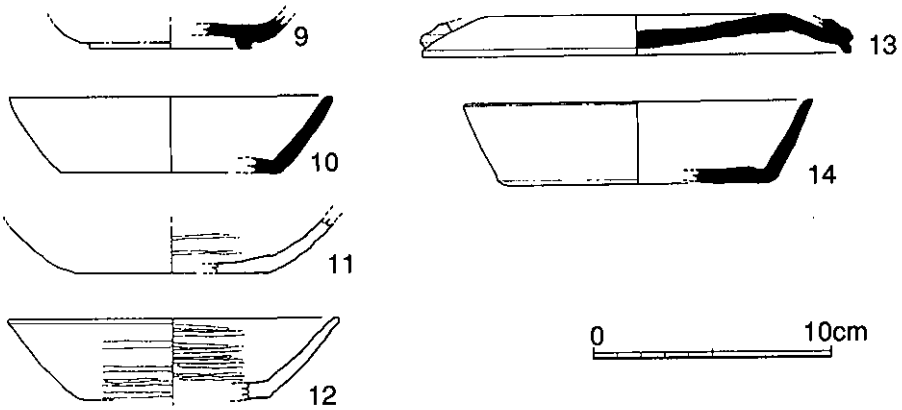


第18図
ＳＤ01出土遺物
実測図(1/1)

ＳＤ03

調査区の南側で検出されたもので、東西方向にほぼ一直線に走る。ＳＤ01・ＳＤ02・ＳＤ09と切り合うが、ＳＤ01と09に切られる。上端幅約１ｍ、深さ約0.5mの大きさである。底面のレベルを比較するとほぼ同レベルである。

遺物としては古式土師器片が少量出土しているが、図示できるほどのものはない。

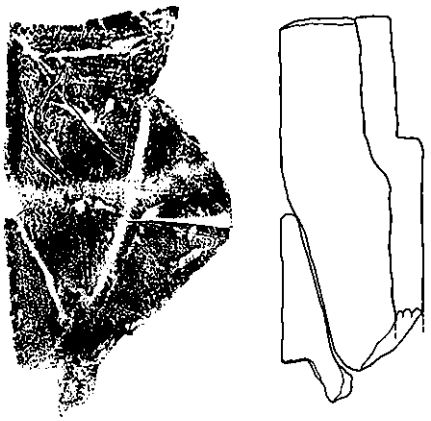


第19図　ＳＸ02・ピット出土土器実測図(1/3)

ＳＤ04・ＳＤ05

調査区の北側で検出されたもので、直角に交差しており、現場では２条に分けて考えたが、形状や深さから同時に機能したものとして良いと思う。また、当初建物ＳＢ01やＳＢ02の雨落ち溝的な機能も想定したが、付近に似た形状で向きも似たような溝状遺構がいくつかあり、耕作の跡などの機能を想定した方が良いかもしれない。幅約30cm、深さ約2～3cmほどの小溝である。

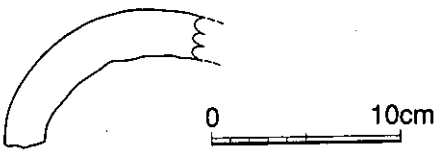
遺物としては土師器片・須恵器片・須恵質の瓦片が少量出土しているが、図示できるほどのものはない。



ＳＤ06

調査区の北側で検出されたもので、ＳＤ05の北端に接する。溝というより不整形の土坑とすべきかもしれない。中央付近が一番深く、約13cmを測る。

遺物としては古式土師器片が少量出土しているが、図示できるほどのものはない。



第20図　ピット出土瓦実測図(1/4)

ＳＤ07

調査区の南端で検出されたもので、かなり不整形である。最もふくらむ部分は幅１ｍを測るが、東側は約0.5mである。深さは約30cmである。

遺物としては古式土師器片がビニール袋１袋分ほど出土している。高杯の脚部も含まれるが、図示するほどの大きさではない。

ＳＤ08

調査区の南端は遺構がかなり切り合うような状況にあるが、その中の溝状のものをＳＤ08としたものである。長さ1.5mほどである。深さは最も深くとも約20cm、幅50～70cmである。

遺物としては古式土師器片が３片出土しているが、図示できるほどのものはない。

ＳＤ09

調査区の南側で検出されたものでＳＤ03を切り、かなり直線的に走る溝である。上端幅60～80cmで深さ約60cmである。底面のレベルは西側がやや低い。

遺物としては古式土師器片がビニール袋２袋分ほど出土している。

出土遺物（第17図）

土師器

台付き鉢（４）　小型の鉢である。全体をナデで仕上げる。焼成温度は低いらしく全体に黒っぽい色調を示す。

iv．その他の遺構と遺物

ＳＸ01

発掘区東南隅で検出されたもので、一部しかわからないが３条の溝の集まる場所になっている。形状も不明であるが、中央へ向かって下がる。

遺物は時期不明の土師器４片と近世磁器の破片と思われるもの２片である。いずれも小破片で図示できない。

ＳＸ02

ＳＤ01の北端部に位置するが、同時期に存在したものか先後関係があるのかは埋土等からはわかならなかった。全容が不明なため、詳細はわからないが、床面は周囲がほぼ同じレベルで中心部が窪む。

遺物は24cm×35cmの大きさのビニール袋半分ほどの量があった。須恵器と土師器である。

出土遺物（第19図）

土師器

杯（11・12）　11・12とも小破片である。底部をヘラケズリし、体部をナデの後ミガキを行う。太宰府市教育委員会の分類によれば杯ｄに当たる。

須恵器

杯（９・10）　極めて小破片である。９は高台付きの杯、10は無高台の杯である。10は体部内外面をナデ、底部はヘラ切り離しである。

ピット出土土器（第19図）

須恵器

蓋（13）　Ｐ３の出土で４分の１ほどの破片である。撮みは無い。天井部はヘラケズリの後粗いナ

デ、その他はナデを行う。外面縁辺部に重ね焼きの痕跡が残る。身ではなく、蓋を重ねている。

杯（14）　Ｐ15からの出土であるが、小破片で、焼きが甘く灰白色をしている。そのためやや調整がわかりにくい点があるが基本的にナデを行っている。

ピット出土瓦（第20図）

丸瓦　玉縁の丸瓦で玉縁部側の破片である。一方の側面が残る。玉縁基部は段がきちんとしていて、凹面はゆるやかに屈折している。凸面はナデ、凹面は布目が全面に残る。焼成はやや甘く、色調は外面が黒味のある灰色、内面が白味がかった黄褐色である。

(2)　第２次調査（第21図、図版12）

ｉ．掘立柱建物

ＳＢ01（第22図）

調査区の南側で検出されたもので、１間×１間以上の側柱建物と考えられる。ただし、発掘区外へ伸びると思われ、また、柱穴が必ずしも長方形には並ばないことなどまだ不明部分がある。南北方向の１間が約３ｍ、東西方向の１間が約2.5ｍである。柱穴は径60～80cmの不整円形で深さは70～80cmである。

遺物としては柱穴から土器が出土しているが、いずれも小破片で図示できない。しかし、古式土師器と思われる。

ii．竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第23図、図版13(1)）

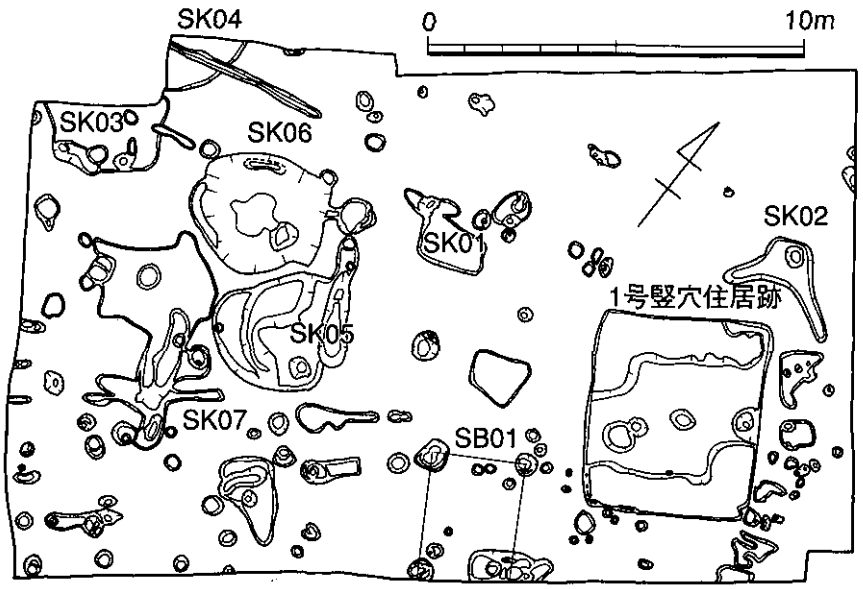
調査区の東側で検出されたものである。ＳＢ01とは1.5ｍほどの距離である。ほぼ長方形を呈し主軸長は東西約4.6ｍ、南北約5.25ｍである。南側と北側にベット状遺構がある。床面との段差は5～7cm、床面からの壁高は西側で約25cm、東側で約10cmである。中央部にピットがあるが、火を受けたような痕跡は見いだせなかった。ピットは短軸上に３基あるが、一直線に並ばない。しかし、柱穴を考える場合これしかない。

遺物は床面直上出土を含め、整理箱２箱分ほど出土している。

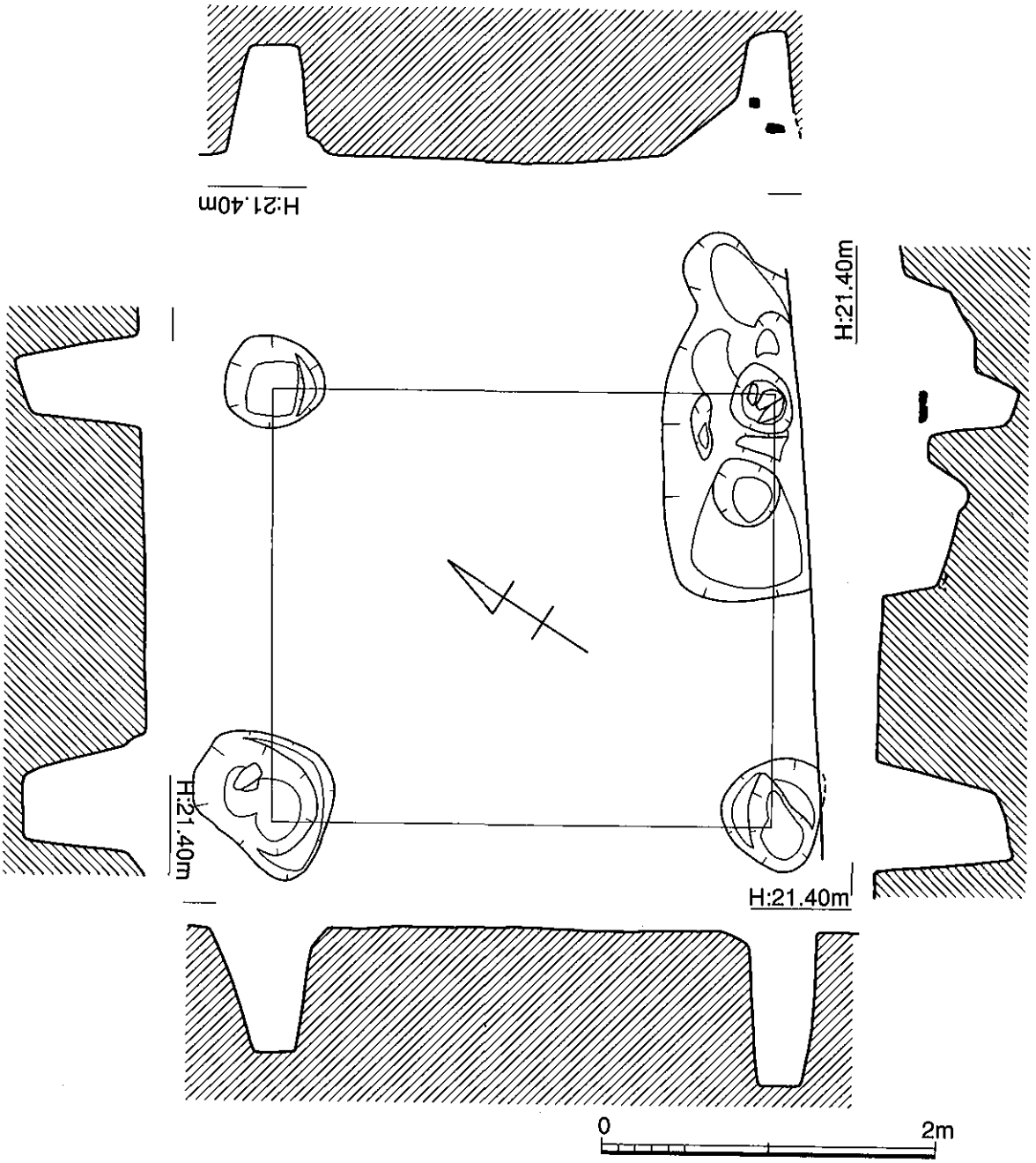
出土遺物（第24図、図版19）

鉢（15～18・21）

15は全体をナデで仕上げ、比較的ていねいな作りであるが、



第21図　第２次調査遺構配置図(1/200)

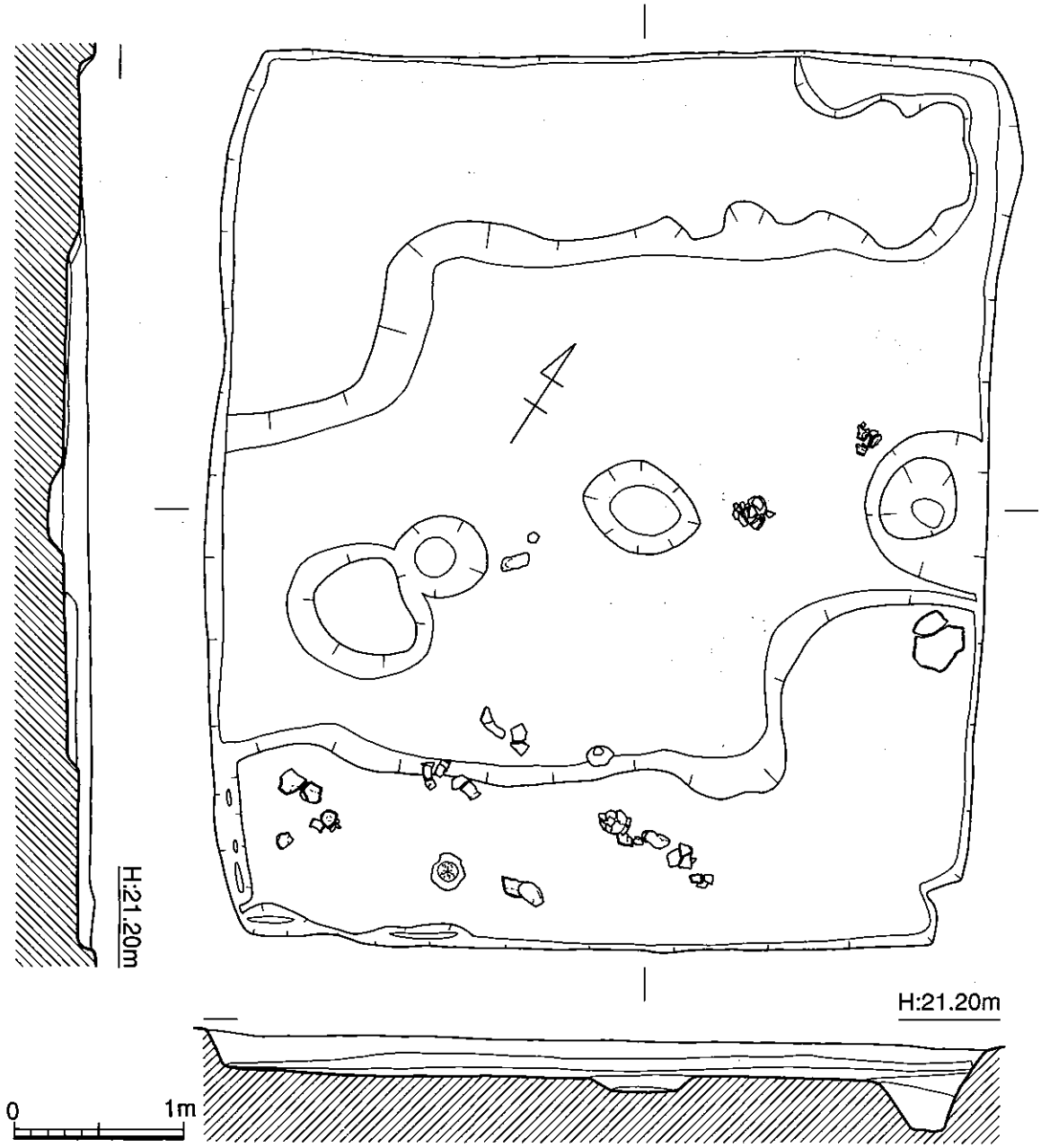


第22図　ＳＢ01実測図(1/40)

内外面に指の跡があり手づくねで作ったのではないかと思われる。16は内外面指の跡が多く、口縁部の形態も整っていないなど手づくね土器と思われる。17は内外面ともナデで仕上げており、作りは良い。18は口縁端部が若干外反するもので、体部外面はハケメ、その他はナデを行う。21は大型の鉢で内外面をナデで仕上げる。

小型壺（19～20）　19は口縁部を欠くもので、胴部外面はハケとナデ、内面は上部もハケとナデ、下半がヘラケズリを行っている。作りはあまり良くない。20は２分の１ほどの破片であるが、外面ナデ、内面ハケである。比較的作りは良い。

高杯（22）　杯部は底部から大きく屈曲して斜め上方に伸びる。外面は底部がヘラミガキ、屈曲部より上方にはハケメが見え、ハケの後ナデを行っている。内面は器壁が荒れていてややわかりにく

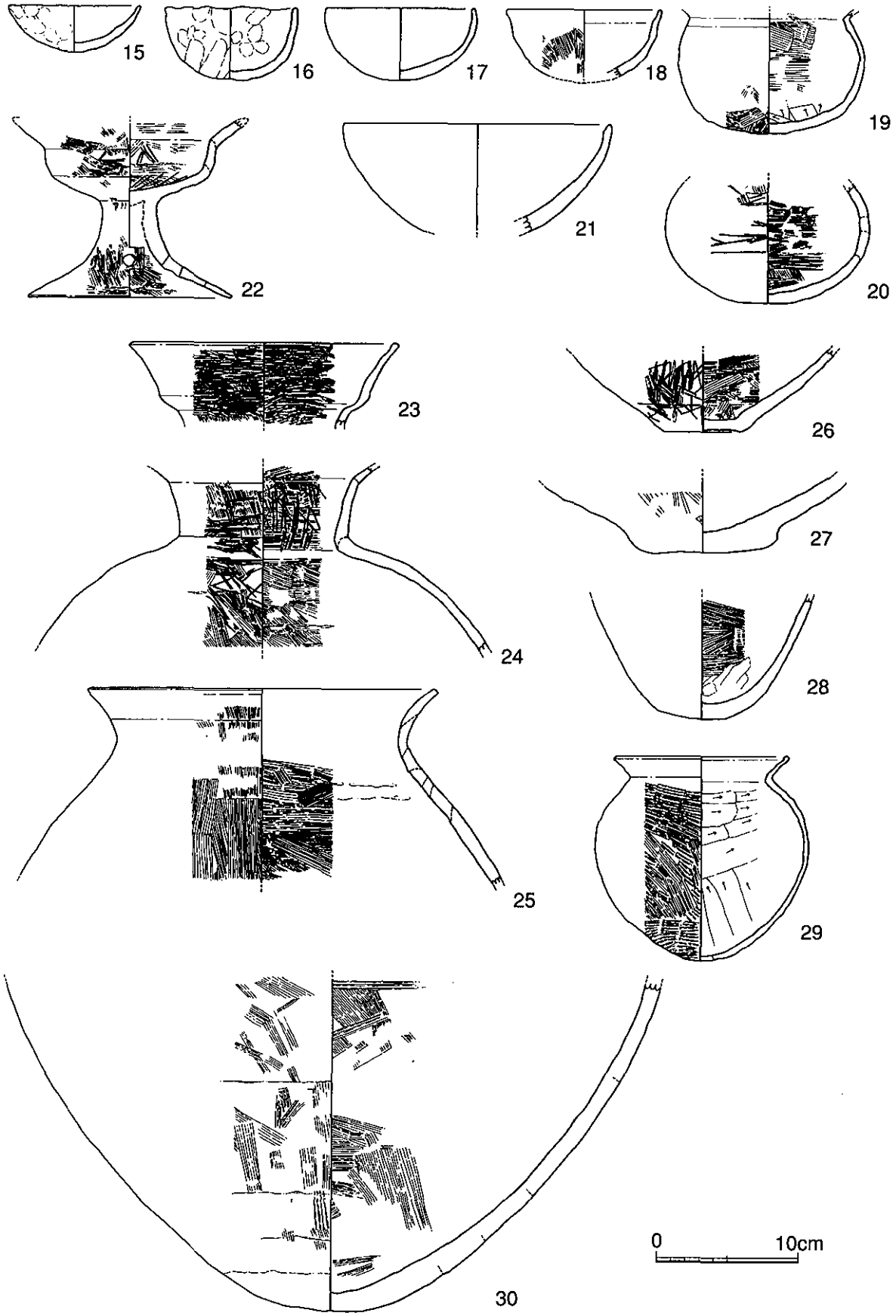


第23図　1号竪穴住居跡実測図(1/40)

いが、ハケの後ナデかミガキ、底部には放射状の暗文が観察できる。脚部はかなり広がる裾部を持ち、4孔を穿つ。外面はヘラミガキ、内面はハケを行う。接合は杯部内面からの粘土充填と思われる。

壺（23～27）　23は小破片であるが内外面ミガキがていねいなものである。24は全体から比べれば小破片である。全体的にハケメ調整を行い、その後外面はミガキを行っている。25は口縁部がゆるやかに外反するもので、胴部内外面をハケメ、口縁部内面をハケメの後ナデ、外面をナデている。内面にわずかに粘土紐の痕跡がある。26・27は底部の破片であるが、壺の底部であろう。26の内面はハケメ、外面は縦方向のミガキ、27は外面ハケメ、内面は器壁の荒れのため調整不明である。底部外面にヘラ状のもので葉脈を表すような刻みがある。

甕（28～30）　28は砲弾状の形態のもので、外面は底部にハケメが見られるが、その他はていねい



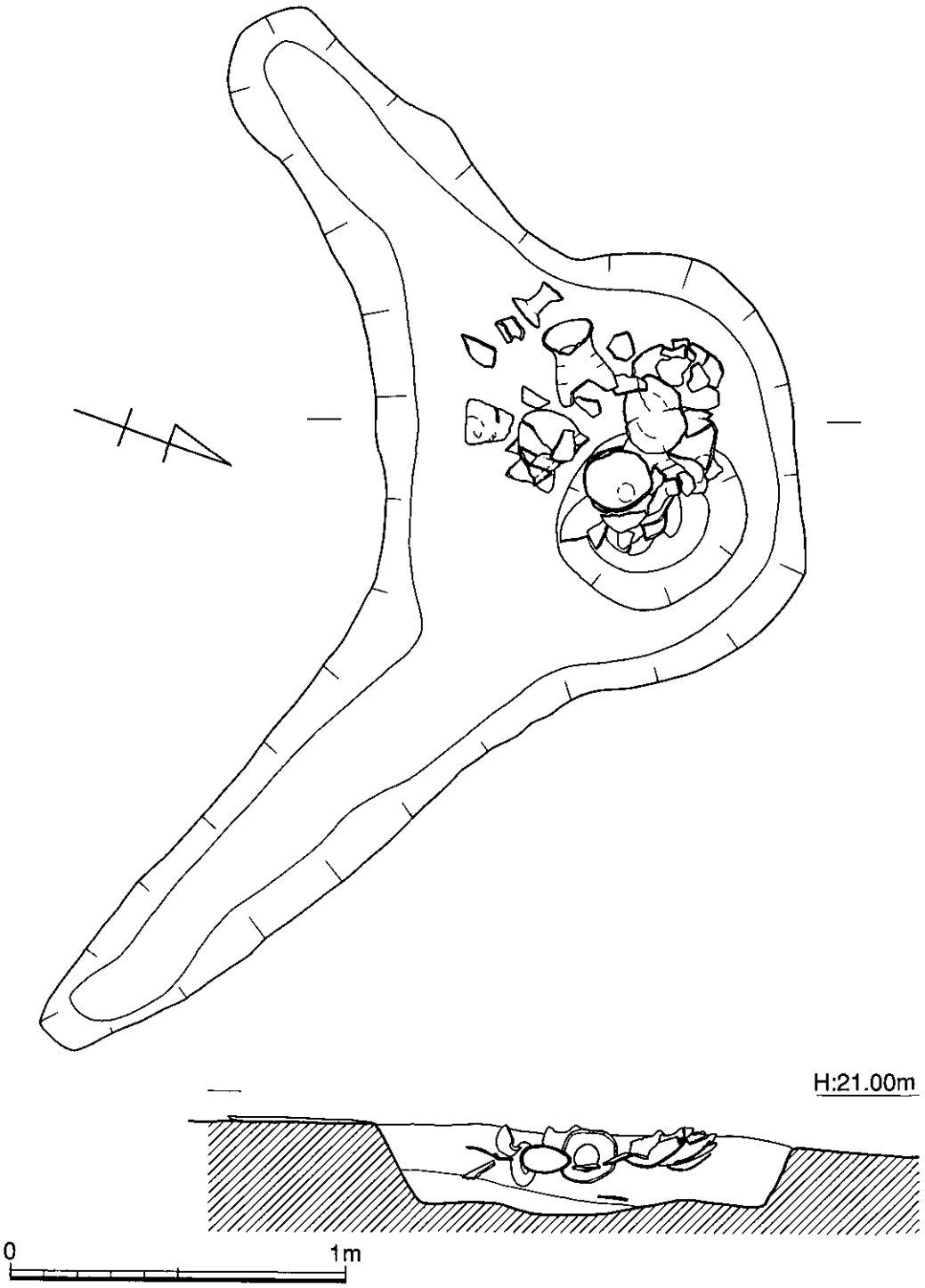
第24図　1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

にナデでいる。内面はハケの後ナデを行う。29は小型ながら口縁端部を肥厚させるタイプのもので比較的薄手に作られている。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを行う。底部に小孔があるが、意識的な穿孔と思われる。30は大型の甕で分厚い。外面はハケメが見られるが、底部付近はていねいなナデで平滑になっている。内面はナデを行う。

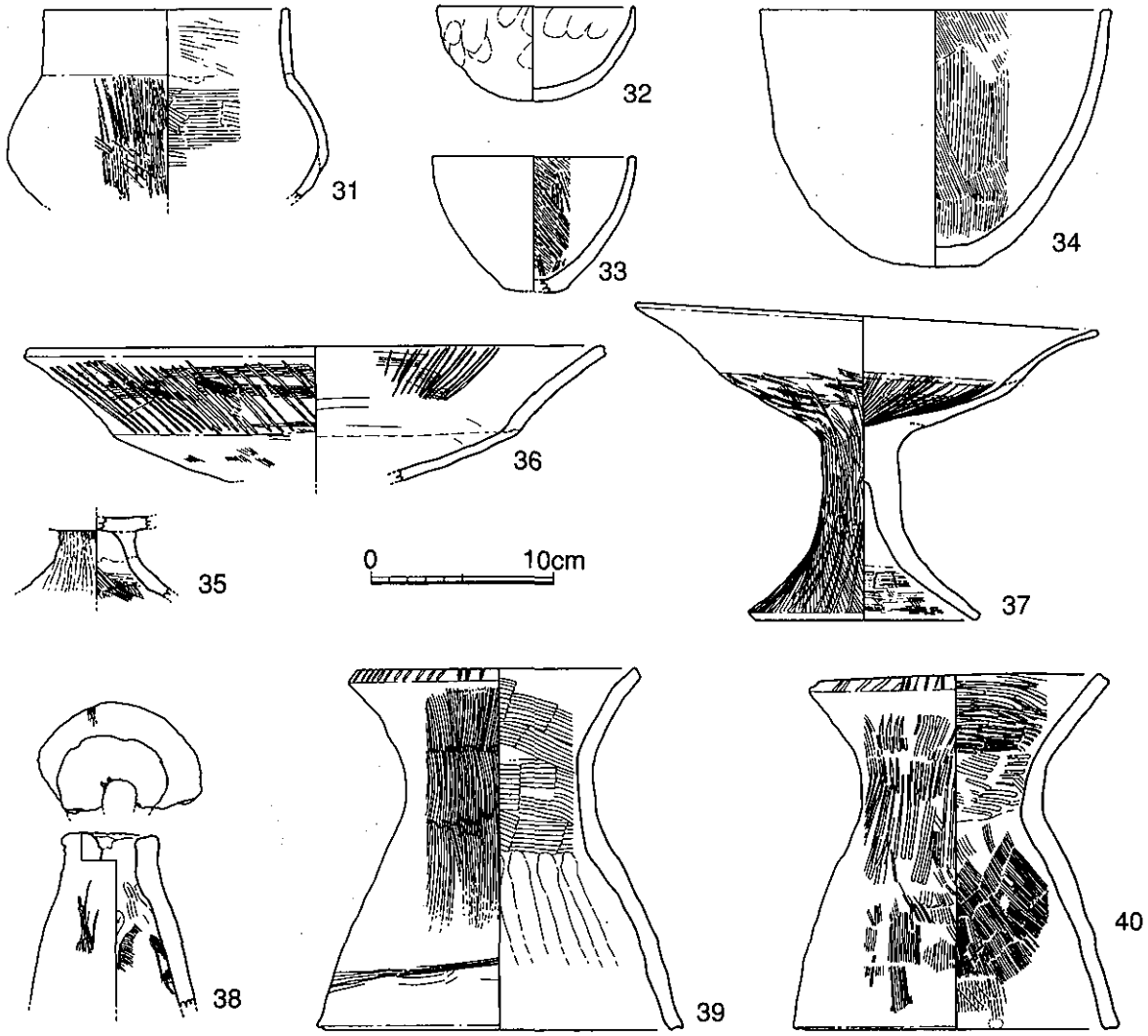
iii．土坑

ＳＫ01

調査区の中央部で検出されたものでＳＫ06の東2.5mの位置にある。おおむね長方形を呈するが



第25図　ＳＫ02実測図(1/20)



第26図　ＳＫ02出土土器実測図①(1/4)

西隅部でピットと切り合う。長軸約1.8m、短軸1.1mを測る。床面は平坦ではなく、中央部が窪む。

出土遺物は土師器４片と磁器２片のみでかつ小破片のため図示できない。

ＳＫ02（第25図、図版13(2)）

調査区の東側で検出されたもので、１号竪穴住居跡のすぐ北側にある。隅丸方形の２隅が伸びたような変則的な形をしている。中央部は1.3×1.2mほどの大きさで深さは約25cmである。床面には径55cm、深さ約10cmのピットがある。

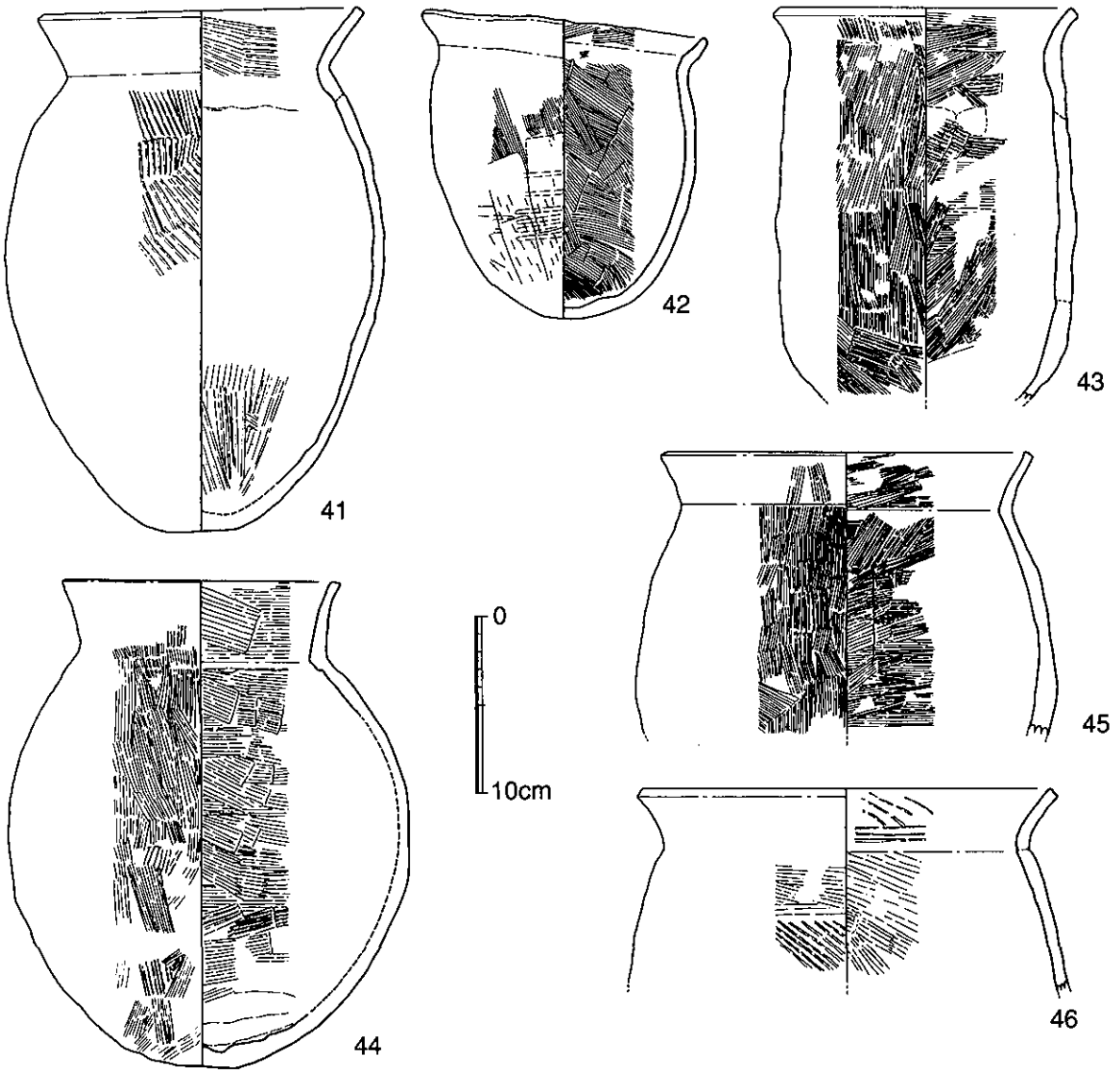
床面から約10cm浮いた状態で土師器が多く検出された。

出土遺物（第26・27図、図版19～21）

土師器

丸底壺（31）　小破片である。外面はミガキ、内面は口縁部と胴部上半がハケ、下半部がナデである。外面には焼成時にできたと思われるクレーター状の小さな剥離が多く見られる。

鉢（32～34）　32は内外面ともナデで仕上げ、特に内面はていねいであるが、外面に多く指頭圧痕が見られ、内面口縁部付近には観察できることから、手づくね成形をしたと考えられる。33は小破片であるが、内面ハケ、外面ナデである。粘土のこね方が足りなかったのか、外面はナデ時に生じ



第27図　ＳＫ02出土土器実測図②(1/4)

たと思われるひび割れが多い。34は大型の鉢で内面ハケ、外面ナデである。

高杯（35～37）　35は脚部の小破片で外面ナデ、内面ハケで仕上げる。内面の上端部に工具を押しつけた跡があることから、杯部と脚部を別々に作り、接合後脚部側から押しつけたことがわかる。36は杯部の破片で、ハケの後ナデを行い暗文を付けている。37はほぼ完形の高杯で、わずかに屈曲する杯部と自然に広がる脚部を持つものである。杯部内面底部はハケの後放射状にミガキを行っている。その外側はナデである。外面もそれぞれ対応する部分は同じ調整である。脚部は外面縦方向のミガキ、内面は裾部がハケである。接合方法は杯部側から粘土の充填を行う方法である。

器台（38～40）　38は破片のため全形は不明だが、沓形器台の可能性もある。外面をハケの後ナデ、内面はハケとナデで仕上げる。39と40は大きさに若干の違いがあるが、良く似た形態である。しかし、調整方法には違いがある。外面は40がハケ、39がハケの後ナデ、内面は39の上半部がハケ、下半部が指か何かでナデている。40はハケであるが、上半部と下半部は原体が違い、また方向も違えている。

甕（41～46）　41は長めの胴部に短く屈曲する口縁部の付くもので、底部は丸みがある。調整は胴部外面上半がハケ、下半がナデ、内面は薄くハケメ風の痕跡があるが、基本的にナデである。口縁部は外面がナデ、内面がハケの後ナデである。42はかなりいびつな作りのものである。胴部外面上半はハケ、下半はヘラケズリを行う。しかし、その部分はかなり平滑である。内面は全体をハケメ調整で仕上げる。口縁部は外面ナデ、内面はハケの後ナデを行う。43は筒状の胴部とあまり屈曲しない口縁部を持つもので、胴部内外面と口縁部内面をハケ、外面はナデを行う。44は口縁部があまり外反しないものである。胴部外面はハケの後ナデを行う、底部付近はナデが強い。内面の底部付近はナデ、その他は口縁部までハケである。45・46は小破片である。原体は違うが、内外面ハケである。

ＳＫ03（第21図、図版12(1)）

調査区の西隅で検出されたもので、おおむね方形を呈する。2.8×1.7m以上の大きさである。深さが2～3cmと浅い。ピットと切り合うが、先後関係を明らかにはできなかった。

出土遺物としては土師器小破片６片だけであった。

ＳＫ04（第21図、図版12(1)）

ＳＫ03の北側で検出されたもので、ほとんどが発掘区外に存在するものと思われる。検出された部分は弧状を呈しており、円形状になるものかと思われる。深さは６～８cmと浅い。溝に切られている。

出土遺物としては土師器小破片８片だけであった。

ＳＫ05（第21図、図版14）

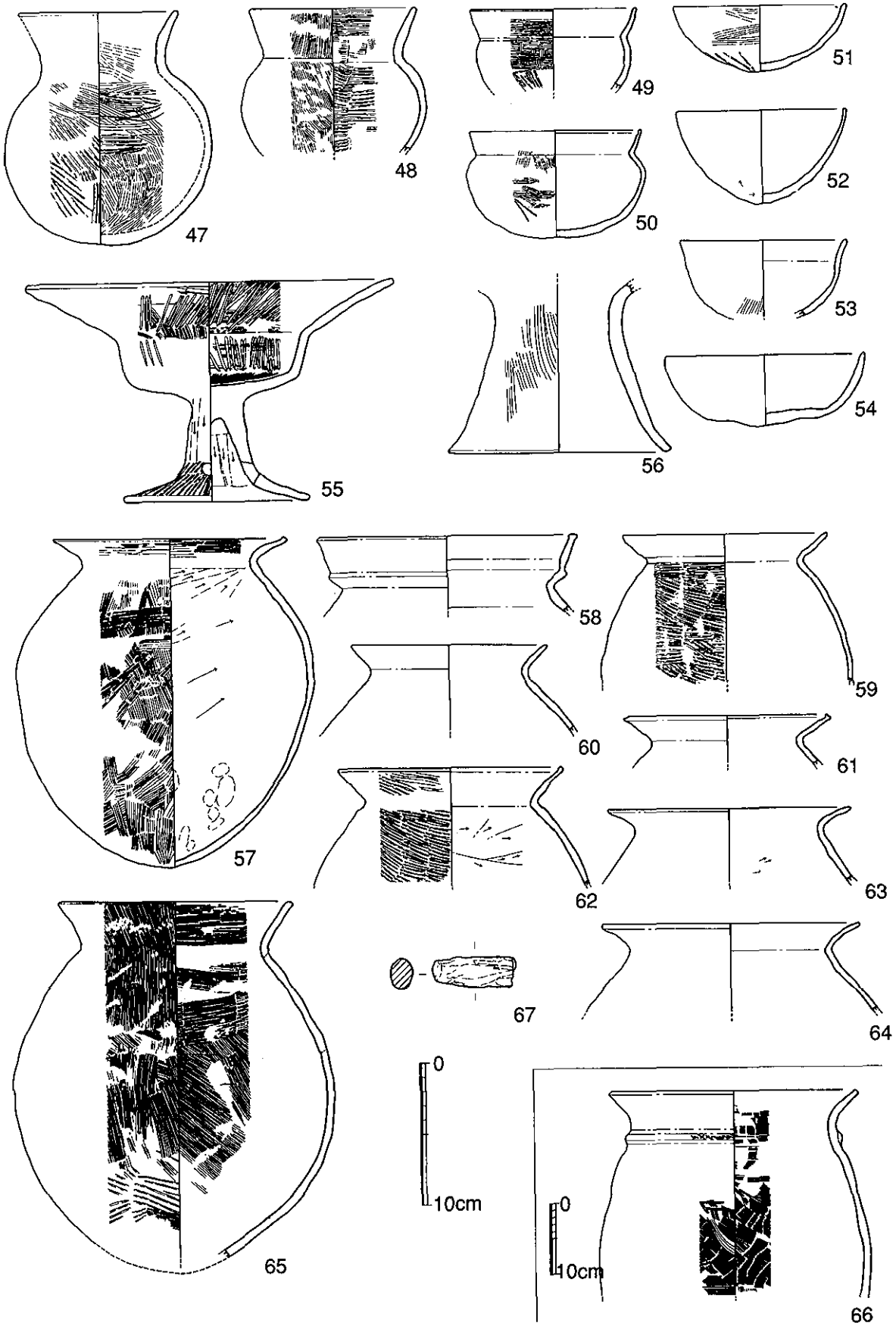
調査区の中央やや西側で検出されたもので、不整円形を呈する。中心部で約3.1×3.5mを測る。床面も平坦ではなく段状に深くなる。深い所で約20cmである。テラス状の部分から土器がややまとまって出土した。

出土遺物（第28図、図版21・22）

土師器

丸底壺（47～50）　47は口縁部の半分を欠くが、完形に近いものである。口頸部と胴部の境がゆるやかなカーブを描く。胴部は内外面ともハケメ、口頸部はナデである。胴部に焼成時にできたかと思われる径５cmほどの円形の剥離痕がある。48は全体の４分の１ほどの破片である。47に比較して、胴部と口頸部の境は明瞭である。調整は胴部内外面・口頸部内面がハケメ、口頸部外面がハケの後ナデを行っている。ただし、原体は内と外では違う。これにも胴部外面に剥離痕がある。胴部の肩部に線刻のようなものがある。意識的なものかどうかは判断しかねる。49は小破片である。偏球形の胴部に短い内湾気味に開く口頸部が付くもので、比較的薄手の良品である。胴部外面は細かいハケの後ミガキを加えている。その他はナデである。50は全体の６分の１ほどの破片である。口縁端部を肥厚させる。調整はややわかりにくいが、胴部上半は細かいハケの後ナデ、下半はヘラケズリの後ナデを加えていると思われる。胴部内面及び口頸部内外面はナデを行う。

鉢（51～54）　51は全体の３分の２ほどの破片であるが、比較的作りは良い。上半部はハケの後ナデている。その他もナデであるが、底部外面には平行に暗文様のものが観察される。52は３分の１ほどの破片である。内面はていねいなナデであるが、外面は粗いナデである。53は小破片であるが、



第28図　ＳＫ05出土土器実測図(1/4・1/8)

口縁部が若干外反するものである。内外面ともナデを行う。外面の色調は暗黒褐色を呈する。53は平底気味で内外面ともナデで仕上げる。作りは良くない。

高杯（55）　屈曲して外に開く大きな杯部とやや小さめの裾の広がる脚部からなるもので、完形に近い。杯部は内外面とも細かいハケの後ミガキを行っている。内面を見ると底部は放射状に、屈曲して直に立つ部分は縦に、外に広がる部分はやや斜め方向に磨いている。外面もほぼそれに対応している。脚部は4孔を持つがやや器面が荒れていて調整がわかりにくいが、外面はおそらくミガキであろうと思われる。

器台（56）　小破片でかつ器面が荒れていて詳細は不明である。外面はハケの痕跡がある。

甕（57～66）　57は胴部最大径が上位にあり、やや尖り底気味の胴部とかなり開く口縁部を持つものである。口縁端部は外傾する狭い平坦面を持ち、内面側にわずかに摘まみ上げた時のような段差を作りだしている。胴部外面は細かいハケ、内面はヘラケズリを行い、軽めに仕上げている。口縁部内外面はナデである。58は小破片であるが、二重口縁の甕である。稜は比較的シャープである。内外面ともナデである。59も小破片であるが、器壁が薄い。しかし、器面が荒れていて調整の詳細は不明であるが、胴部外面はタタキである。60も薄手の甕であるが、小破片でかつ器面が荒れていて調整は不詳である。61も小破片であるが、口縁端部を肥厚させ外傾する平坦面を作りだしている。62は口縁部と胴部の一部が残るもので、口縁端部を肥厚させている。胴部外面はタタキ、内面はヘラケズリ、口縁部内面はナデ、外面はハケの後ナデである。器壁は比較的薄い。63・64は小破片の上器面が荒れていて調整は良くわからない。65は底部を欠くが残りが良い甕で、口縁部があまり開かないものである。また、器壁はやや厚い。調整は胴部外面上位と口縁部外面がハケ、胴部外面下位がハケの後ナデを加える。内面は胴部上位はハケ、下位はハケメ状のナデ、口縁部内面はハケである。65は口縁部があまり外に開かないことと胴部内面がハケメ調整をしている点が他と違う。66は大甕で、器壁の厚みは1cm以上ある。胴部と口頸部の境に凸帯を持ち、上に×状の刻みを入れる。直接接合しないが、胴部の他の破片があり、それにも凸帯があって同様な刻みがある。このことからおそらく2条以上の凸帯を持つ甕であろうことが推定できる。調整は胴部内外面ともハケメである。

把手（67）　長さ5.5cmほどの把手である。割れ口から判断してもっと長いものであろう。指でおさえて成形しナデを行っている。

ＳＫ06（第29図、図版14(1)・15）

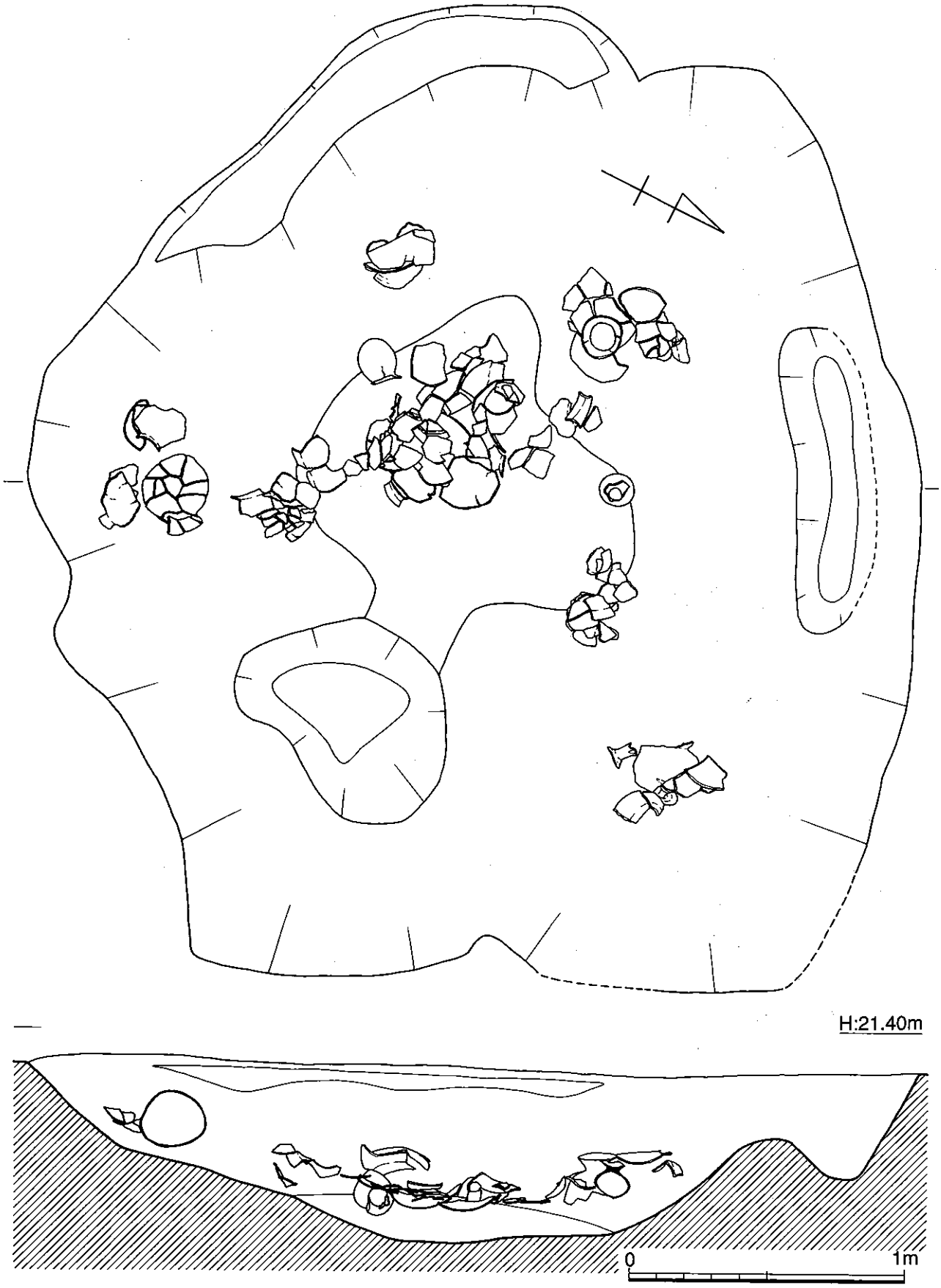
ＳＫ05の北側に接するように検出されたもので、やはり不整円形を呈する。中心部で約3.2×3.5ｍを測る。断面形はほぼ半円形を呈し中心部が最も深くなる。深い所で約65cmである。

土坑の外から投げ捨てられたような形で、断面形に沿って土器が多く出土した。ただし、床面からは少し浮いている。

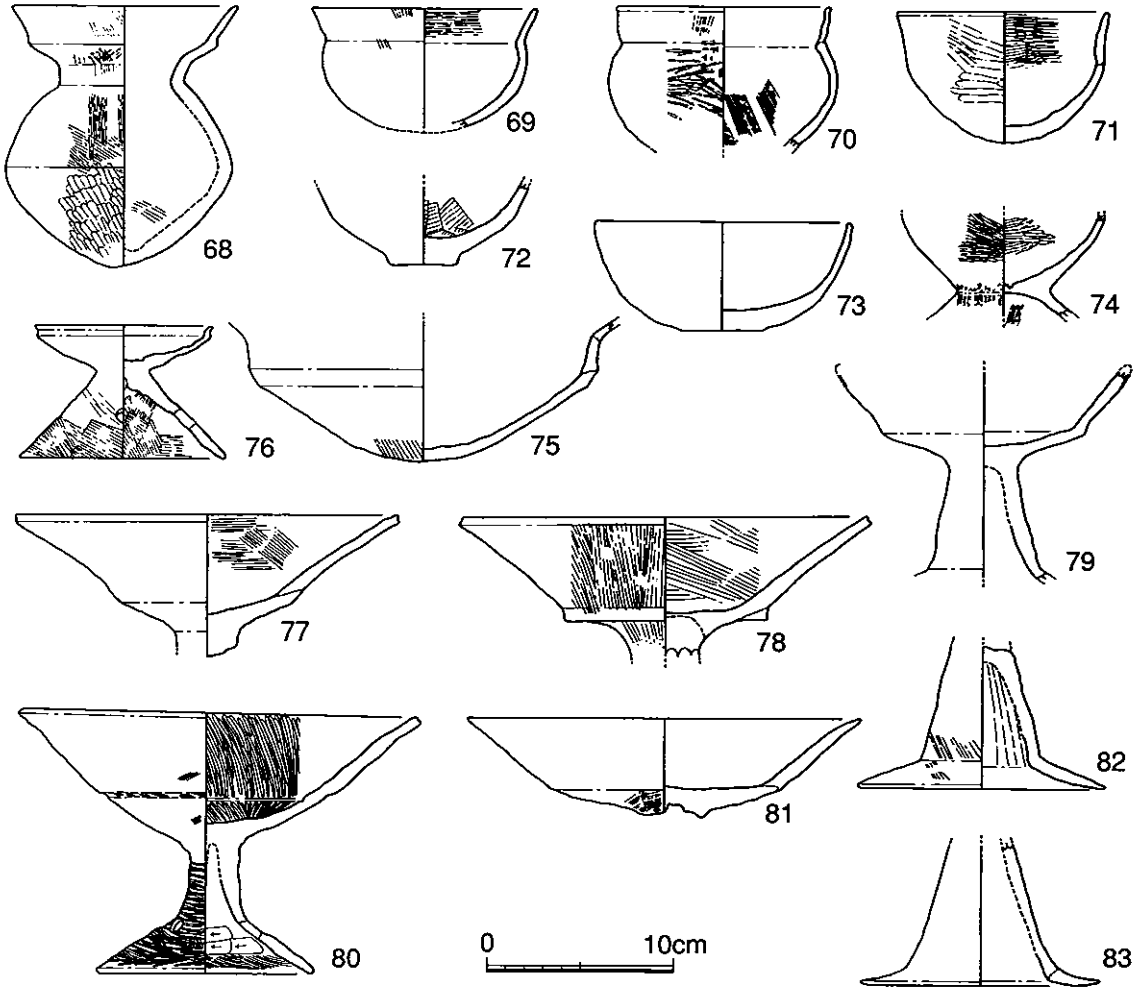
出土遺物（第30～33図、図版22～25）

土師器

小型丸底壺（68～70）　68は二重口縁の壺である。胴部は丸みが足りなく、そろばん玉を丸くした感じである。口縁下部の屈曲部はそれほどシャープではない。胴部外面下部はミガキ、上部はハケ



第29図　ＳＫ06実測図(1/20)



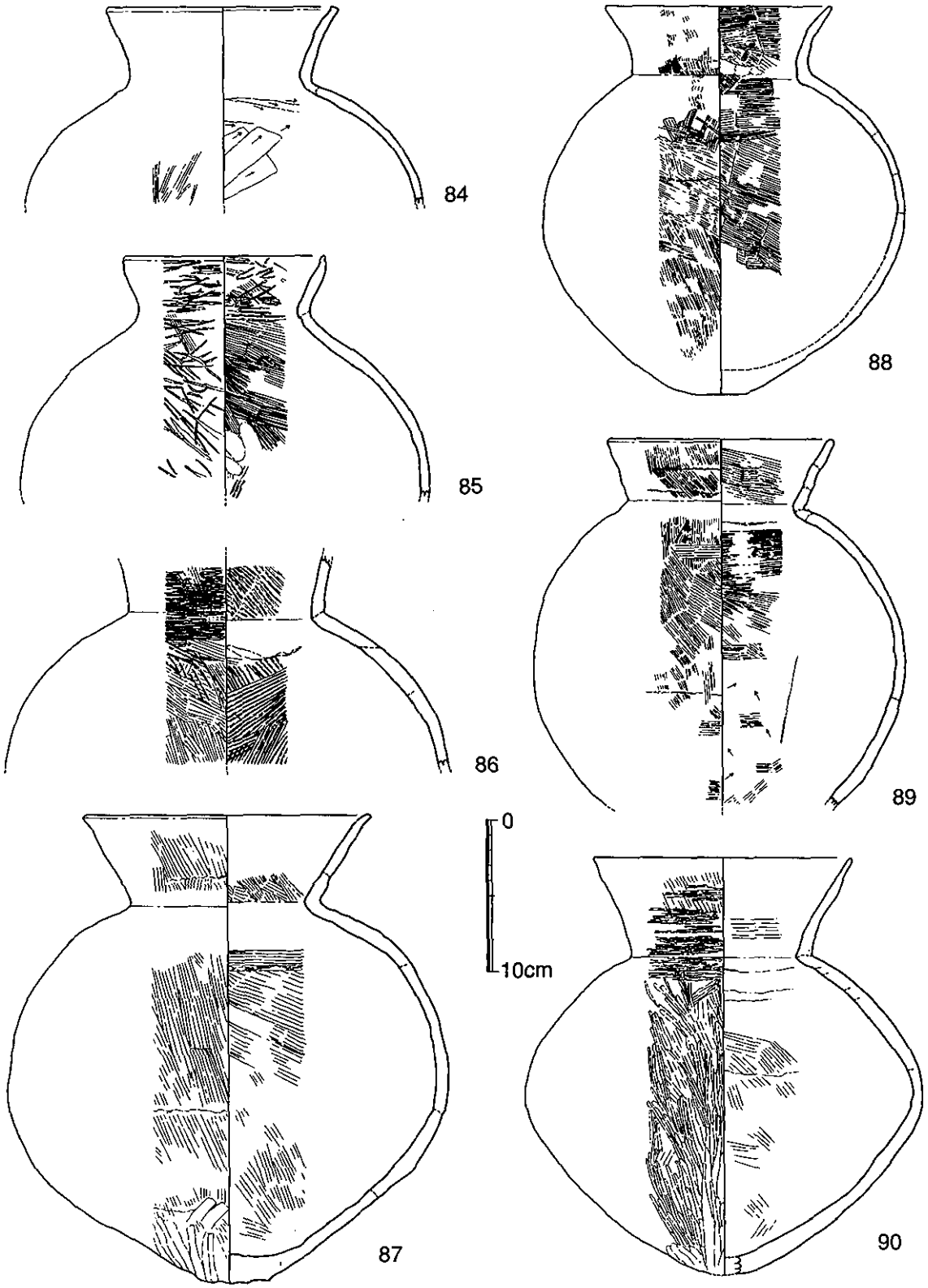
第30図　ＳＫ06出土土器実測図①(1/4)

の後ナデ、頸部もハケの後ナデ、口縁部内外面はナデである。また、胴部内面下部はハケ、上部は指ナデと思われる。69は４分の３ほど残っており、口縁部が外に開くものである。口縁部内面にハケの跡が残るが、全体的にナデで仕上げる。70は３分の１ほどの破片である。外面は細かい縦ハケの後ミガキを行う。内面は細かいハケメ風のナデを行う。比較的作りは良い。

鉢（71～75）　71は上半部がやや反転するように屈曲するもので、ほぼ完形である。外面の調整はナデと言うべきか、ミガキと言うべきか迷う。内面は口縁部はハケ、その他はナデである。72は器形が定かではない。小破片であるが底部のはっきりしたものである。内面はハケ、外面はナデを行う。73は図ではわかりにくいが、径4.5cmほどの底部が明瞭なものである。全体にナデを行っているが、外面にはその際にできたと思われるひび割れが多い。器壁は分厚い。74は脚付きの鉢と思われるもので、器面が荒れていて調整がわかりにくいが、体部内外面はミガキを行っていると思われる。75は大型の鉢である。丸底で体部は一旦反転した後外側へ伸びるものである。外面はハケの後ナデ、内面はナデである。

器台（76）　受部は浅く、短く外反する口縁部からなる。器面が荒れているため不詳だが、ナデを行っていると思われる。脚部は２孔を持ち、外面はハケの後ナデ、内面はハケを行う。

高杯（77～83）　77は杯部の３分の１ほどの破片で、体部が内湾気味に外反するものである。器面



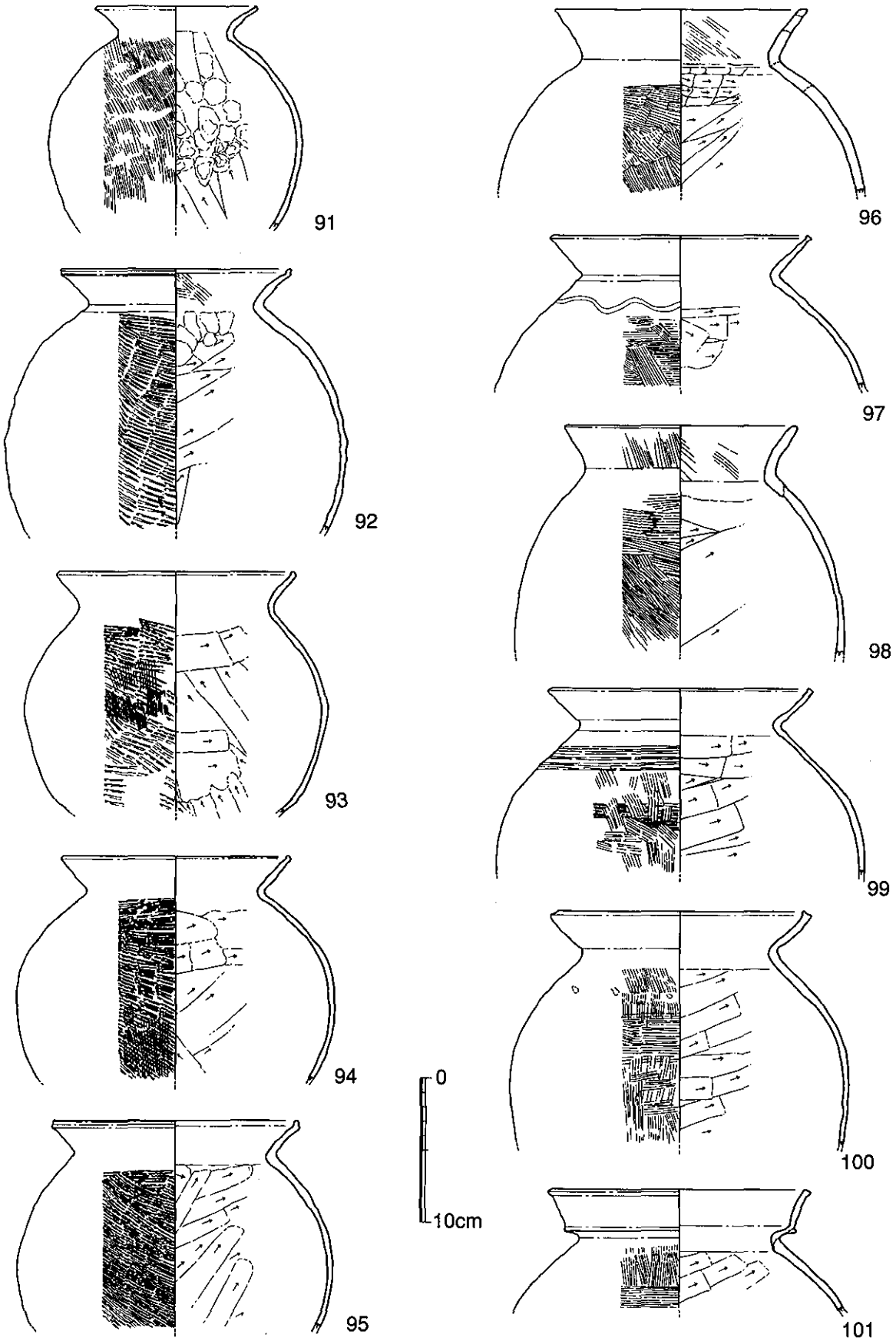
第31図　ＳＫ06出土土器実測図②(1/4)

が荒れていて調整がわかりにくいが、外面はミガキ、内面はハケメが見える。78は杯部の底部と体部の境が段をなすもので、内外面ともハケを行う。79は脚部上半と杯部の一部の破片である。杯体部の立ち上がりは前２者に比べてややきつい。現状ではナデで仕上げているように見えるが、外面

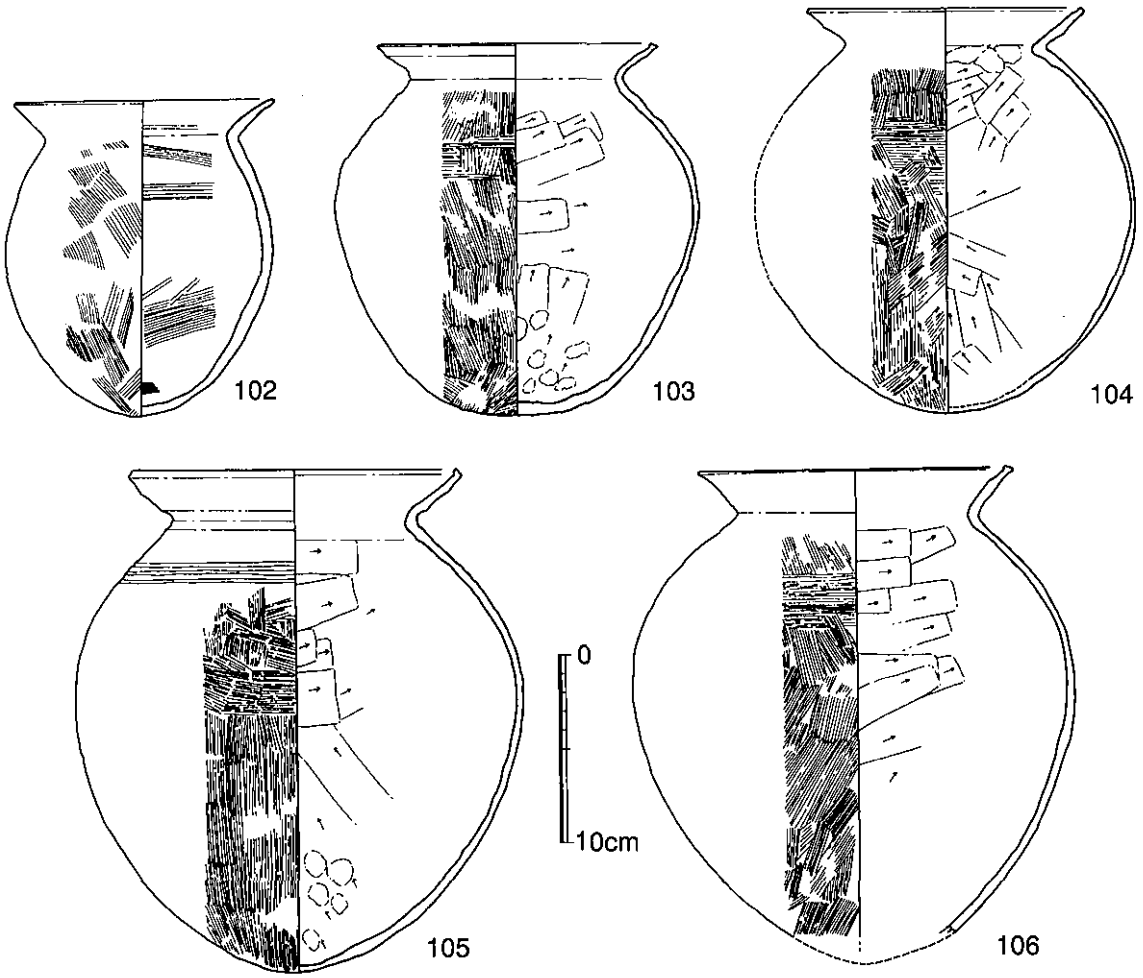
にはミガキらしい痕跡もある。脚部は内外ともナデである。80は杯部の3分の1強を欠くが比較的残りの良いものである。杯部は底部に対して体部がほとんど屈曲しないでつながる。しかし、その境目は外面はハケメが残り、内面は沈線を入れていて明らかである。調整は外面はナデ、内面はヘラミガキである。脚部は接合部は細く、途中から急に広がるもので、4孔を穿つ。外面はヘラミガキ、内面は端部付近をハケ、それより上部をヘラケズリしている。81は杯部3分の2ほどの破片である。他のものに比べやや浅い感じを持たせ、また口縁端部も自然に終わる。器面がやや荒れているが、内外面ともハケの後ナデと思われる、ハケメは外面の方が顕著である。82は脚部の破片で徐々に太くなりながら途中で急に広がるものである。外面はハケの後ナデ、内面は筒状部がヘラケズリの後ナデ、裾部がナデである。83も脚部の破片であるが、外面では途中であまり段をなさないが内面ではきちんと屈曲して広がるものである。外面はナデ、内面筒状部はヘラケズリの後ナデ、裾部はナデである。

壺（84～90）　84は口頸部と胴部上位が残ったもので、口縁端部を平坦にしているところに特徴がある。口頸部内外面はナデ、胴部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリを行う。85は口縁部から胴部上位にかけての小破片である。口頸部と胴部の境はゆるやかである。内面には接合痕が残る。外面はミガキ、内面は口縁部がハケの後ナデであるが、さらに細い原体で不規則にこする。胴部内面はハケである。86は小破片である。口頸部と胴部の境は明瞭である。外面はハケの後ナデ、内面はハケである。87は部分的に欠くが、比較的完形に近い。丸い胴部に小さな底部が付き、口頸部はやや斜め上方に直に立ち上がる。胴部と口頸部の境は明瞭である。胴部外面は底部周辺がヘラミガキ、それより上はハケメ調整である。口頸部はハケの後ナデ、内面も同様である。外面は明褐色を呈する。88は89同様丸い胴部と斜め上方に立ち上がる口頸部からなるものであるが、底部が前者ほど明瞭ではない。調整は胴部上位がハケ、下位がナデであるが、基本的にはハケメ調整を行った後、下位はナデを加えたものと思われる。内面は上位がハケ、下位はヘラケズリ、口頸部外面はナデ、内面は横方向のハケである。89は前2者に比較して胴部がやや長めになるもので、底部を欠く。調整は胴部外面が上位がハケ、下位がナデ、内面は上位がハケ、下位はヘラケズリである。口頸部は外面がハケの後ナデ、内面が斜め方向並びに横位のハケである。90はそろばん玉を丸くしたような胴部に斜行する口頸部が付くもので、胴部下位の一部を欠くが、優品である。外面は縦または斜めのヘラミガキを行う。ただし、ハケメも痕跡的に見えるので最初はハケメ調整を行ったものであろう。内面は口縁部がナデ、胴部がハケである。色調は明赤褐色である。

甕（91～106）　91は小破片である。口縁端部はわずかにつまみ上げる。胴部外面は細かいハケメ内面は上位がナデ、下位がヘラケズリである。また、内面には指頭圧痕が多い。92は上半分が残ったもので、口縁端部をつまみ上げ端面に沈線を持つものである。胴部外面はタタキ、内面はヘラケズリである。また、口縁部は内外面ともハケの後ナデである。93は小破片である。口縁端部をつまみ上げ、口縁部と胴部の境が他より丸みのあるものである。器壁はかなり薄い。胴部外面はタタキ内面はヘラケズリで、口縁部内外面は器面の荒れのためやや調整がわかりにくいが、ナデと思われる。94も小破片である。口縁部を肥厚させるもので、器壁は薄い。胴部外面タタキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ナデである。95は上半部が残るもので、口縁端部を上に伸ばし外側に沈線を入れ



第32図　ＳＫ06出土土器実測図③(1/4)



第33図　ＳＫ06出土土器実測図④(1/4)

るものである。胴部外面タタキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ナデである。96は全体からすれば小破片で、口縁部は自然に終わり、器壁はかなり分厚いものである。胴部外面タタキ風のナデ、内面ヘラケズリであるが、内面には粘土紐の接合痕が残る。口縁部外面はナデ、内面はハケの後ナデである。97は甕上部の３分の２ほどの破片である。口縁端部をつまみ上げるが、外側に斜めに下がる平坦面を作りだしている。器壁は厚い。胴部外面は細かいハケメ調整を行うが、波状の沈線を１条巡らす。内面はヘラケズリ、口縁部内外面はナデである。内面のナデは胴部と口縁部の境付近はだいぶ下まで及ぶ。98は小破片である。これも96同様分厚くて口縁部も自然に終わる。胴部外面ハケ、内面ヘラケズリを行うが、内面には粘土紐の接合痕が残る。口縁部外面はハケの後ナデ、内面はナデである。99も破片で、やや外湾気味に伸びる口縁部と上部が丸みを持たない胴部からなるものである。口縁端部はややつまみ上げ外側へ傾斜する平坦面を作りだす。また、胴部と口縁部の接合部は棒状のものでナデている。胴部外面はハケを行うが上位はナデを加え、沈線を巡らす。内面はヘラケズリである。口縁部内外面はナデを行う。100は口縁部と胴部の一部が残るものである。口縁部は外湾気味に伸び、端部は外側に傾斜する平坦面を作りだしている。胴部外面はハケとハケの後ナデの部分がある。内面はヘラケズリで、口縁部内外面はナデである。101は小破片である。二重口縁を持つ甕であるが、作りはシャープである。胴部外面は接合部付近はナデだが、基本的に

はハケメ調整を行う。内面はヘラケズリ、また、口縁部内外面はナデである。102はやや小さめで口縁部の開きが大きくバランスの悪い甕で、ほぼ完形である。胴部内外面ハケメ調整を行い、口縁部内外面はナデを行う。103は口縁端部を外側へ斜め下がりの平坦にするもので、胴部は肩がやや張る。胴部上位はハケ、それより下はハケの後ナデ、内面はヘラケズリの後ナデを加えているようだ。口縁部は内外面ともナデを行う。104は丸い胴部とやや外湾気味の口縁部からなるもので全体の5分の4程度残存している。胴部外面は細かいハケメ調整、内面はヘラケズリである。口縁部は内外面ともナデを行う。105はやや長めの胴部と外湾気味の口縁部からなるもので残存状態は良い。胴部上位に3条の併行する浅い沈線を入れる。沈線より下は細かいハケメ調整を行い、沈線より上はナデを行う。また、内面はヘラケズリを行う。口縁部は端部をややつまみ上げ、外側へ傾斜する面を作っている。内外面ともナデを行う。106は底部を欠くが、肩が張り気味の長めの胴部と内湾気味の口縁部からなるものである。口縁端部は平坦面を作っている。胴部外面は基本的にハケメ調整を行っているが、上位はナデを加えている部分がある。口縁部内外面はナデを行う。

ヘラ描き土師器（図版26）　小破片のため土器の形態を図示できないが、意識的に絵を描いたと思われるヘラ描き土師器である。天地も不明だが、魚の可能性を考えている。

ＳＫ07

ＳＫ05の西側に接するようにして検出されたもので、不整形である。

出土遺物としては土師器小破片が若干である。

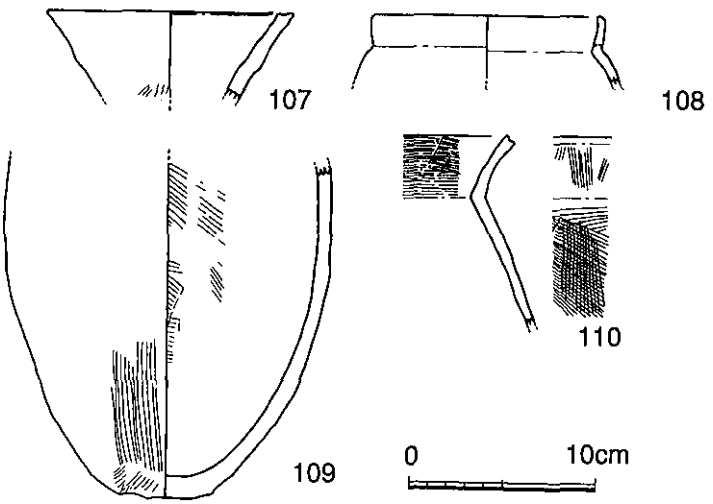
iv．その他の遺構と遺物

ピット出土遺物（第34図、図版25）

土師器

壺（107～108）　107はピット19からの出土で小破片である。内外面ともナデを行うものであるが、口縁端部は強いナデのためか窪み気味である。108はピット43からの出土で極めて小破片である。調整はわかりにくいが、外面ミガキ、内面ナデと思われる。

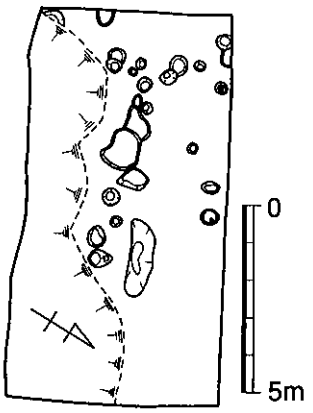
甕（109～110）　109はピット13からの出土で細めの胴部を持ち、底部はやや平底気味である。底部外面は強いハケの後ナデを加えるが、雑である。内面はハケメ調整の後ナデを行っている。110はピット33から出土し、小破片であるが、「く」の字状に屈曲する口縁部を持つものである。胴部外面はハケメ調整、内面はハケの後ナデを行い、口縁部外面もハケの後ナデ、内面はハケメ調整を行う。



第34図　ピット出土土器実測図(1/4)

（3）第３次調査（第35図、図版16）

調査概要で述べたとおり１次調査地の北側に隣接する場所で、100㎡ほどの面積を調査したにとどまる。検出された遺構はピットと大きめの落ち込みのみであった。遺物は土師器の小破片が少量出土したが、それらの時期を決定するには至らなかった。



第35図　第３次調査遺構配置図(1/200)

（4）第４次調査（第38図、図版17）

第４次調査は約1,000㎡の面積を調査したが、前述したとおり、検出された遺構として土坑10基、井戸１基、他は多数のピットである。しかし、土坑としたものでも形状が不整形であったり、遺物が出土せず性格がつかめないものも多かった。そのため、ここでは土坑２基と井戸１基について報告したい。

ｉ．土坑

ＳＫ09（第37図、図版18(1)）

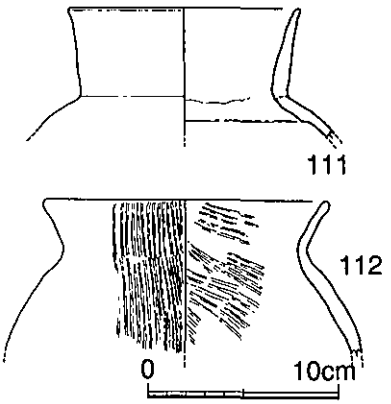
調査区の中央部やや北側で検出されたものである。長さ2.4m、最大幅0.45m、最深部で0.2mの大きさで、およそ東西方向に長い楕円形である。床面は平坦ではなく、中心部が一段下がる。

床面からだいぶ浮いた状態で土師器が出土した。

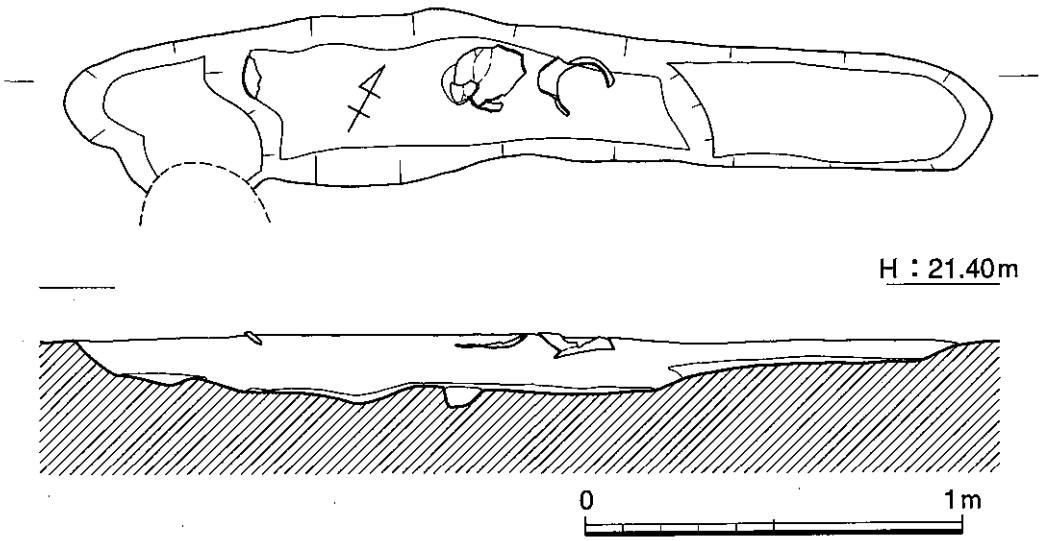
出土遺物

土師器（第36図）

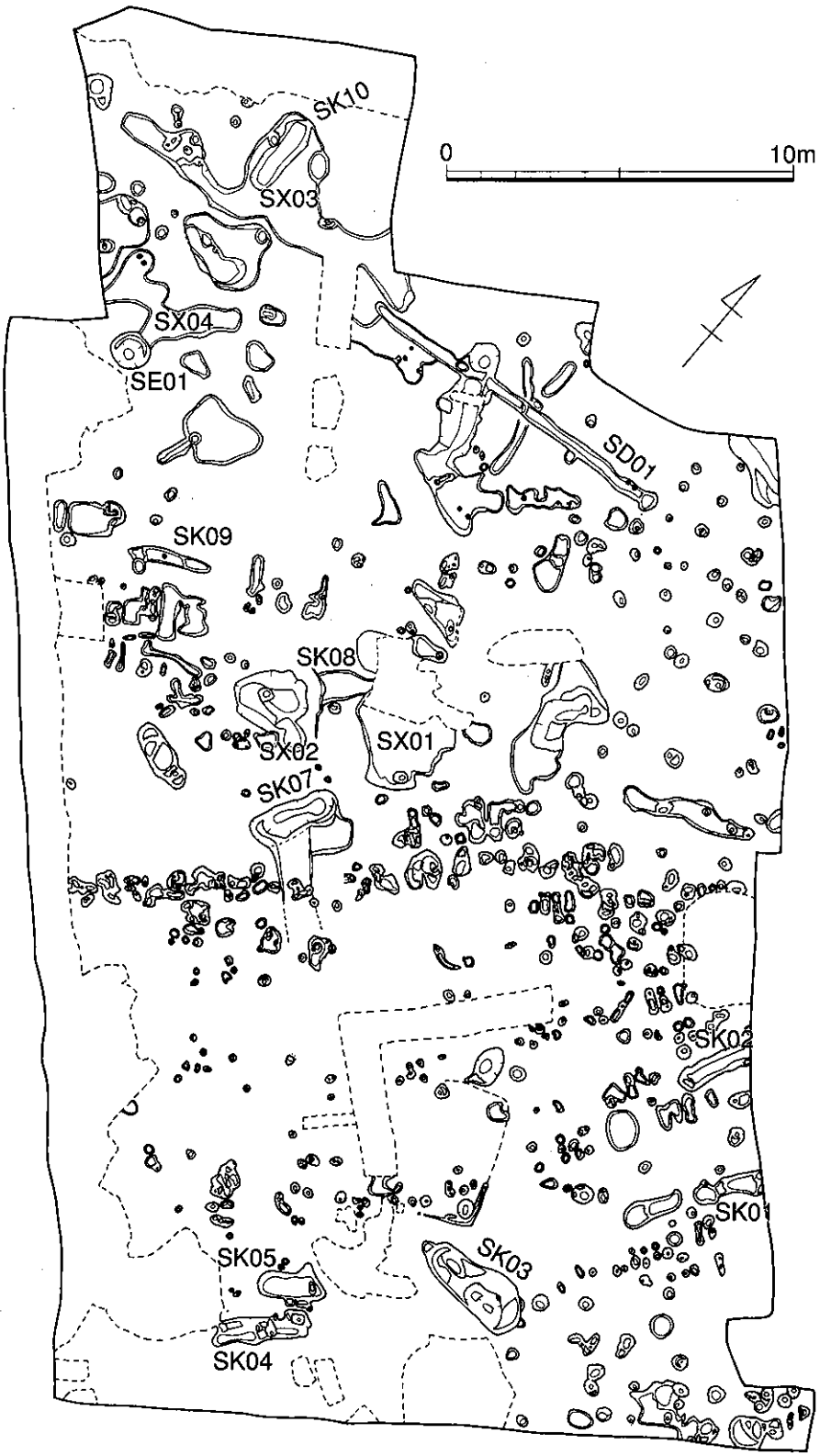
甕（112）　頸部があまりしまらないもので、口頸部はゆるやかに外反し、口縁端部はそのまま終わる。外面は全面ハケメ調整を行い、内面も



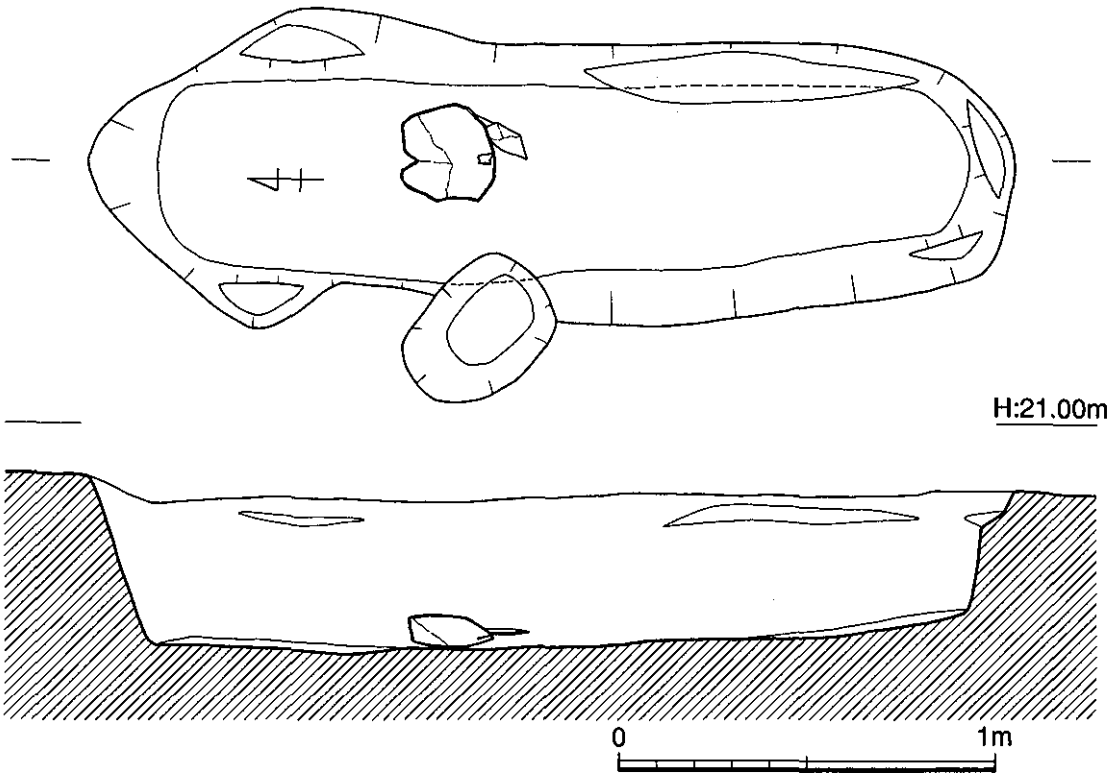
第36図
ＳＫ09・ＳＸ03出土土器
実測図(1/4)



第37図　ＳＫ09実測図（1/20）



第38図　第４次調査遺構配置図(1/200)



第39図　ＳＫ10実測図（1/20）

同様であるが、胴部の下の方へ行くにつれてナデを加えるようだ。

ＳＫ10（第39図、図版18(2)）

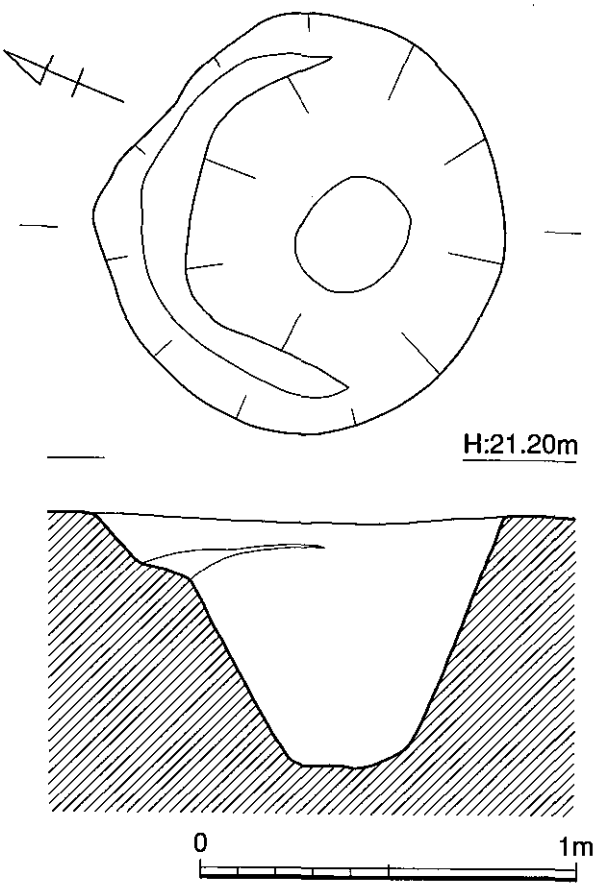
調査区の北端に近い部分で検出されたものである。おおむね南北に主軸を持つ楕円形を呈する。長さ2.45m、最大幅0.9mを測る。床面は平坦に近いが、南側がやや上がるため、深さは0.45～0.35mと一定しない。

床面近くで土師器甕の破片が出土した。胴部の一部の破片のため図示できないが、薄手の土器で外面ハケ、内面ヘラケズリを行うものである。

ii．井戸

ＳＥ01（第40図、図版18(3)）

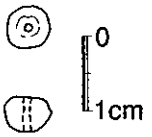
調査区の北側、ＳＫ09とＳＫ10の中間で検出されたものである。ほぼ円形を呈し、径約1.1mの大きさである。



第40図　ＳＥ01実測図（1/20）

中段にテラスを持ち、深さは1.65mである。しかし、形状などから井戸と考えたもので、断定はできない。

埋土から4片の土師器が出土しているが、どれも小破片である。ハケメやヘラケズリなどの調整方法から見て古式土師器の範疇に入るものと判断できる。



第41図
ピット出土遺物
実測図(1/1)

iii．その他の遺物

土師器（第36図）

壺（111）　調査区北端の不整形の落ち込みであるＳＸ03からの出土である。口頸部と胴部の一部の破片であるが図示できる大きさである。内外面ともナデで仕上げている。

表2　原ノ畑遺跡出土土器法量表

No.	遺構	種類	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径 ④高台径 ⑤胴部最大径
1	ＳＤ01	土師器	小型丸底壺	①10.4 ②9.1 ⑤12.0
2		〃	〃	①(12.0) ⑤12.8
3		〃	鉢	①(13.0) ②5.0
4	ＳＤ09	〃	台付き鉢	①(9.6) ②5.3 ③4.9
5	ＳＤ01	〃	高杯	
6		〃	壺	①(16.2)
7		〃	〃	①(15.6)
8		〃	甕	①(21.2)
9	ＳＸ02	須恵器	杯	④(6.8)
10		〃	〃	①(13.6) ②3.2 ③(9.2)
11		土師器	〃	③(8.0)
12		〃	〃	①(14.0) ②3.4 ③(8.2)
13	Ｐ3	須恵器	蓋	①(18.0) ②1.7
14	P15	〃	杯	①(14.6) ②3.45 ③(10.8)
15	調整痕跡	土師器	鉢	①9.2 ②3.3
16		〃	〃	①9.2 ②5.0
17		〃	〃	①(10.5) ②5.1
18		〃	〃	①(11.0)
19		〃	小型壺	⑤12.7
20		〃	〃	⑤14.4
21		〃	鉢	①(18.6)
22		〃	高杯	③14.0
23		〃	壺	①(18.2)
24		〃	〃	
25		土師器	壺	①(24.0)
26		〃	〃	③5.8
27		〃	〃	③(8.8)
28		〃	甕	
29		〃	〃	①12.0 ②14.5 ⑤15.1
30		〃	〃	
31	ＳＫ02	〃	丸底壺	①(13.4) ⑤17.5
32		〃	鉢	①(10.9) ②5.2
33		〃	〃	①11.1 ②7.4 ③3.5
34		〃	〃	①19.0 ②14.0
35		〃	高杯	
36		〃	〃	①(31.4)
37		〃	〃	①25.3 ②16.55 ③12.6
38		〃	器台	
39		〃	〃	①15.4 ②19.7 ③20.0
40		〃	〃	①14.2 ②19.3 ③16.0
41		〃	甕	①(17.5) ②29.4 ⑤21.3
42		〃	〃	①16.4 ②16.8 ⑤15.0
43		〃	〃	①(16.4) ⑤17.0
44		〃	〃	①15.6 ②27.5 ⑤22.6
45		〃	〃	①(22.0)
46		〃	〃	①(23.0)
47	ＳＫ05	〃	丸底壺	①(11.0) ②16.3 ⑤14.4
48		〃	〃	①11.7 ⑤(13.0)

（　）内の数値は復元値を表す

No.	遺構	種類	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径 ④高台径 ⑤胴部最大径
49		土師器	丸底壺	①(8.0) ⑤(10.8)
50		〃	〃	①(12.0) ②7.5 ⑤(12.6)
51		〃	鉢	①(12.1) ②4.6
52		〃	〃	①(11.8) ②6.6
53		〃	〃	①(11.9)
54		〃	〃	①(13.0) ②5.0
55		〃	高杯	①25.4 ②15.5 ③12.9
56		〃	器台	①(15.6)
57		〃	甕	①16.2 ②23.0 ⑤20.9
58		〃	〃	①(18.3)
59		〃	〃	①(14.4)
60		〃	〃	①(13.6)
61		〃	〃	①(14.6)
62		〃	〃	①(15.8)
63		〃	〃	①(17.0)
64		〃	〃	①(17.9)
65		〃	〃	①16.4 ⑤22.5
66		〃	〃	①(34.2)
67		〃	把手	
68	SK06	〃	小型丸底壺	①12.0 ②13.9 ⑤12.0
69		〃	〃	①(13.0)
70		〃	〃	①(11.4) ⑤(12.2)
71		〃	鉢	①11.3 ②6.9
72		〃	〃	③3.6
73		〃	〃	①(13.4) ②5.8
74		〃	〃	②5.3 ⑤(10.9)
75		〃	〃	
76		〃	器台	①9.4 ②6.8 ③11.0
77		〃	高杯	①(20.4)
78		〃	〃	①(22.0)
79		〃	〃	
80		〃	〃	①21.4 ②13.7 ③13.4

No.	遺構	種類	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径 ④高台径 ⑤胴部最大径
81		土師器	高杯	①(21.0)
82		〃	〃	③13.2
83		〃	〃	③12.6
84		〃	壺	①15.0
85		〃	〃	①(13.6)
86		〃	〃	
87		〃	〃	①19.0 ②31.5 ③4.5 ⑤29.0
88		〃	〃	①14.6 ②25.3 ⑤23.6
89		〃	〃	①14.6 ⑤24.3
90		〃	〃	①16.9 ⑤26.0
91		〃	甕	①(11.0) ⑤17.6
92		〃	〃	①(16.0) ⑤(23.8)
93		〃	〃	①(16.6) ⑤(21.0)
94		〃	〃	①(15.9) ⑤(22.0)
95		〃	〃	①17.1 ⑤(21.8)
96		〃	〃	①(17.4) ⑤(25.4)
97		〃	〃	①(17.4)
98		〃	〃	①(16.0) ⑤(22.4)
99		〃	〃	①(18.3) ⑤(25.4)
100		〃	〃	①18.0 ⑤(23.4)
101		〃	〃	①(18.2)
102		〃	〃	①13.8 ②16.8 ⑤14.2
103		〃	〃	①(15.0) ②19.8 ⑤19.4
104		〃	〃	①14.8 ②21.8 ⑤20.5
105		〃	〃	①17.4 ②26.8 ⑤23.8
106		〃	〃	①16.8 ⑤23.8
107	P19	〃	壺	①(13.0)
108	P43	〃	〃	①(12.0)
109	P13	〃	甕	
110	P33	〃	〃	
111	SX03	〃	壺	①(12.0)
112	SK09	〃	甕	①15.0

（　）内の数値は復元値を表す

Ⅲ．まとめ

原ノ畑遺跡の４回にわたる発掘調査についてその結果を報告したが、発掘調査で検出した遺構の時期を中心に簡単にまとめてみたい。次に遺跡全体についての問題点を指摘して今後の発掘調査の課題としたい。

１．遺構の時期

第１次調査

掘立柱建物ＳＢ01・ＳＢ02については、柱穴からの出土遺物がいずれも小破片でそれらから時期を断定するのは難しい。しかし、発掘区全体を見た場合、出土遺物は古墳時代前期と奈良時代に限られる。近年、掘立柱建物はさまざまな時代のものが見つかっているが、ここでは奈良時代の可能性が強いと考えている。

溝は多数検出された。ＳＤ01からは比較的多くの土師器が出土している。甕・小型丸底壺や鉢の形態から考えて布留式土器の前半に位置付けられるものと思われる。ＳＤ04も同様と考えられる。ＳＤ02・ＳＤ03・ＳＤ06～ＳＤ09については小破片であるが、古式土師器片が出土しており、これらも同時期の可能性が高い。ＳＤ04・ＳＤ05については土師器や須恵器が出ていて時期決定はできない。

ＳＸ01は時期不明の土師器と近世陶磁器が出土しているが、近世の可能性が強いと考える。ＳＸ02は奈良時代の須恵器と土師器が出土していて、奈良時代に属すると考える。

第２次調査

１号竪穴住居跡からは比較的多くの土師器が出土している。甕の形態や口縁部の特徴、高杯などから布留式土器でも古い方に属すると思われる。

土坑はＳＫ02・ＳＫ05・ＳＫ06から土師器がかなりまとまって出土している。ＳＫ02出土土器には甕・壺・高杯・器台・鉢があるが、基本的には在来の器種で構成され、外来系の土器が含まれていないことが特徴としてあげられる。これらは古墳時代の最も古い段階に置くことができ、いわゆる布留式土器の前半に位置付けられるものと思われるが、第26図36の高杯や平底気味の底部を持つ41の甕は弥生時代終末の土器としてもおかしくないものかもしれない。

ＳＫ05出土土師器は甕・壺・高杯・器台・鉢で構成されているが、高杯の形態や甕の口縁部に後に畿内と言われる地域の土器の特徴が見られる。また、第28図58は二重口縁の甕で山陰系の土器と思われる。しかし、甕内面のヘラケズリはまだ稚拙であまり薄くできていないなど、在地産であることをうかがわせる。高杯は比較的ていねいに作っているのが目に付く。これらの土器群も布留式土器前半に位置付けられるものと思われる。

ＳＫ06出土土師器も甕・壺・高杯・器台・鉢で構成されているが、ＳＫ05出土土師器同様近畿地方や山陰系の土器が含まれる。しかし、やはり甕内面のヘラケズリなどは稚拙であるし、土器全体があまりつくりがじょうずでないという印象を持たせる一群である。これらも布留式土器前半のものと思われるが、第31図87の壺の底部は平底気味であることなど弥生土器を感じさせるものも含ま

れる。また、同78の高杯のように杯部に凸帯状の段を持つものについては、北部九州の弥生時代中期に凸帯付きの高杯がたまに見られるが、その系統だろうか。

第３次調査

本文で記述したとおり、ピットが検出された。出土土師器が小破片で明確な時期決定は困難であるが、古式土師器と判断できる。従って、本調査区も基本的には古墳時代前期に属する遺構を主とするものと思われる。

第４次調査

遺物の出土を見た主な遺構について記述したい。

ＳＫ09からは土師器の甕が出土している。胴部内面もハケメ調整を行うもので、古墳時代前期の土師器として良いと思われる。

ＳＫ10からも土師器甕が出土しているが、胴部破片で図示しなかった。しかし、その特徴からやはり古墳時代前期の土師器と考えている。

ＳＸ03からは土師器壺の破片が出土した。やはり古墳時代前期の土師器として良いだろう。

ＳＥ01は井戸の可能性を考えたものであるが、出土土器が小破片であった。しかし、他の土器と比較しても古墳時代前期の土師器として良いものと思われる。

以上のように、４回の調査で検出された遺構からは奈良時代以外のものとしては、布留式土器、またはそうであろうと思われる土師器の出土をみたため、古墳時代前期の遺構と判断される。実年代については、古墳時代の開始を西暦300年前後とする従来の考え方からすれば、４世紀（その前半）と言えるが、近年古墳時代の開始を３世紀半ば頃とする意見が多くなってきており、それからすれば３世紀代に引き上げることが必要になろう。九州の土師器について総体的な編年案を示されている柳田康雄氏の案〈註１〉によれば、第２次調査の１号竪穴住居跡出土土器はⅡａ式、ＳＫ02出土土器はＩｂ式を含むⅡａ式、ＳＫ05出土土器はⅡａ式、ＳＫ06出土土器もＩｂ式を含むⅡａ式とすることができると思う。氏によればＩｂ式は３世紀後半、Ⅱａ式は３世紀末とされる。

２．今後の課題

４回の発掘調査によって、原ノ畑遺跡が古墳時代前期と奈良時代の遺跡であることが判明し、奈良時代の遺構は遺跡推定範囲（第11図）の北側が主で、古墳時代の集落は南側に中心部があることがわかった。今後は周囲の調査を進め、どのような集落遺跡なのか、なぜ短期間の集落であったのかなどについて検討していかなければならないと考える。

〈註１〉　柳田康雄「２　土師器の編年　九州」『古墳時代の研究　６土師器と須恵器』1991

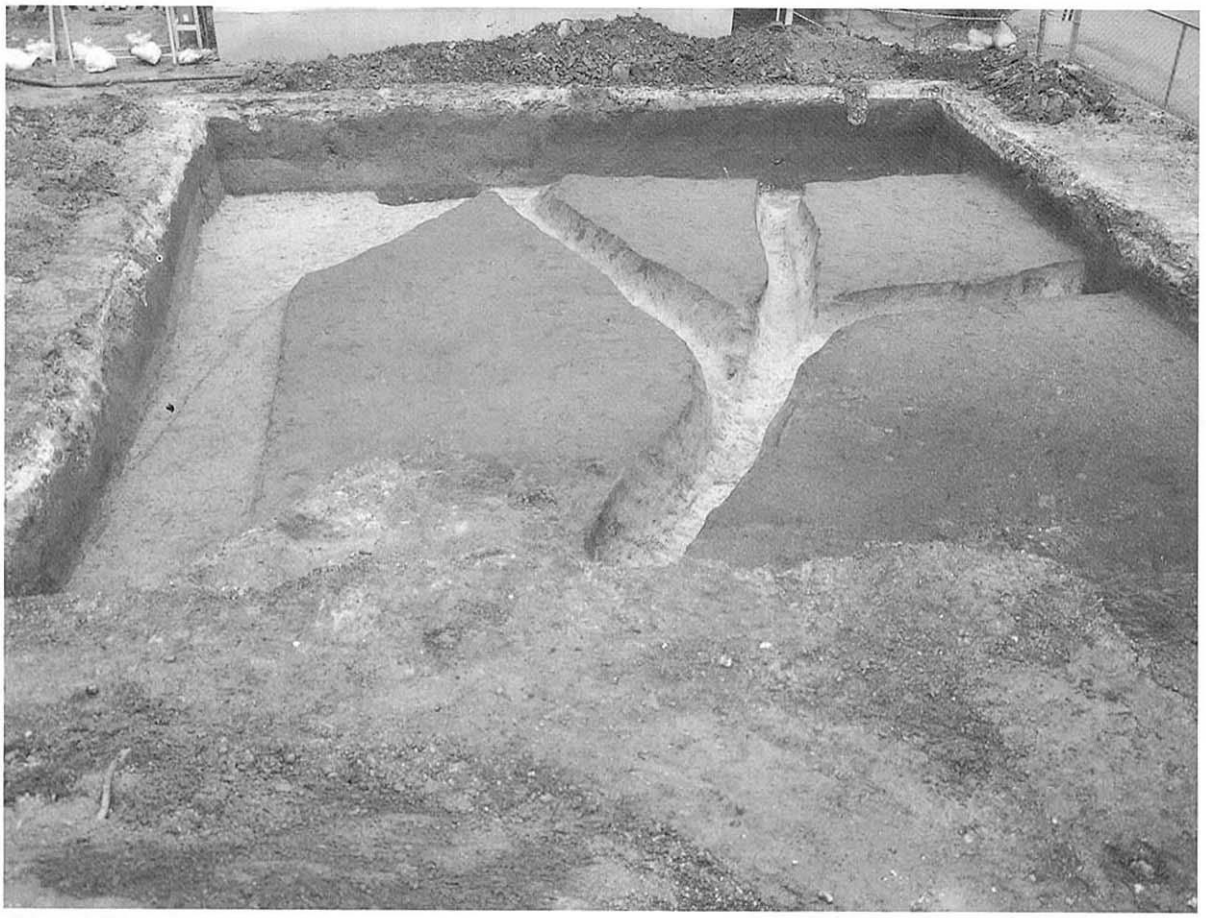
図　　版

瑞穂遺跡

(1)　瑞穂遺跡第 1 次調査地北半（南から）

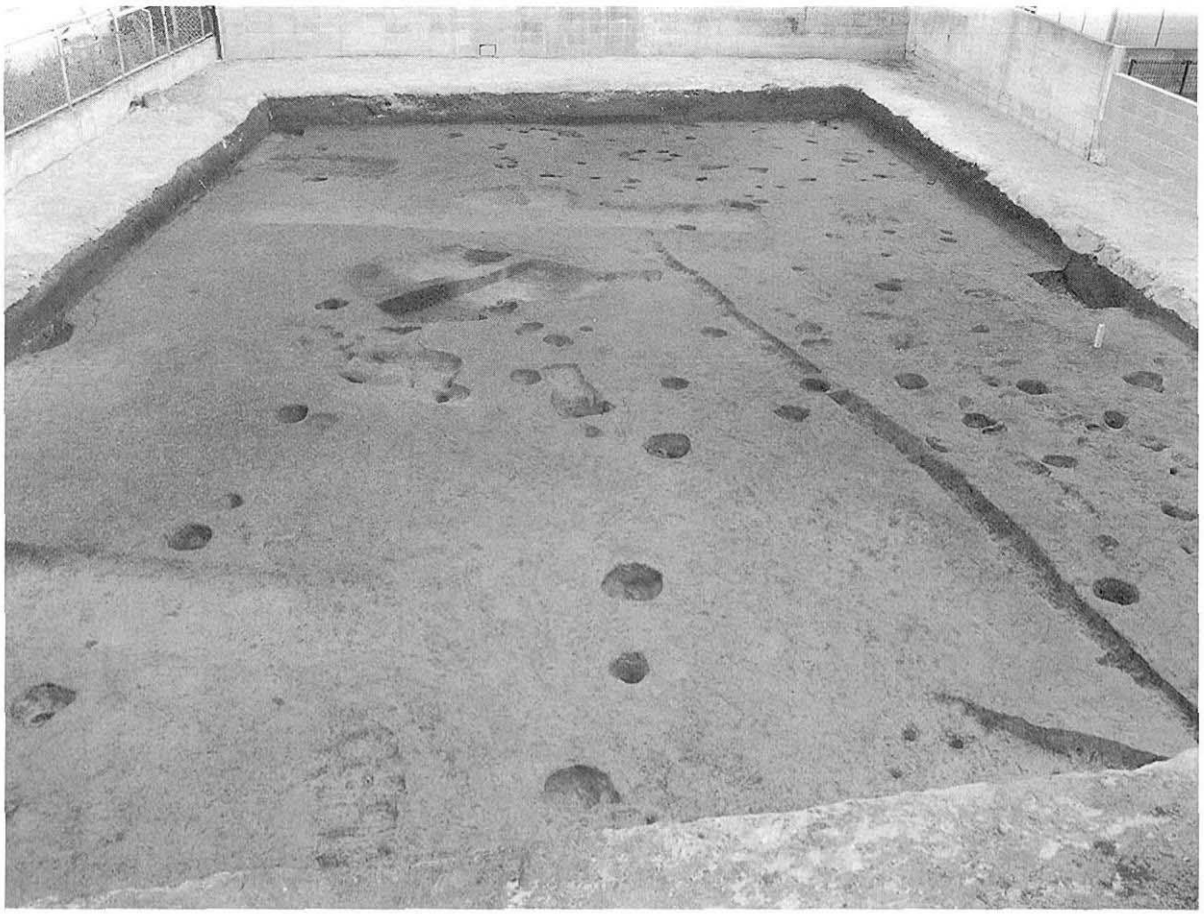
(2)　瑞穂遺跡第 1 次調査地北半（西から）

図版 2

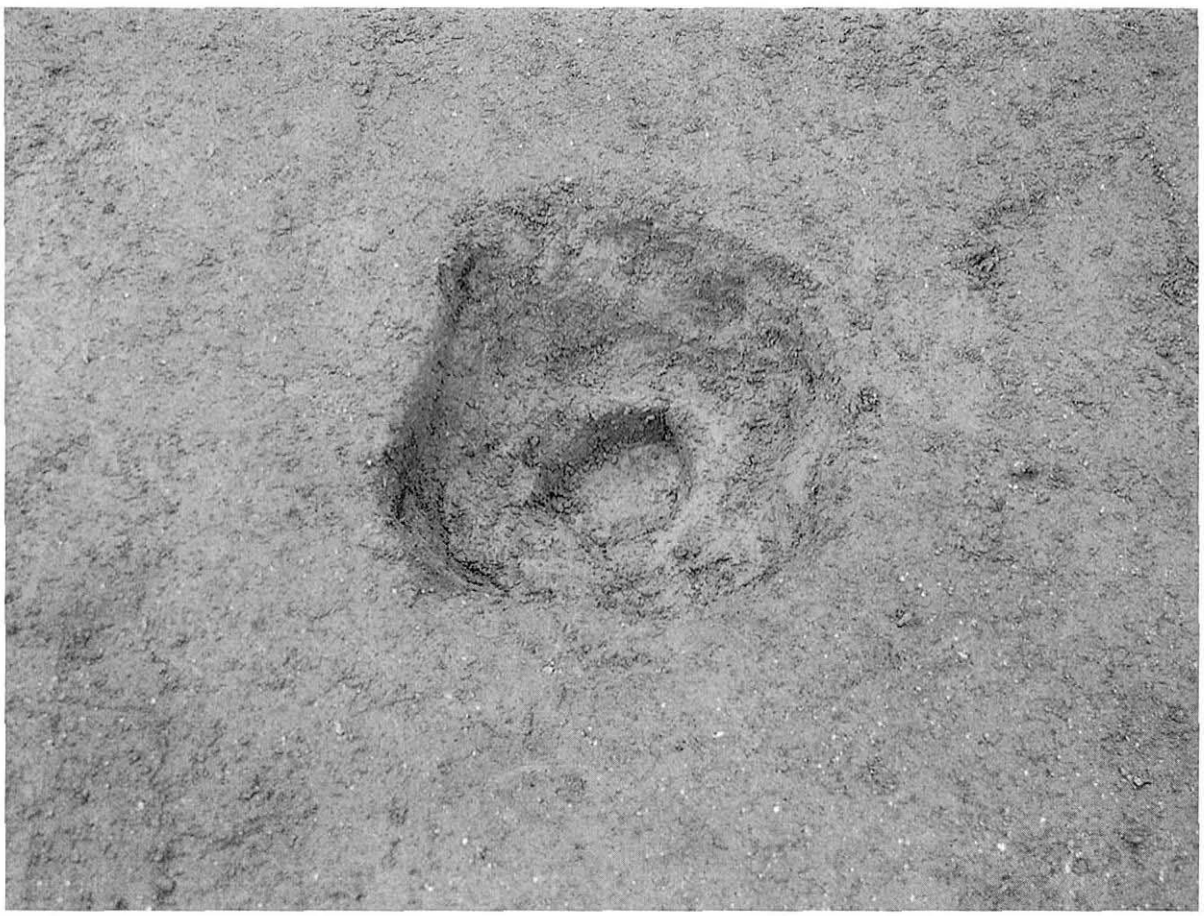


(1)　瑞穂遺跡第 1 次調査地南半（北から）

(2)　瑞穂遺跡第 1 次調査地南半（西から）

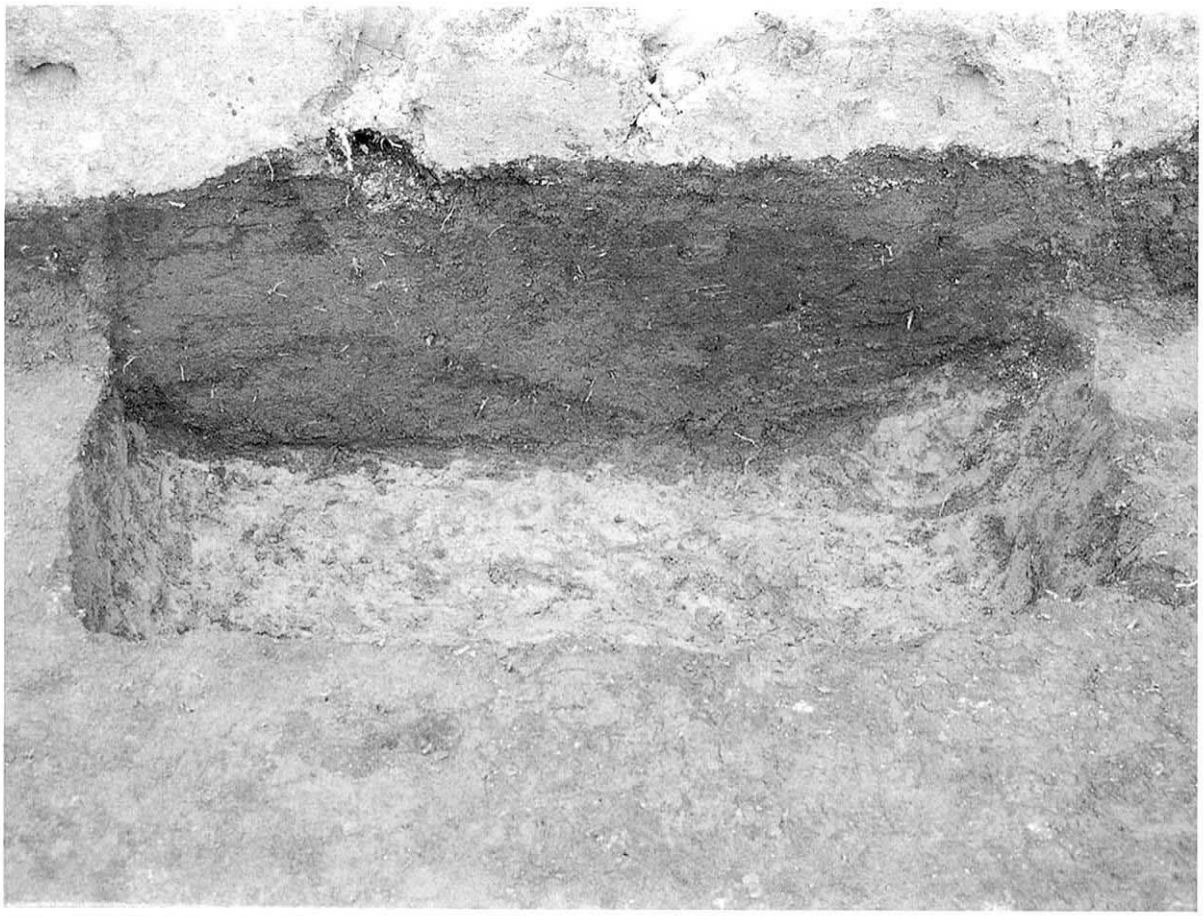


(1)　瑞穂遺跡第２次調査地全景（北から）



(2)　瑞穂遺跡第２次調査ＳＢ01ピット

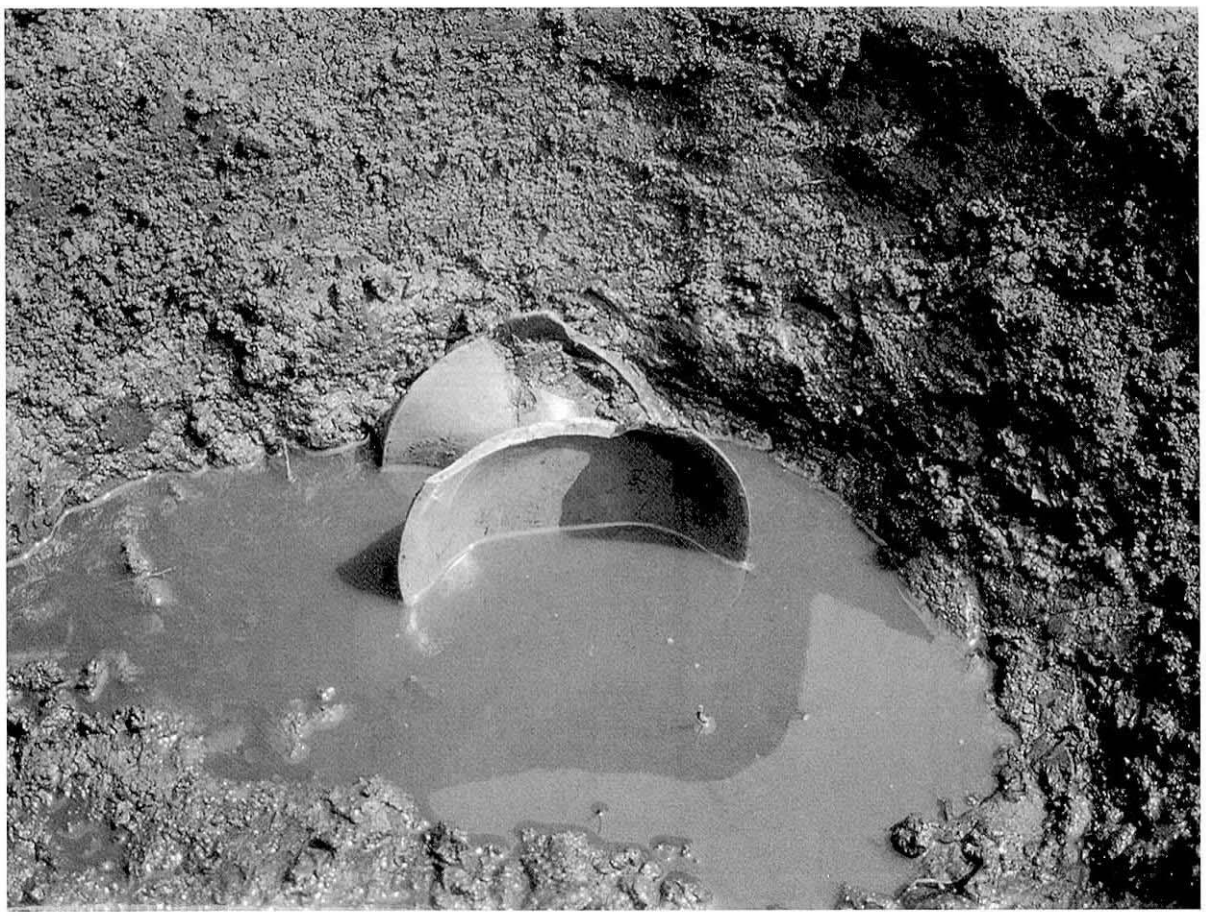
図版 4



(1)　瑞穂遺跡第 2 次調査ＳＫ01

(2)　瑞穂遺跡第 2 次調査風倒木痕

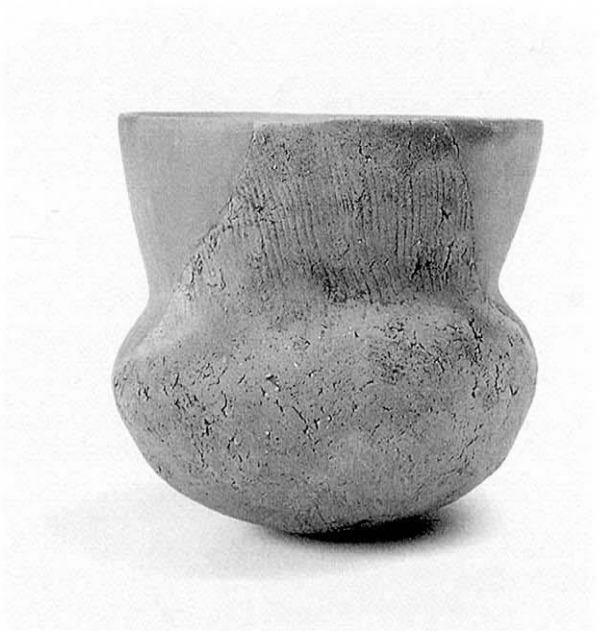
(1)　瑞穂遺跡第２次調査ＳＥ01

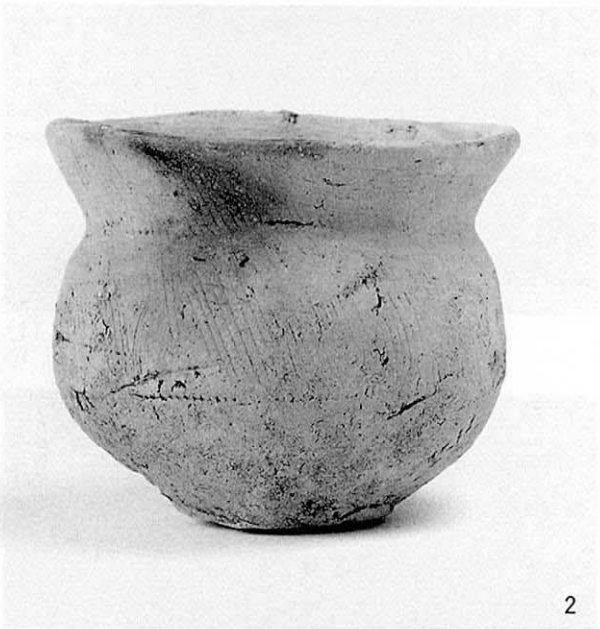


(2)　瑞穂遺跡第２次調査ＳＥ01遺物出土状態

図版 6

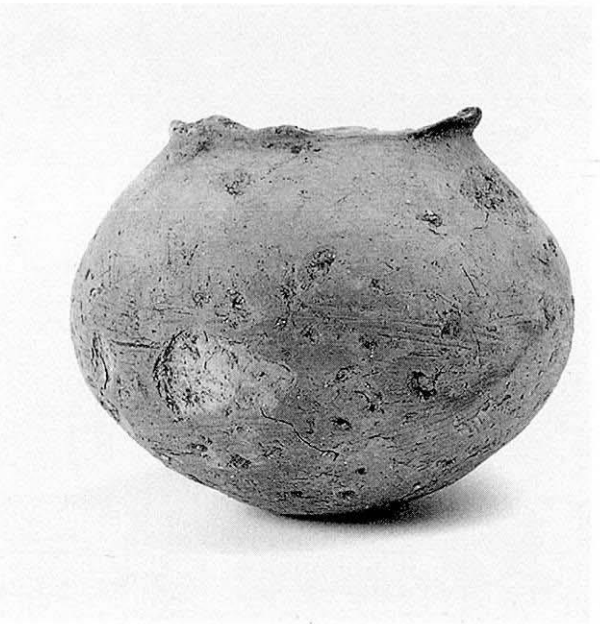
1


4


2

5

3


6

瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）

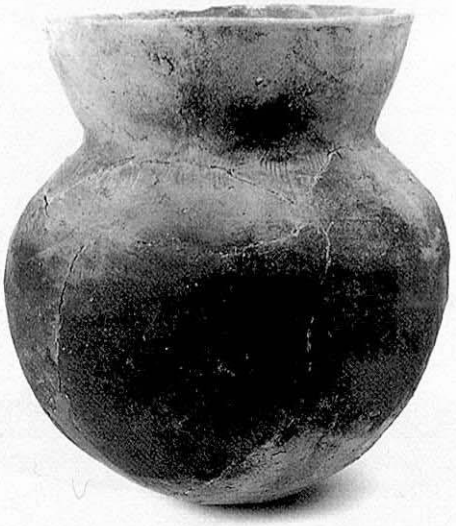
7

10

8

11

9



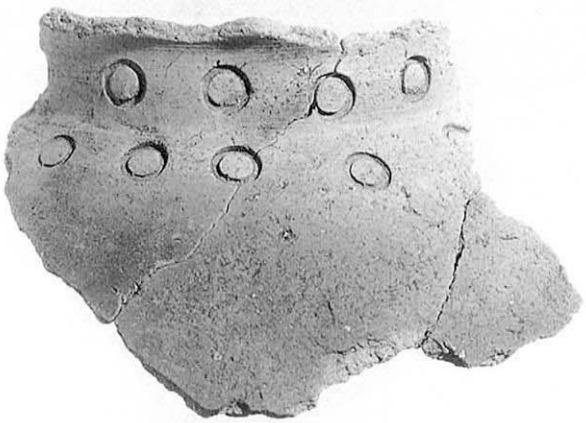
12

瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）

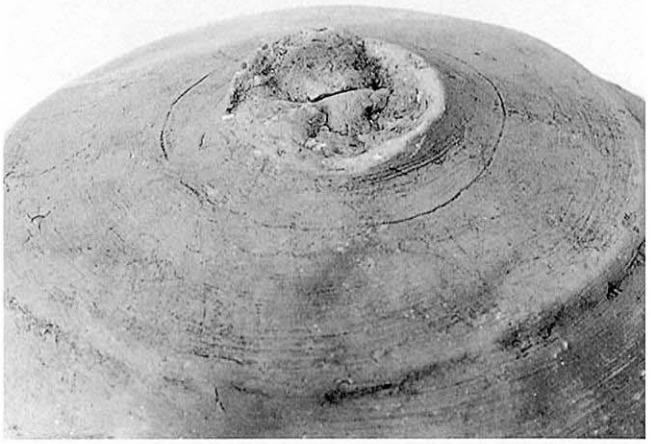
図版 8

13

16



14



17

16

17

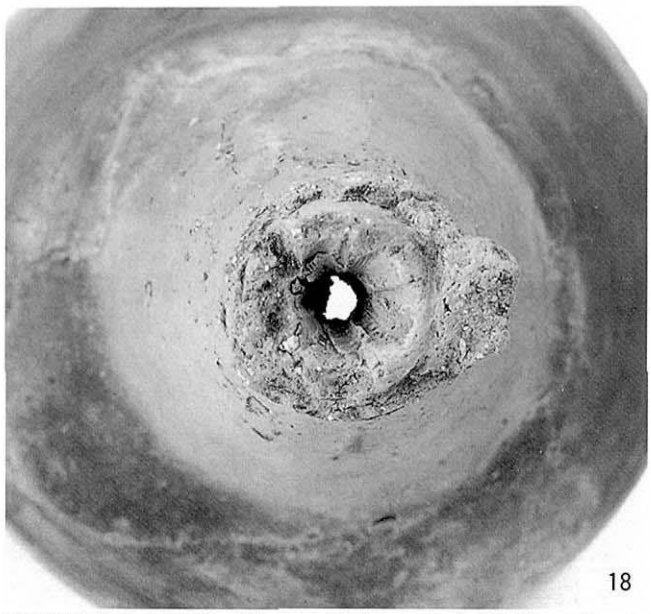
瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）

18

19

18

20



18

瑞穂遺跡出土遺物（第２次調査ＳＥ01）（石鏃、ピット23）

原ノ畑遺跡

(1)　原ノ畑遺跡第１次調査地全景（北から）

(2)　原ノ畑遺跡第１次調査地全景（西から）

図版12

(1)　原ノ畑遺跡第２次調査地東半（西から）

(2)　原ノ畑遺跡第２次調査地東半（東から）

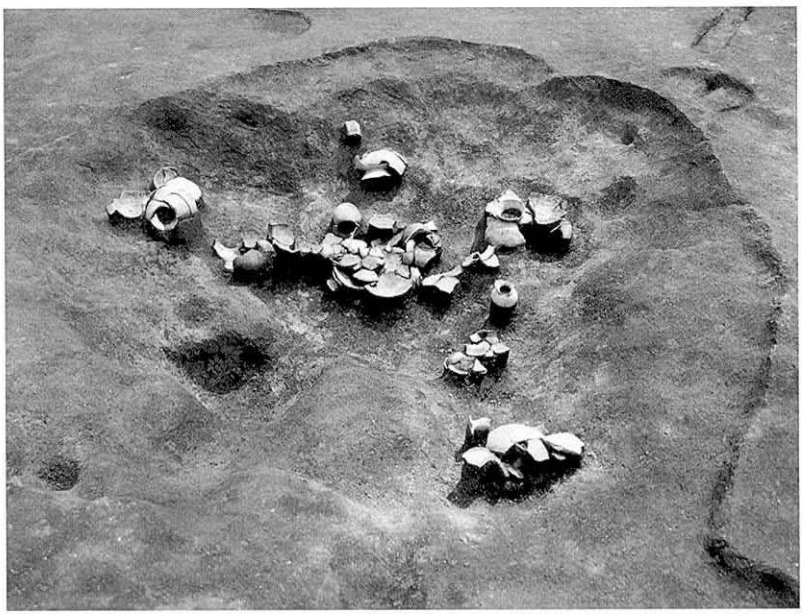
(1)　原ノ畑遺跡第２次調査１号竪穴住居跡（西から）

(2)　原ノ畑遺跡第２次調査ＳＫ02（東から）

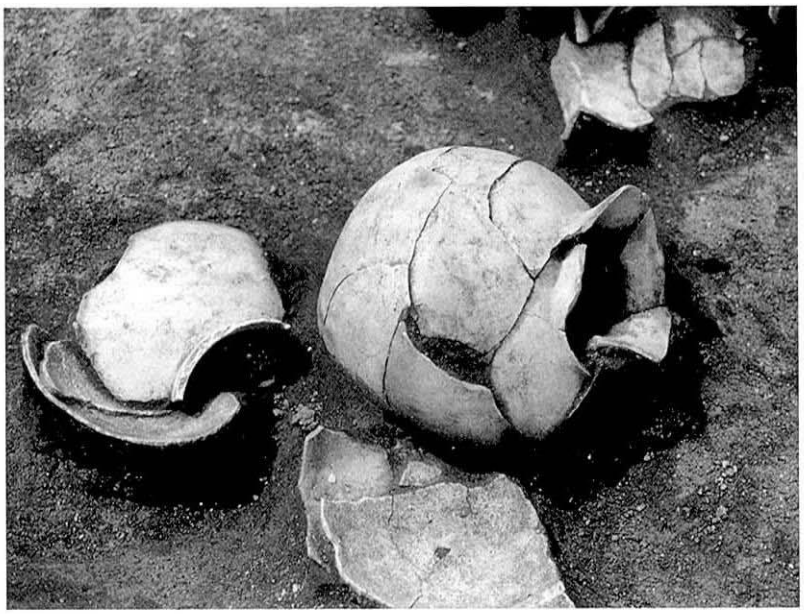
図版14

(1)　原ノ畑遺跡第２次調査ＳＫ05・ＳＫ06

(2)　原ノ畑遺跡第２次調査ＳＫ05遺物出土状態



(1)　原ノ畑遺跡第２次調査
ＳＫ06



(2)　原ノ畑遺跡第２次調査
ＳＫ06遺物出土状態

(3)　原ノ畑遺跡第２次調査
ＳＫ06遺物出土状態

図版16

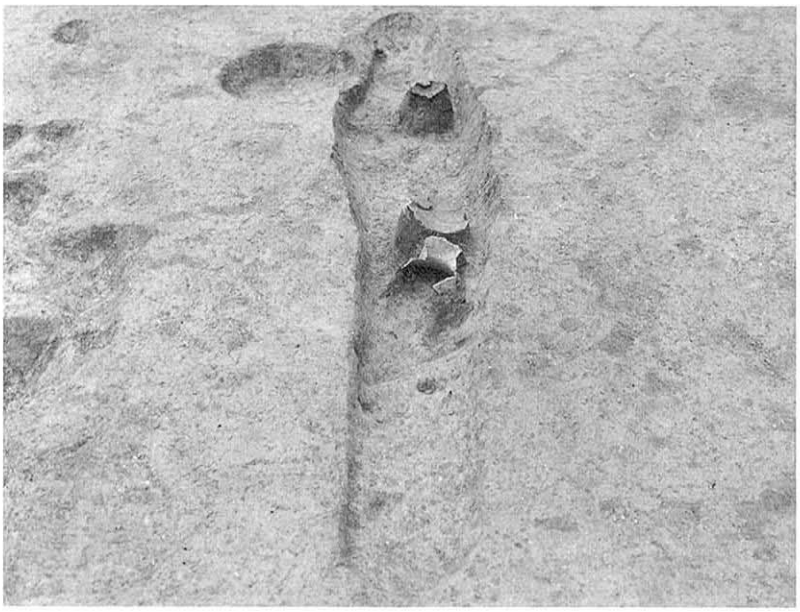
(1)　原ノ畑遺跡第３次調査地全景（西から）

(2)　原ノ畑遺跡第３次調査地全景（南から）

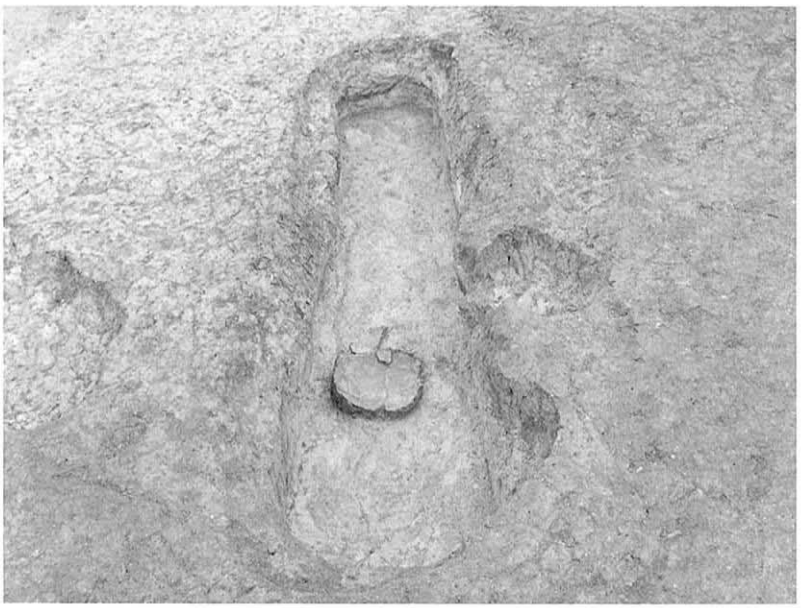
(1)　原ノ畑遺跡第４次調査地全景（気球写真）

(2)　原ノ畑遺跡第４次調査地全景（気球写真）

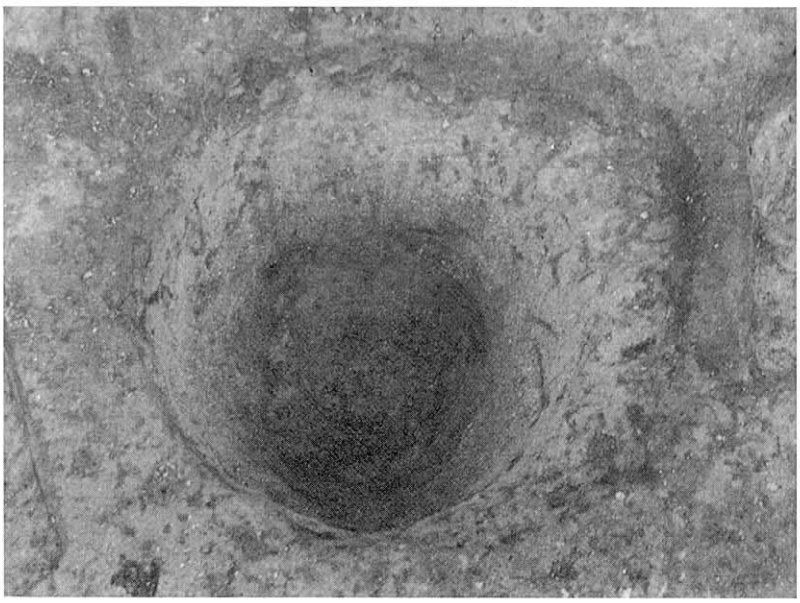
図版18



(1)　原ノ畑遺跡第４次調査
ＳＫ09



(2)　原ノ畑遺跡第４次調査
ＳＫ10



(3)　原ノ畑遺跡第４次調査
ＳＥ01

1

29

15

32

17

33

19

34

21

原ノ畑遺跡出土遺物（１：第１次調査ＳＤ01）（15～29：１号竪穴住居跡）（33・34：ＳＫ02）

37

41

39

42

40

43

原ノ畑遺跡出土遺物（37～43：ＳＫ02）

44

50

51

47

52

53

48

54

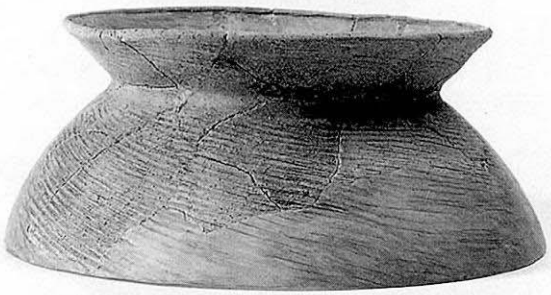
原ノ畑遺跡出土遺物（44：ＳＫ02、47～54：ＳＫ05）

55

65

57

68



62

69

原ノ畑遺跡出土遺物（55～65：ＳＫ05）（68～69：ＳＫ06）

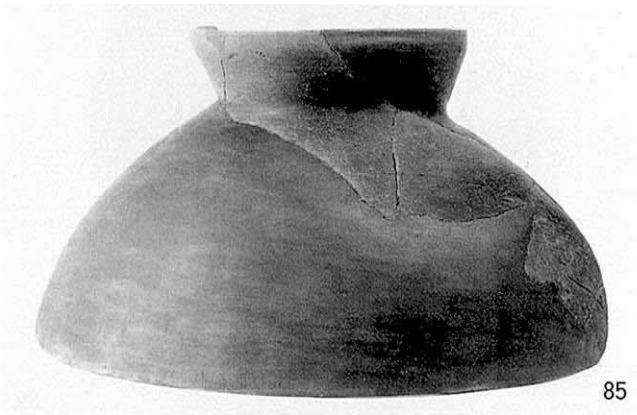
70

80

71

84

73


85

76

87

原ノ畑遺跡出土遺物（ＳＫ06）

88

89

90

92

95

97

100

原ノ畑遺跡出土遺物（ＳＫ06）

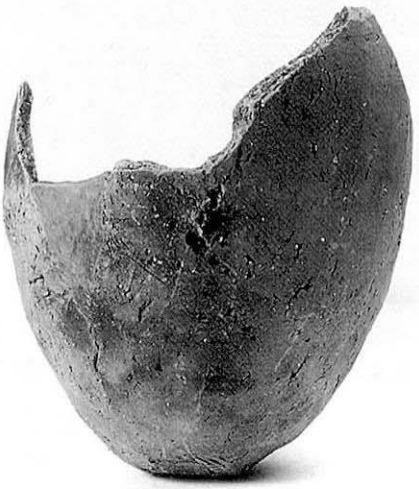
102

105

103

106

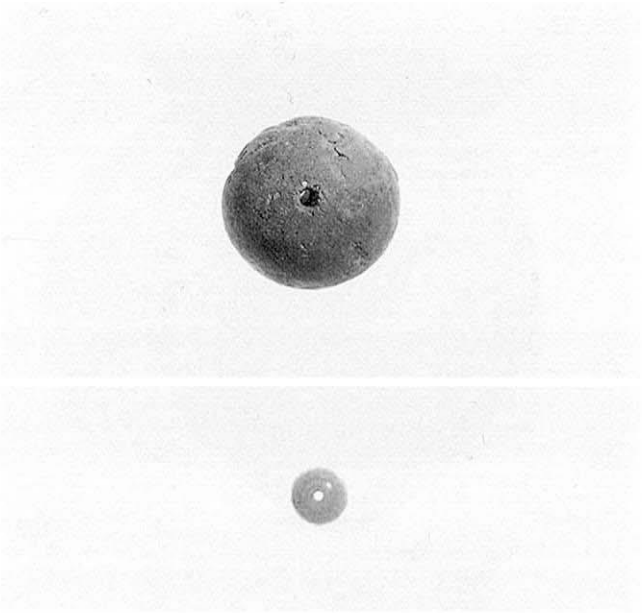
104



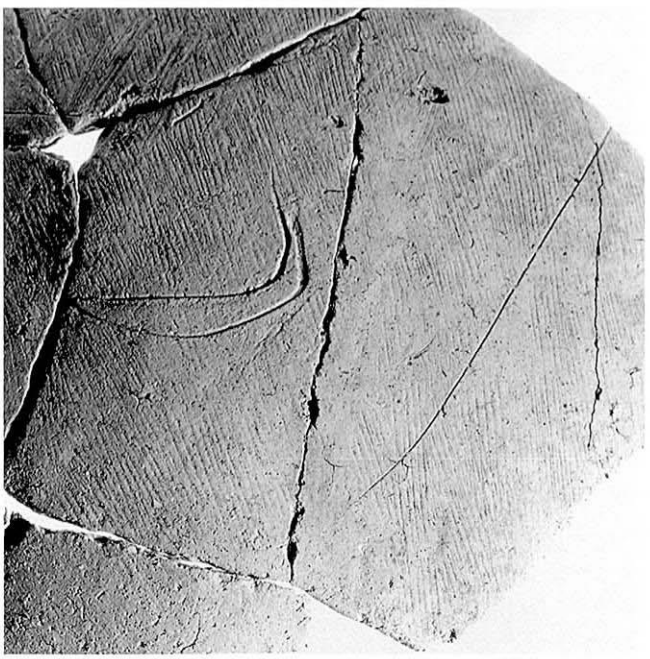
109

原ノ畑遺跡出土遺物（102～106：ＳＫ06、109：ピット13）

111



112



原ノ畑遺跡出土遺物(111：４次調査ＳＫ09、112：４次調査ＳＸ03、土玉：１次調査ＳＤ01、小玉：４次調査ピット８)

報告書抄録

ふりがな	みずほ・はらのはたいせき
書名	瑞穂・原ノ畑遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第57集
編著者名	舟山　良一
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	㊦816－8510　福岡県大野城市曙町２－２－１　TEL092－501－2211
発行年月日	西暦2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みずほ 瑞穂遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 みずほまち 瑞穂町			33°31′50″	130°28′44″	1991.9.20 ～ 1998.5.28 （２回）	約 400㎡	寮 共同住宅
はらのはた 原ノ畑遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 しらきばる 白木原			33°31′37″	130°29′20″	1988.5.9 ～ 1996.2.27 （４回）	約 1,600㎡	共同住宅 店舗

所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瑞穂遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 中世 近世	溝 井戸 掘立柱建物	弥生土器 土師器 陶器 石器	明確にわかる遺構としては古墳時代中期の遺構が検出されたが全体像は未詳
原ノ畑遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡 土坑 溝 掘立柱建物	土師器 須恵器 瓦	古墳時代前期の集落と奈良時代の建物跡

大野城市文化財調査報告書

第57集

平成13年３月31日

発行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目２－１

印刷　鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市古枝甲249番地の３